
俺と彼女と妹と。

柴わんこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺と彼女と妹と。

【Nコード】

N7679K

【作者名】

柴わんこ

【あらすじ】

どこにでもいるような高校生こと平沢有二は恋に悩んでいたしかし、そんなことどうでもよかった、いつの間にか彼女が出来たのだ

しかもその相手は校内でも人気のある美人で、有二の好きな相手でもあって2人は恋仲になりましたエンドにはならない！むしろこの2人はどんなエンドを迎えるのか？！そして妹はそれを許すのか？！妹の気持ちは兄に届くのか？！まさかまさかの妹エンドへ突入してしまうのか！！？

というわけで有二と彼女と妹が繰り出すラブコメディの始まりッ！！
170000PVに25000ユニーク！ 夢なのか？！いいや…
夢じゃない！！

うわ嬉しいー！！ これからもよろしくお願いします！

現在お気に入り件数【70件】を確認しました！

1話（前書き）

あらすじ…もしかしたら脱線する恐れがあります

P S ・中学生の頃から始めたこの作品ですが、やはり、明らかに文章の雰囲気が一番最近のと違います。なので、お暇とあらば、最新話まで読んでみてください。一話一話が短いので恐らく最新話にたどり着くまでそう時間はかからないでしょう。では僕の作品をどうぞ楽しんでってください（2010/12/27）

1話

いつてきまーす、と元気よく飛び出て行ったのは
ありかわみさき

有川美咲 14歳中3 女子

「それじゃ」

その後を追うように飛び出ていったのは

ありかわよしひと

有川善人 15歳高1 男子

「美咲ー！ おっはよー」

と、声をかけたのは平沢ひらわこよい 14歳中3女子

「おはようこよい、ねね昨日のテレビ見た？」

よくあるありがちな会話が繰り広げられていた。

「ええー昨日は見てないよ？面白いのやってた？」

「まあねーって、なんかあったの？」

と、美咲が質問する、これもありがちな会話である。

「えへへーお兄ちゃんの寝顔をケータイで撮ってたんだあ」

……珍しい会話だった。

「ああ、なるほど……」

こよいはすぐくお兄ちゃん好きだからなあー。このブラコンめ。

「ねえねえ美咲も見る？ 結構いい絵が撮れたんだよ？」

「あたしはパス」

「ふーん……お兄ちゃん可愛いな」

チャイムが鳴り、昼食の休みが始まった。そして当然のように美咲はこよいの近くへ。

「こよい、昼どうする？」

今日は給食ではないので自由に場所を移動しても良い日だった。

「うーんどうしょっかあ」

どうやらこよいもまだ何処で食べるのかを決めていなかったようだ。

「じゃあ図書室にでも行つて弁当食べようか？」

こういう日には決まって2人は図書室に行つて食べるのが毎回のお決まり事となっている。

「うんいいよー」

すんなり話が進み、場所が確定したようだ。

「やつぱりここだねー」2人は図書室へと移動する。

はぁーとため息をつきながら席に着く、しばらく何を話そうかと思つていた時

「ねえ美咲？」とこよいが話を切り出し美咲は、ん？と耳だけを傾けた。

するとこよいは「美咲つてもしかして衛くんのが好きなの？」と問い詰め始めた。

対して美咲は思わず口の中のプチトマトを発射しそうになった……が！美咲は何とか頑張つてそれを防いだ

「いついやいやそんなこと無いってマジでありえないっつーの」

必死に反論する美咲、でもその顔は赤く、それを見てこよいはおやあー？ と確信し、そこからさらにそうなんでしょ？ と追いつちをかけた。

実際、美咲からすると素直に好きという言葉が口から出せないだ

けの

話なのだがどうやら【だけ】ではすまない話らしい。

「ええーぜったい衛くんまとものことが好きだと思っただけだなあ」

すでに分かってしまったこよいにとつては今の美咲は格好の獲物だ。否定すると分かって好きなんでしょ？好きなんでしょ？とこよいは質問を続けた……。

その日の夜美咲は自分の部屋で図書室での話を思い出していた。

「衛くんかあー」

ハアーと深くため息をつく。

「衛くんって彼女とかいないのかな？……いそうだなあ」
「どうやら恋の悩み事らしい。」

「明日、少しでもお話できないかな」

「どうやって衛に近づけば良いか分らないんだよね」せめて席が隣になれば良いのに……

「でも…頑張るしかないよね!」

「そう心に決めた美咲はガバツと勢いよく布団を掛けた……」

その日の朝 こよいの大好きなお兄ちゃんこと、有ゆうじ二の高校にて…
「なあ有二」

と声をかけるのは美咲の兄、善人だった。この二人、兄妹揃ってクラスメートだったりする。

「なに？ 善人、なんかあったのか？」

「ああそれがな久しぶりに口げんかしたんだよ」

口げんかねえ…俺は一生やらないような気がするわ……あいつとケンカは危なすぎる。次の日記憶喪失になる危険性があるからな……。

「誰と？ やっぱりお前のことだから妹とか？」

「正解！ ご褒美としてデコピンをお見舞いしてあげます」

「えっ！？ なんで?!」 痛ッ！

何で正解したのに罰が送られにやなんのだ、それに少しは手加減しろよ…

「痛つたいな、何すんだよ！ …… つか何でけんかが起こったんだ？」

すると自分は悪くありませんよーという口調で善人は話し出した。
「俺さ、ノックしないで部屋に入ったんだ、するとさーいきなりさーお兄ちゃんのバカーってさ」

「それはお前が悪い、あとちゃんと人の部屋にはいるときくらいノックはしろ」

これが普通の妹…うちの妹とは大違いだ、だつてさ

その日の夜、うちの妹ことこよいは兄有二を待っていた。

そろそろお兄ちゃん帰ってくるかな？

「ただいまー」

お兄ちゃんが帰ってきた！私はこの時を待っていたあ！……ダッシュ！

「おつかえりーお兄ちゃん！ー」

ダッシュしたこよいはそのまま勢いよく有二に飛びついた。

「うわッ！ こよい！ いきなり飛びつくなー！」

有二は慌ててこよいを体で受け止めた、ドサッという音を立て勢いは止まった。

「だつて遅いんだもん帰ってくるのが」

笑顔でこよいはそう言った。

「だからって飛びつくな！ それとほつぺたスリスリするな、はっははくつくすぐつたい、離れてくれこよいッダメだくすぐつたい」

「絶対離れないもん」

こよいからするとどこにでもあるような「一般家庭」なのだ。

「まったく、くすぐつたいんだよスリスリされると」

腕に抱きついてくるこよいを無視しつつ、居間へと移動した。居間へ入った瞬間、こよいは有二の腕からすり抜けて台所から2つのお皿を運んできた。

「えへへー今日はお兄ちゃんの大好きなハンバーグでーす」

「やった。俺こよいの作るハンバーグ好きなんだよなー」

「えっ！ ホント！？」

「まあな、【ありがと】なこよい」

「えへへーもう一回言ってー」

「いただきまーす」

「ねえーもう一回言ってよ」

そんなこんなで有二はハンバーグを食べ終わった。2人にはどういったわけか親が居ない。家事はほとんどこよいがやっている。ちなみに有二も手伝えることは手伝っている。

自炊が出来ない有二にとってこよいの存在はとても大きいものになつていた……。

こよいは有二のことが好きだ、でもそれは叶うはずがない恋、こ
よいはそれを自覚している。それでもこよいは自分に正直に恋愛を
しているのだ

たとえそれが叶わないと知りながらも……。

1 話（後書き）

初めまして柴わんこと申す者です

よかつたら感想を聞かせてください、実は動力が感想だったりして…
気に入っていただけたらお気に入り追加してもらうつと嬉しいです

2話（前書き）

ごめんなさいまだ本編ですらありませんね（汗
楽しく見ていただけるなら結構です、声に出して笑うのならなおさ
ら結構です

2話

俺は今日こそ咲月^{さつき}さんに声をかけようと思う！

と、やる気満々なのは有二である。彼は昼休み、友達の善人を連れて咲月を待っていた。

その連れの善人は案の定フラれるであろう有二を全力で笑ってやるつもりだった……のだがそんな二人に予想外な出来事が待っていた。

「よしっ！　今が絶好のチャンス！　咲月さんの周りには誰もいないッ！」

有二はガッツポーズし、善人に小声で行って来ると言う和有二は咲月の元へと走り出した。

「おう、ビシッと言って来い」

と、善人は脳内で逝って来いと変換し、その意味を込めグッジョブ！　と勢いよく親指を有二に突きたててそのまま会話が聞こえる範囲へと移動を開始した。

有二の胸はドキドキ高鳴っていた。

やべえ…今ごろになって緊張してきた。

それでも有二はその足を止めない、言うだけ言おうと思っているからだ。

結果がどうであれそんなのは有二には関係なかった。

有二は咲月に近づき声を掛けようとした、その瞬間　。

『姫川^{ひめかわ}さんっ！　これ受け取ってください！』

『姫川さん俺と…付き合っとうおうあああ！』

『ハッ、お前らに告白する資格はないっ！　なぜなら俺が先に来たからだ！』

と、まあ数名の男子が咲月の下へ群がっていた。

『うつせえ！　んなの関係ねえよ！』

『いいやあるねー！　だって割り込みはいけないことじゃんかよ』

『ハア！？　そんな理由で俺は殴られたのかよ……　って姫川さんが俺に近づいてくるぞ！』

『バーカ！　これは俺のところへ来ているんだッ！』

『うつせえヴァーカ！！』

いつの間にかケンカが始まっていた、それを見た有二是巻き込まれたくないと思いそのまま回れ右をして善人のところへ戻ろうとしていたが、彼は呼び止められた。

「ねえねえその～もしかして…有二君？」

と、有二是言われた。しかも咲月に言われたのだ。

当たり前のように有二是ドキッとした。跳ね上がる心拍数、止まらないドキドキ。

それはまるで一瞬心臓が止まったかのよう。いや　心臓が止まった。

どうやら本当に気絶しているらしい、咲月は申し訳なさそうに有二の顔を覗き込む。

有二是口を開いたまま白目をむいていた……カオスな光景であった。

それを見ると咲月は、うわぁ～なんかあまり見なくなかったな～とだけ言つと有二の口を閉じ、目を瞑らせ、そして、よっこいしょ。との掛け声とともに有二を担ぎ何故か自宅へと歩き始めた……ちなみにけんかしている奴らは皆気づいていないようだ。

しかし、それを見たものがいた……そう付添い人の善人だ、善人はこの光景を見るや否や目を何度もこすってはもう一度、こすってはもう一度を繰り返していた。

そんな目の前の光景に啞然としている彼の視点で見てみよう。

やつべえ超ウケルんですけどあはは！ あはは！ 有二のやつ気絶してんじゃねえのかあ？ うつわー姫川さん思いつきり見てるーははは……ウケルははは。でもさっきのあれはなに？ 今何が起きた？ 姫川さんが有二をおんぶしていったように見えただけ……お願いだ夢なら醒めろッ！

俺は……俺はッ！ 俺は全力であいつの不幸を笑ってやるんだ！

！（問題発言）

なあ夢なら醒めてくれよ……あいつまで幸せになったら俺は……。

そんな善人を見て、一人の生徒が話しかけた。

「おい善人！ 起きろ！ 目が死んでるぞ？ えっと……こういうのなんて言うんだっけ？」

「俺なんてただの……くそっ……」

「ああそうだったあれだ、ようやく思い出した」
すると彼は善人にもう一度声を掛けた。

「おい、善人？ ……ゴホン。『返事が無い！ ただのしかヴァアアアアッ！』」

何かを言いかけた彼は善人の目覚めのパンチを喰らってしまった。善人は彼を殴った後、ふらふらと千鳥足で歩き、そしてあっ……

とか言いながら倒れた。

もう立つのさえ面倒になってしまったのだろうか……善人はそのままはふく前進で教室へと帰っていった。

起き上がった時の彼の制服は……言うまでもないだろう。もし彼の悲惨な制服を見たのなら「モップ掛けお疲れ」と言ってやってほしいものだ。

その頃、有二を拉致って行った咲月はというと？

「なんか知らないけど有二君ゲットおーへっ……へへっ」

と、彼女を知る者が見たら恐らく耳を疑うであろうセリフを呟きながら彼女は有二を背負い自宅へ無事、帰宅した……。

いや、詳しく言うと咲月自身は無事だった。

と、言うのも、いつもは頭すれすれでセーフの看板が背中におぶった有二の頭に直撃したのだった。

ともあれ、自室へ行き、咲月は有二をベッドへ降ろした……と同時になんかドキドキしてくるのを彼女は感じた。

「やっぱり恥ずかしいよね」でも見てるときはもっと恥ずかしいんだろうな」

やっぱり……寝てるときにされちゃうってかわいそうかも……。

「でっでも？ やるなら？ 今しかないんじゃない……でもなんだか恥ずかしいな」

だよな……だってこんな事するの初めてだもん……。

有二には少し申し訳ないな」思いつつ、咲月は有二にそれを近づ

けていった。

咲月のと有二のが近づいていく……咲月側からすると自然に有二の顔が近くなってくるのだから咲月の頬はますます赤くなった。もう心臓の音なんてこの部屋隅々に聞こえそうなくらいだった。

でも今がチャンスなのだ、今自分が彼に対して何をしたって当の彼にはそれがわからない。

そう、バレなければいいバレなければ……。今がこれ以上とない絶好のチャンス……彼女はバレなきゃ良いバレなきゃ良いんだ、どうか起きないで……どうか起きないでと祈りつつようやくその行動に出た

2 話（後書き）

感想募集中です。 気に入っていただけたらお気に入りにも追加してください

3 話（前書き）

次から本編のスタートです
楽しく読んでもらえれば嬉しいです

3 話

『カシャ!』とケータイ音が部屋に響き渡った……。

咲月は写真を撮り終わると緊張したとかいいながら^{有二}ベッドにダイブした。

いきなり大胆な行動に移った咲月には勝機があった。

咲月がいつもどおり有二の近くにいた時だった。そう、いつもどおり。

その日、咲月は例の如く、大勢の男子に交際を迫られていた。そんな時、有二はその男子共を掻き分け、咲月の手を引き、助けてくれたという逃走劇があったのだ。そして、その時から自分を助けてくれた有二が気になっていた。それから彼女はいつの間にかいつも気づかれないように有二の近くにいた。

たまに善人が『美少女の気配がする!』とか言っただけなのに、なっただけのこともあった。

でもストーリーキングに慣れてきたらそんなことも無くなっていった。

そんな事をしている日が続いたある日、実は有二に告白する者が現れた。

咲月はあまりの急展開に心底不安になった、有二君が取られたらどうしよう取られたらどうしよう……

そんな気持ちを抱えながらいつもどおり有二の声が聞こえる範囲内に隠れて耳を澄ませていた。

お願い、上手く行かないで、ただそう願いながら。

「あつ！ あの！ 呼び出しちゃってごめんね、あのさっ突然なんだけど平沢君って彼女とかいるの……？」

こいつ……！ やっぱり告白する気だ！ と敵意をむき出しにして、心の中で失敗しろーこのやるー！！ と、叫びつつ咲月はその話を聞いていた。

「いやいや俺には彼女なんて居ないよ？」

笑いながら有二はそう答えた。それを聞いた2人は同時に良かった〜と安心した。

しかし咲月はまだ完全に安心することは出来ない、今から始まるのは紛れもなく、告白だからだ。

「じゃ、じゃあさ平沢君、私と……その、えっと……付き合ってくれないかなっ？」

後半声が裏返りながらも勇気を振り絞って女子生徒はそう言った。そう、勇気を出して告白をした。

やっぱり告白か！ そう思った咲月はいつの間にか手を組み、聞こえない程度の声で断れ断れ断れ断れと呟き始めた……。

そしてその問いに対し、有二は笑いながら答えた。

「ごめん…俺付き合うわけには行かないんだ、だって、俺には好きな人が居るんだ」

咲月は良かった〜と心底安心した。でも今度はその【好きな人】が気になって仕方が無くなった。

そんな心配をよそに咲月の気持ちを代弁するかのようにその女子生徒は質問し始めた。

「一体、平沢君の好きな人って誰？ 答えてよ……お願い」

彼女は今精神的にきている。少し声が震えているのだ……。

「ごめん、教えるわけにはいかない」

有二是ハッキリとそう言った。

「なんで?! いいじゃない! 私には教えたって!」

そう言われた女子生徒はムキになっていた。フラれたのが悔しかったんだろう。もう感情が抑えられなくなっている。

それでも有二是教えなかった……なぜなら有二なりの考えがあったからだ。

「ここでもし、あなたに教えたらあなたはその子に危害を加えるかもしれない。多分そんな事しないだろうけどもしそんなことをしたら俺は困るしもちろんその子も困る。そして一番困るのは……【あんた】だ」

急に有二の雰囲気が変わった。いつもは明るい有二がものすごい真剣になっていた。

いつもの有二君から何か変わった……? 咲月はそう感じていた。普段明るく楽しげに過ごす彼の感じは色にしてオレンジ色、しかし、今ここにいる彼の感じは色にして黒か青。

有二是言葉を続けた。

「……だから俺は答えない。それが彼女のためだから」
そう言って彼は去っていった。

しかし、去るのは良いがその途中に咲月が隠れている。

自然と咲月との距離が縮まっていく。

もしここで見つかったらなんとなくやばい気がする。そう思った咲月は口に手を当てて息を殺した……。

徐々に近づいてくる足音。咲月は心臓がバクバクしていた……。

そしてちょうど咲月が隠れている所を通り過ぎた後、有二はつぶ

やいた……いや、つぶやいてしまった。

「俺が好きなのは咲月さんだっつーの……」
「……！」

それを聞いてしまった咲月は当然のごとく驚いた。そして有二の姿が見えなくなった後有二君の好きな人ってあたしだったんだ……うわぁー照れるなあ。と誰にも聞こえない声で咲月は喜び大きくガツポーズをした。同時に女子生徒に対して『ざまあみる！』と思いつき悪なセリフを心で嬉しそうに叫んだのはここだけの話としておこう。

そしてそんな彼女は例の女子生徒を気にしつつ、教室へと戻って行った。楽しげにスキップを踏みながら。

そう、ここで聞いた言葉こそ【勝機】と言うやつだった。
告白しても有二君はあたしの事が好きなんだから大丈夫でしょ。
そう思っていた。

日も暮れ、薄暗い部屋に二人はいた。もうすぐ夕飯時と思った咲月はすぐそこで寝ている（気絶している）有二のためにとりあえずオムライスでも作ってやろうと思っていた。それ以前にやってみたことがあった。

とにかく、怪我もなく、無事を作り終えた咲月は作りたてのそれを片手に有二を起こしに部屋へ急いだ。

「おーい夜だぞー起きてー」
珍しい起こし方だなと思いつつ声を掛け続ける。

するとあと五分……と有二がつぶやいた、それが面白かったのか
咲月は笑わないようにと口を手で塞いでいた。

笑いがおさまると今度はほつぺたを突きに掛かった。
つんつん、と突いては起きるか？ 起きるか？ とハラハラしながら有二の目を見る。

しかし効き目がないと分るともたくさん遊んだのもういいかげんに、起こしてあげようか。

そう思い、有二の耳元で、「起きて……」と、ささやいてみた、
すると有二の体がビクウウと震え、ようやく有二は目を醒ました。

「ん?! あれ? 俺……あれ? 何で咲月さんが? そしてここ
は……?」

まあなんとも分りやすいリアクションなんだろうと笑いつつ咲月
は事情を説明した。

いろいろと説明され、しばらく沈黙が続くと、有二はそうだった
んだと言呟いた。

そしてそうなんだよーと咲月は言い返した。特に話すことがなくな
った咲月はさっきの作りたてのオムライスを有二の前に差し出し
た。

「えつと……俺に?」

「うん、そうだよー」

「で……これって……もしかして……? まさか」

「うん、文字どおりそのまさか……だよ? でさ答えは?」

答えが分っているとはいえ、少し恥ずかしかった。

しかし、予想通りの答えが返ってきて咲月は安心した……。

「もちろんYES！」
そう有二は答えたのだ。

その答えを聞き咲月は有二に抱きついた。

「やったー！ 成功した成功したよー！！」

「あ、あははゝまさか咲月さんが告白してくるなんて思わなかったよ……夢じゃないよね？これ」

普通の男子なら凄くドキドキするようなシチュエーションだが、こよいのせいか、それともおかげなのか、有二はある意味、耐性が付いていたため咲月の予想と裏腹に至って抱きつかれても普通通りに接する事が出来た。

充分に。そこからさらに、余計な喜びを分かち合った後、有二は咲月のオムライスを食べ始めた。

「あ！ これおいしいよ！」

「そう？！ やった褒められちゃった」

……ちなみにそのオムライスにはケチャップで【付き合ってくれる？】と頑張って書かれていたんだとか。

3 話（後書き）

明日から学校です… 1 週間に 1 話ペースであげると思います
それを判ってもらいたいです、お気に入り追加してもらえると嬉しいです

感想も書いていただけたらうれしいです（批判だけは避けたいけど…
レビューとか書いてくれる人がいらっしたら感謝します
ではこの辺で失礼します

4 話（前書き）

本編スタートです

4話

姫川咲月、彼女は周りの男子から注目を浴びている女子だ、それゆえに彼女の席の隣に決まった男子は座っているだけで顔が赤くなることがある。『一万円でその席を代わってくれ!』なんてこともある。

大抵の男子は彼女のことを好きであり、それゆえ、とある女子が頑張つて男子に告白しても『俺、好きな人が居るんだ、だから……ごめん』と言われフラれてしまうことが多々ある。結果的に、姫川咲月のせいで告白が失敗した女子は校内のおそよ半分に近いんだとか……。

そして今その咲月は有二に告白し、OKを貰った。
他の男子がコレを知ったらどうなるのだろうか……。

オムライスを食べ、喜びを分かち合い、しばらくお話をしたところで有二は帰ろうとした。

が、咲月に止められた。泊まっていきなよ。そう言われたが、それでも悪いからと帰ろうとしたら今度はまさかの手刀が飛んでき、有二はこの日2度目の気絶を経験することになった。

それからの事、咲月は写真撮ったりツーショット撮ったりと『なんでもあり』の、この状況を楽しんだ……それより有二は大丈夫なのだろうか。

やりたい放題していると咲月はあることに気づく。

「それにしても有二君って呼ぶのもあれだしな〜? あっそうだよちゃんでもいいんじゃない?! そうだよ有ちゃんが良いよー。うんうんそうしようーそうしようー」

そう呼ばうと決めた咲月は有ちゃん有ちゃんと嬉しそうに呟くと

有二の隣で眠りについた……。が、実際は恥ずかしくて恥ずかしくてなかなか眠れずにいたんだとか……。

別の場所で、その事件は起こっていた。

有二が帰らない（帰れない）と言うことは当然、あの人が心配していたのだった。

「お兄ちゃん…帰ってこないな…」

テーブルの上にはお茶碗が2つ、そして台所には美味しそうなスキ焼きの鍋が置いてあった。

こよいはまだ夕食を終えていない。ずっと……ずっと有二の帰りを待っていた。

ケータイで連絡を取ろうとしたが……全く返事が返ってこない。元々2人で暮らしてるこの空間に一人ぼっち……こよいは不安で不安でしかなかった。

お兄ちゃんにもしもの事があつたらどうしよう……。一人になるのは寂しい。

平沢こよい、そして有二。この2人の親は実はお金の問題で育児を放棄し家を出て行ってしまった。

まだ2人が幼い時だったため有二もこよいも親の顔は知らないでいる。と、言うよりどんな顔だか分からないの方がしっくり来るかもしれない。

それから2人は母方の親に預けられ育った。

それから10数年経ったある日、有二是高校へ行ったら1人生活をすると言い出した。

それは自分がこの家庭において迷惑な存在なのだと判断した上での意見だった。

それに自分が出て行けばこよいも少しは俺がいなくなった分、裕福な生活が出来る和有二は思っていたのだ。

でもそれは違った。こよいにとつての幸せは有二と居ることであり、それを聞いたこよいは「こよいも行く！」と有二に言った……。いや、叫んだそうだ。

その意見を有二は反対した。1人だったらあの仕送りで何とかなる。でも2人だとどうだろう。

そう考えての反対だった。

そんな有二にこよいはご飯は？洗濯は家事とかちゃんとできるの？と核を突いた質問し、その質問に言葉を詰まらせる兄に、ほぼ強引、いや、10割がた強引についていくことに成功した。

そうと決まればこよいは2人生活の準備を始めた。

勉強を放り出してまで料理修行に励んだ。もちろん有二のために……。

始めは分量を間違えたりやけどをしたり指を切ったりと散々だったのだがそれでもこよいはくじけなかった。ただ有二の【ありがと】が聞きたいがために……。

そして今がある、問題になっていたお金については何とか解決した。

こよいが手料理を作ってくれるおかげで安上がりで済んだのだ。わざわざ値引きシールの貼ってある弁当を買わなくても済んだ。

そういった日々を送り、そして今に至るといふわけだ。

こよいは遠くなる意識を必死にこらえていた。

「まだ…帰ってこない……」

あれからどれくらい時間が経っただろう。ふと時計に目をやると短い針が12を指していた。

涙が流れてきた…すぐに拭き取った。

でない和有二が帰ってきたときに笑顔で迎えることが出来ないからだ……それでも涙は止まらなかった……。

「遅いなあ、お兄ちゃん……」

溢れる涙を拭い、泣き声を抑えながらこよいは夜中遅くまで待ち続けた。

その部屋にはずっと1人孤独な少女の泣き声が響いていた……。

4 話（後書き）

今日は入学式だけだったので早く終わりました、なので書きました感想待ってます、レビューしてくださる方がいらっしたら嬉しいです

お気に入りに入れてくださる方がいらっしてもなおさら嬉しいです

ではこの辺で失礼します

5 話（前書き）

感想お待ちしております。

5話

有二は目が覚めた。と同時にうわあっ!?!と大声を出した。
何故そんな声をあげてしまったのかと言うと、有二のすぐ傍で咲月が寝ていたからだった。

思わず有二は口を塞ぐが遅かった。咲月はその声で起きてしまった。

「ふあゝあ、あれゝ?有ちゃん起きたんだあー」

「……有ちゃん?それって俺のこと?」

急に有ちゃんと呼び名が変わっていることに少々有二は戸惑った。

「そっだよゝ有二だから有ちゃん、おかしくないでしょ?」

「そりゃそっただけど…」

もしかしてこれが寝ボケているってやつか?

なんか結構危ないオーラが出てるんですけど…こう…大人なカンジが…ちらリズムが。

半開きの目に、ニヤツと笑う口元、何かたくらんでるとしか有二に

は思えなかった。

その予感は的中した……。

「さて問題でゝす、今日は一体何曜日でしょう…?か?」

嬉しそうなトーンで問題を出してきた。

「今日は…土曜日だっけ?」

昨日が金曜だから今日は土曜で間違いないはず……。

「正解!なのでゝ今日は学校はお休みでゝす、というわけでデートだゝ!」

えっ?…デート?…俺にとって始めての…デート…それが…咲月さんとかゝ。

いやいや待て待て、もっと冷静になれ何か忘れてるぞ俺…何かを忘れてるんだけど…わからない。

とりあえず有二は何となく、ケータイを開いた。そして目を疑った……！

「ええええ！！着信履歴が36件も！！？」

一体何があつたんだと下に下に履歴を確認する有二、確認するにつれどんどん顔が引きつっていった。

「全部こよいからだ……！まさか！俺が昨日帰らなかったから心配していたのか……！？」

こよいの事だ。きつとそうに違う……そう感じた有二は頭をフルに回転させ始めた。

こよいの様子を見ておきたい。でもデートに出かけるんだからどうにか一旦家に帰る口実を……。

ん？待てよ？そういえば俺は今制服のままじゃないか……！
そっかそっかこれはいけるぞよしっ！

「ね、ねえ咲月さん、デートって何処へ行くの？」

「うーんそうだねー……あっカラオケにしようカラオケ」

と言うわけでとりあえず二人はカラオケ店に行くことが決まった。それから有二はさっき思いついたことをそのまま咲月に話した。

「でさ、咲月さん」

「何？有ちゃん」

「俺さ、制服のままじゃん、だからさ私服に着替えたいんだけどいいかな？」

「うーん……まあいつか、私服の有ちゃん気になるし」

「じゃそういうわけでいったん家へ戻るね。なるべく急ぐからそれまで待っててね？」

「うん待ってる、あたしずっと待ってる…あなたが戻ってこなくてもあたし待ってるから」

「…まだ寝ボケてるの？それに何？その戦地へ行く恋人を送り出すようなセリフは」

「うーん、ここはスルーして欲しかったな」

「あつそうなんだ、ここスルーなんだ」

俺なら突っ込んで欲しいけどな。そう思いつつ有二是ドアノブに手を掛け、部屋を出て行った。

「有ちゃん早く戻ってきてねー」

ばいばい、と咲月は有二の背中に手を振った。それからじゃああたしも私服に着替えようかな？そう思い立ち上がったその時

「　　ごめん！玄関って何処にあるの！？」

有二是すぐに戻ってきた。

「おお、お帰り旦那さん」

少しだけからかい気味に咲月はそう言った。

「ただいま奥さん…って何やってんだ俺…」

有二是ちゃんと答えてあげた。

「今の良かったよ」

「ありがと。ってか玄関どこ？」

咲月に教えられた通りに行くとちゃんと外に出ることが出来た。

案外咲月の家の中は広かった。

そこからはもう道が分るから問題なく真っ先に家に帰ることができた。

全速力で我が家へと走った有二、そーっと家のドアを開ける…中に入り

こよいを探す……すると案外すぐに見つけることができた。その後周りを見渡して有二はため息をついた。

それもそうだお茶わんが片付けられてない所を見て有二はこよいがまだ食べてないことが分ってしまったのだから。

一つため息をつき、有二はこよいをそっと抱きかかえ、ベッドへと運んでやった。

運んだら丁寧に布団を掛け、有二はごめんな…ごめんな…と謝りながら頭をさすった。

心なしかこよいが笑ったように見えた。そして有二はさっさと着替えて置き手紙を書いて

咲月の家へと走っていった。

ゼエ…ハア…やばい。きつつー流石に往復を全速力はきついぞ…ハア…ハア

全力で坂を上がり、右へ左へ曲がる有二、そしてまた右へ曲がろうとしたその時

「おっと！！！」

有二はあちら側から来た女の子とぶつかりそうになりこのままじゃ

ぶつかると思感した有二はとつさに次の行動に出た。

ぶつかりと予想した上でその子を受け止めに入っただった。

「ごめん！大丈夫っ？！」

有二はとつさに無事か確認する。

有二は受け止めることについてはすごく得意なのだ…誰かさんのせいだ……。

「あつ、はい大丈夫です」

彼女は本当に有二のおかげで何ひとつの怪我もなかった。

「良かった〜じゃ俺急いでるから」

「あ！待つて待つて！」

急に大声を出しその子は有二を引きとめた。

「ん？どうした？」

「あのー名前を聞いても良いですか？」

少しの間を置いてその子は名前を尋ねた。

名前？…まあ助けてくれた人の名前を聞くのはおかしくはないよな

「ああー俺の名前は平沢有二、じゃというわけで」

さつさと咲月さんのところへ戻りたい有二はすぐに名前を告げ、回れ右をして歩き始めた。

「呼び止めちゃってすいませんでした」

「いやいや良いって」

そう言つて有二はまた走り出した。

ようやく有二は咲月の家へ戻つて来た……。

「咲月さん、帰つて来たよー」

その声が山彦のように繰り返される…返事が無いからだ。

あれ？聞こえてないのかな…上がったも良いのかな？

たしかこの上の所が咲月さんの部屋だったよな…そう思い4歩5歩後ずさりをし、有二是道路まで出た。

上を見上げ、カーテンが閉まっている窓に向けてもう一回呼ぼうかと思っっている時だった。

「おつかえりー有ちゃん！」

咲月が有二へ向けて走ってきた。ドアが開いていることもありその勢いは止まることなく

有二のところまで走ってくる。これは多分、よしっ！俺の胸に飛び込んでこいっ！ってシーンだ。

テレビで見たことがあるぞ。そうとなればこちらが取る行動はもう分かっている。

【受け止めればいい】そう、こよいみたく受け止めてやればいいんだ。

有二是両手を前に突き出し咲月を受け止めた。

「咲月さんって軽いんだね」

まず最初に俺はそう思った。

「えー？…もう有ちゃんったら」

何が有ちゃんったら…なのかが分からない。

「じゃあそろそろ行こうか」

その日、2人は夕方まで歌いつくしたんだとか……。

有二と咲月がカラオケ店で熱唱している頃。こよいは目が覚めた。

「あれ？ベッドだ……あつ！」

こよいは有二の置き手紙に気づき、その文章に目を通す。

「まあいつか、お兄ちゃんが無事だったことが分かっただけでも…

…」

良かった。心の底からこよいはそう思った。

ちなみに手紙には6時半頃に帰ると書かれていた。

それを見るとこよいはもう一度ベッドへ入った。まだ眠いからだ。

「起こしてよね？お兄ちゃん……」

そう願ってこよいはもう一度眠りに入った。

5 話（後書き）

さっき見たらPV2222で驚きました、そんな事どうでも良いですよね

すいませんでした

感想などお待ちしております、お気に入り追加してくださると嬉しいです

これからも頑張りますのでどうかこれからもよろしくお願いします

6 話（前書き）

こちら辺から多分、物語が動き出すんじゃないかと思っています
それにしても5日で3000PVです皆さんありがとうございます
では本編をどうぞ

6話

「おーい…こよい、夜だぞ起きてくれー」

歌い疲れた有二は家に帰りこよいを起こそうとしていた。

しばらくするとこよいがあれ？いつの間に帰ったの？と言いながらベッドから出てきた。それを見て有二はこよいに背を向け居間へと戻ろうとした。

しかし背を向けた瞬間、背中に衝撃が来た…！

……どうやらこよいが飛び乗ってきたらしい、仕方なくそのまま居間へと移動し

テーブルについた。もう降りるだろうと思っていたのだがこよいはなかなか降りてくれない。

「こよい？もう降りても良いんじゃないか？」

「ダメーこれは昨日の分も合わせてるんだから」

いやいや昨日も今日も背中に乗るつもりだったのか？

しかしこのままだと夕食が来ない……ってかこよいはいつから食べてないんだ？

とか考えているとグーという音が背中から聞こえた。

「お、お、お兄ちゃんがお腹空いているようだから特別によそってあげる」

と何故か焦りながらこよいが言った。

恥ずかしかったのだろうか？少々ツンデレが混じっている。

……素直にお腹が減ったと言えばいいのにな。それにしてもボケたのかよく分からない。

「まあいつか」

そしてこよいは両手にお鍋を持ってきた。

いただきまーすと言ってすき焼きに手を伸ばす有二。

するとちよつと待ったーと受け皿とお玉を両手に持ったこよいがそれを制した。

こよいは有二の分をそよいはじめた。

……その時から有二は何故かこよいが怒らないことを疑問に思っていた。

こよいは見た感じいつもどうり……。おかしい……。昨日どうしたの？とか聞いてきてもおかしくないのに……。でもこれはこれで良いのか？むしろ怒られないで済むからな……。ってかその理由が

咲月さんのところでお泊りしてたって事になると……こよいは何をやらかすか分からないぞ。

……多分、話を付けに行くんだろうな。こよいの事だし。

そう考えていたら突然ケータイが鳴った。相手は咲月さんだった。

「もしもし？」

俺は少しこよいの視線を気にしつつ電話に出た。

「あつそうなんだ、えっ？じゃ今は1人暮らしなんだ」

こよいは何を話しているか分からない、もちろん誰と話しているかも分からない。

ちなみに電話の内容は咲月の【知ってて欲しい事】という内容だった。

「えっ…？じゃあ咲月さんって…」
不意に出た咲月という言葉にこよいがピクツと反応した、そしてこよいは推測する……。

咲月…多分女の子の名前だね、咲月って言う男っていないよね
つまり？お兄ちゃんは今女の子と電話してるって言うの？…それにしてもお兄ちゃん嬉しそう。

…どっから見ても怪しい、こよいの勘が正しければこれは友達って言うレベルじゃないよね…… ああ〜もうっ！

そんな有二を見てこよいは今まで我慢してきたその我慢が出来なくなっただ。

「あつ、うん分かったじゃあね」
そう言っただ有二はケータイを切った。

するとこよいが近寄ってきた。それに対し有二はちよつと警戒した。
「何？こよい？」

…お兄ちゃん、探りいれてるね。

「お兄ちゃん？今の誰？どんな関係？もしかして彼女？そんな訳ないよねー」

だっただお兄ちゃんにはこよいがいるもんねー？」

「え？」

おいおい……いきなりなんなんだこの光景。どっかで見たぞ…ああ
そっただ昼ドラで見たんだ。

奥さんがいるのにもかかわらず男が浮気をしてそれがバレる寸前の光景だ…って

おかしいぞ？なんでこよいが俺に突っかかる？それに「こよいがい

るもんねー？」って。

これじゃ俺がその浮気男の立場じゃねえか。俺は何にも悪いことしてないよな？

「こよい？言葉の意味が分からない。でもこよいが不機嫌なのはなんとなく分かった。

でも何で不機嫌なのかが分からない。教えてくれるか？」

「やゝだ、教えない」

「教えてくれよ」

「やだ、絶対教えない」

「絶対に？」

「うん、どうしても」

いきなりどうしたんだよこよい…

「やっぱ教えてくれないのか？」

「絶対教えない」

「ひざの上に来て良いからさ」

そう言つと何も言わずにこよいは四つん這いでこっちへ来た。俺のあぐらをしている所へすっぽりと入って来た。入るや否やこんなことをこよいは言った。

「お兄ちゃんだって気づいてるくせに…」

「ん？気づいてるって…？」

すると少しの間を置いてこよいは話し出した。

「お兄ちゃんはこよいの事好き？」

「うん好きだよ」

「こよいもね、お兄ちゃんの事好きなんだよ？」

「はは、嬉しいな」

「でもね……」

こよいの表情が一変した。

「でも？」

こよいは下を向きながら小さな声で言った。

「お兄ちゃんの思っている『好き』とは違うんだよ？」

「え？」

俺の思ってる好きとは違うって……？

するとこよいは急にこつちを向いたかと思っただけ俺の肩に手やり、俺をそのまま押し倒した。

「こよい……？」

「……お兄ちゃんは何も分かってない！今までこよいがどんなことをしてもお兄ちゃんはまったく気づいてくれなかった！こよいがお兄ちゃんの事【好き】だって気づいてくれなかった！」

「……………」

「こよいはずっとお兄ちゃんのお嫁さんになりたかった！！だってこよいはお兄ちゃんの事が大好きなんだから！ずっと傍に居たいんだから！でも……兄妹なんだよ……こよいはお兄ちゃんのお嫁さんにはなれない……」

するとこよいは声をあげて泣きはじめた。

俺は何も言わずに「ごめん」という気持ちを込め、こよいを抱きしめてやった。

しばらくするとこよいは泣き疲れてそのまま寝てしまった。

俺はよいしょと体を起こしこよいを俺の部屋にあるベッドへ寝かせ付けた。

どうせこよいの部屋に運んでも俺の部屋へ来るんだ。ならいつそのことこっちへ連れて来ておこう。

ベッドを背もたれに座り、俺は考えた。

今までこよいが何をしてくれたかを振り返った。気づいていたはずだった……。

「……昔は俺もこよいみたいな時期があっただぞ？」

2人が引き取られてそれから保育所に入園して何年か経った時だった。

『さあみんなーお昼寝の時間だよー』

との号令で園児達は自由に布団を敷き、そこに寝る事になっている。有二は善人と一緒に寝るつもりだった。2人は布団を合わせそこに寝そべった。

「なあゆうじー」

「なに？よしひとくん」

「ゆうじってだれがすきななの？」

「ぼくがすきなのはこよいだけだよ」

「ええーふたりは【きょうだい】だからけっこんできないんだよ？とうさんがいったもん」

「できるよ、このまえながればしにおねがいしたもん」

「でもふたりは【きょうだい】じゃん」

「うるさいなーもうそのはなしはおしまい」

「おっけー」

俺はそのときのことを懐かしく思い返した。

「懐かしいなーこんなことあったんだよねーそういやこの後にさ」

有二と善人がお話をしていた頃。

『ゆうじくーん、こよいちゃんがきたよー』

先生にそう言われた。

「えっ？」

俺はいろんな意味でドキツとした。

「あー！おにいちゃんだあ」

俺を見つけるとこよいは足をぺたぺたと鳴らし俺達の布団へとやってきた。

「どうしたの？こよい」

「おにいちゃんといっしょじゃないとやだ」

こよいはそれだけを言う俺の隣に潜り込んだ。

「…そっかしかたないなあじゃあいっしょにねような」

仕方なくは無かった。それはただの照れ隠しの言葉に過ぎなかった。

この日から毎日のようにこよいは俺の隣で昼寝をするようになった。

…その日だ、俺とこよいはばあちゃんのと所へ帰ってきて

こよいは歩きに疲れて寝ちゃったんだけどその時に俺が聞いたんだ。

「ばあちゃん、【きょうだい】ってけっこんできないの？」

「ああ、そうだよ？確かばあちゃんの記憶が正しければ【いとこ】

はセーフだった気がするねえ」

「【いとこ】って何？」

「生きてりゃそのうち分かるさ」

「……………」

それから何年か経って、俺はこよいと結婚できないと自覚した。

それからこよいのことを【妹】として見て来たんだ。でもこよいは俺の事を【男】として見ている。

俺、昔はこよいのことが【好き】だったんだよ。

それにもし俺がこよいの事が嫌いなら抱きつかせたりなどしないって。

やっぱこよいが好きだったんだよ。

でも今はやっぱ咲月さんが好き。…ごめんなこよい。

「はあーあ、【兄妹】ねえ…」

誰が言い出したのか分からないが『恋愛に年の差なんて関係ない。』という言葉がある。

確かに年の差がどれだけあっても愛し合ってさえいれば良いという意味だと俺は思っている。

年の差は良いのに兄妹はダメなのか……？もし俺達が兄妹じゃなかったらもしかして

なんか考えるにつれ寂しくなってきた。

ちょっとトイレに行こうとして立ち上がると、何かに引っ張られるような感触が背中にあった。

首を後ろにやり見てみるとこよいが右手で俺のシャツをぎゅっと握っていた。

俺はトイレに行くのを諦めそのまま座り込んだ。

これから俺はこよいにどうやって接してやればいいんだ？

しばらく考えた……でも時間が過ぎるだけで何の解決策も見つからなかった。

過ぎるのは時間だけ……迫るのは我慢だけ。

「ごめんやつぱ限界！」

とりあえず俺はこよいの手を放して急いでトイレへ駆け込んだ……。

6 話（後書き）

高校入ったとたんに就職というワードを聞かされました

と同時に小説家になりたいな…とか思っている今日この頃

どなたかスカウトしてください。人は居ないのかな？

良ければ感想書いてください。お気に入りへ入れてくださるとありがたいです

ではこの辺で

7話（前書き）

そろそろネタが尽きる頃です。最悪の場合来週で強引に終わってたりして……（笑）

7話

クンクン、スウーハアースウー…ハアー

こよいは今、有二のベッドで寝ていた。そして有二のおいが付いた布団をおつていた。

「やっぱお兄ちゃんのおいだ」

布団を抱きしめてゴロゴロと動き回るこよい。

しかし調子に乗ったせいでコロんとベッドから転げ落ちてしまった。が、布団のおかげでダメージはなかった。

「落ちちゃった」

そう言いつつ布団を元の場所へ戻すこよい。

パンを焼いてかじりつき、こよいは辺りをきよろし始めた。

「あれ？お兄ちゃんは？」

分かりやすく思いつくところを総当りしていくこよい。

しかし探してみても何処にも居なかった、ケータイを開いてみると一件のメールが届いていた。

「お土産買ってくるから許してくれ…？」

有二のメールを読み、こよいはソファーにめがけて思いっきりケータイを投げつけた。

「昨日あれだけの事があつたのに何も分かっていないのかな…?!」

こよいの怒りはプチ爆発し、近くにあったフォークでパンをぶすぶすと刺し始めた。

「何でお土産？！そんな夜遅くに帰って来た旦那さんじゃないんだしさあ！！……ん？旦那さん……？……旦那さん！」

そう叫ぶとこよいはテーブルをバンツと叩いた。

その衝撃で牛乳が零れ慌ててこよいは拭くものを探し始めた……。

掃除が終わった後、こよいはまた当然の如く有二の部屋に入り仰向けになっていた。

「旦那さん……ハァー……こよいにとってはずっと先の話だね……」

こよいは結婚できないことを自覚していた。有二以外に好きな人なんてできないと思っているからだ。

でも諦めきれなかった。

こよいが小学4年生のころ慣れない手つきでパソコンに向かい

兄妹 結婚 というキーワードでよく検索していた。

こよいは現実を逃避せずにはいらなかった。

それからというもの、こよいは結婚は出来ないが傍にいたことは出来ると考え他の女に取られまいとがんばって自分をアピールして来た。

それゆえ、昨日聞いた咲月という名前がどうにも気になっていた。

有二は咲月の家に居た。

「咲月さん、いつから俺の事好きだったの？」

今日はあまり話が發展していなかった。なので有二が頑張って話題を探していた。

「うーん、えつとね…あたしが男子に囲まれてる時に有ちゃんが手を引っ張ってくれたことあったよね？」

「うん。…ってもしかしてそれからッ?!」

驚きのあまり有二は立ち上がった。

「うん。それから」

・
有二としてはすごく意外だった。まさかあれが決め手になるとは・

「だから、いつも周りには男子が居るだろ？だからそこから助け出すんだ」

「ふーん、で？」

「いや、そこは『で？』って言われても俺には答えることが出来んぞ」

善人と有二は作戦会議をしていた。

善人は男子の中に飛び込み、ボロボロになる有二を見たいがためにこの案を出した。

有二は善人がそんな事考えてるとは知らずに聞いていた。

そして事件は昇降口で起こった。

「ありやいやーまたラブレターか」

咲月の靴箱を開けるとありえない量の手紙が入っていた。

そしてそれをカバンの中に入れているとようやく靴が見つかった。

……ちなみに有二はそこにラブレターを入れようとして大量のラブレターを床にばら撒いた経験がある。その時善人は腹を抱えて大笑

いしていたんだとか……。

咲月が靴を見つけ、ようやく帰れると思っていたその時――

『咲月さん、今日こそ答えを！』

『俺の気持ち……受け取ってください！』

『絶対に幸せにします！だから付き合ってください！』

とこんな風に咲月の周りにたくさん男子が集まってきた。

……中には掃除用具のロッカーに隠れていた生徒も居た……。

「おいっ……！有二！行け！」

善人奴らを見ると次の瞬間に有二の背中を思いっきりバンツ！と叩いた。

「お、おう、行って来る！」

そして有二は咲月めがけて走り出した。

男子共は意外と掻き分けやすかった。

皆頭を下げているものだから横からグツと押せばすぐにバランスが崩れる。

順調に男子共を掻き分けて行く有二。

そして難なく咲月のところまでたどり着いた。

しかし前にして見ると、ドキドキせずにはいらなかった。

しかし今はそんな場合じゃない。連れ出せたらそこから2人きりだ。そう考えた有二は

「咲月さんっ！ゴメン！」

とそれだけ言うのと咲月の手を取り、近くに居た奴をなるべく【カッ
コ良く】蹴っ飛ばし

ドミノの如く倒れた男子共を後に咲月と一緒に何処かへと逃げ出した。

「成功ー！やればできたなあ」

「成功って？」

「ああいやいや何でもないよ？ただ単に、困っている咲月さんを少なからず助け出せたなって」

「ふふっそうだねー助かったよ、ありがとー有二君」

「いやいやとんでもない、これぐらい当たり前ですよー」

有二君と呼ばれ有二は急にデレ始めた。

咲月はその時の有二の顔を見て胸がドキドキし始めたのだった……。

あれ？有二君ってめっちゃいい人……あんな奴らとは全然違う……。

あれ？もしかして好きになっちゃったかも……。いや、まさか……
ねえ？

その瞬間から咲月は初めての恋を迎えた訳だった。

「有ちゃんかつこよかったなー」

「ええー？そう？……いやぁ照れるなー」

「照れんなって、全くだ」

口を尖らせいかにもからかい口調で咲月は有二をおちよくってみる。
効果は抜群だったようだ。

それから2人はしばらく思ひ出話をした。

それから買い物へ行くからついて来て〜と咲月が言いだし
いいよーと有二は軽く答えて2人は立ち上がった。

いつも行き慣れたスーパーも好きな人と来るとなんだかいつもとは
違う感じがする。

咲月が前を歩き、その後ろからカートを押しながら有二がついて行
く。

やっぱり、周りから見るとカップルに見えたりするのかな？

とかなんとか考えていると前方に見慣れた人が商品とにらめっこを
していた。

やべえ…ばれないように…とゆっくり歩いたのだが気づかれてしま
った。

「この感じ…お兄ちゃん ?！」

お前は何者だよ……。

7話（後書き）

お久しぶりです！

感想待ってます、応援してくださいととても嬉しいです

まだお気に入りに入れてない方は是非お気に入り追加してください
ではこの辺で

8 話（前書き）

感想待ってます。

8話

俺は咲月さんの買い物に付き合っていた。
そして今、何故か妹を見つけてしまった

「やっぱお兄ちゃん!？」

そう言われて回れ右をする有二。しかし彼の肩に掴みかかる手があり
そのせいで歩き出すことは出来なかった。

「よ、ようこよい……」

やべえなこれ気まずいなあ……昨日こよいがアレだけ言ってるのに俺
は何一つも言わなかった。

そして今、他の女子とデートしているときた、これがバレたら非常
にまずい……。

どうすっかなあ……そうだ、俺がこよいの為に買い物していること
にすればいいんだ。

「実はさ、今こよいの為に」

「有ちゃーん! あったあった! これ安いよー!」

そう言くと咲月は有二のカートへ見つけてきた豚肉をドサツと放り
込んだ。

「……………」

うわぁタイミング悪ううう! やばいってやばいってこよいの視線
が咲月さんを捕らえて外さない……!!

「……………」

咲月さんも気づいたみたい、この空気どうしようか……。

いきなり『彼女です』って紹介したら多分今夜、俺の命は峠を迎え

てしまっだろう
どうする俺？考える俺。

「お兄ちゃん、この人は？」

やっぱりかそう来ると思っていた。

「この人は俺のクラスメイトの」

「隣の席で最近仲良くなった姫川咲月、あなたは？」

お！ナイス咲月さん！

「えっ？私？……平沢こよい、コレの妹です」

コレってなんだコレとは

「えっ！じゃあ有ちゃんの妹かあ！そっかそっか」

「有ちゃん？」

「でな、今ちょうどそこではったり会って買い物に付き合ってたんだ」

「そうなんだー！……そういうことかあ」

そうなんだよ、そういうことなんだよー！嘘だけど……。

「そういうわけでまだ買い物終わってないからお兄ちゃん借りてくねー」

咲月さんの気の利いた言葉でなんとかややこしいことにはならなかった。

「有ちゃん、何で誤魔化したの？」

「ああ、うん、帰ってから話すよ」

ちゃんと言っておかないとなー

「帰ってから……ってことはまた有ちゃんをテイクアウトできるの！？」

「違う違う、って俺は商品か」

「ナイス突っ込みー、ちなみに有ちゃんの商品ではなく旦那さんです
すねー」

「おいおい……」

いつの間に？ってか俺は咲月さんさえ良ければ旦那さんになっても
いいんだけどなー

とまあ買い物は無事(?) 終わり、咲月さんは会計を済ませると俺
に二つのレジ袋を差し出してきた。

「はいこれ持つてー」

「はいよー」

む、意外に重いかも……。

「ありがとね」

「そう言われると頑張りがいがあるかも」

一度持った袋をもう一度持ち直し歩き出した。

「あっそうだ、ちょっと待つてて」

そう言うとき咲月さんは何処かへと走り去っていった……。

俺はそのまま立って待とうとはしなかった、重いからだ。

なのでそこに設置してあるベンチに座ろうとした。その瞬間――

「よっこらせとー」

コイツ……何故ここに居る。

「おつ有二じゃん。どしたの？その袋」

「ああこれか、まあちょっとあつてね」

「ふん」

「おい善人、そこを空けてくれないか？何も横たわらなくてもさー」
おいおい、見た目以上に重いんだぞー俺をいたわってくれよ。」

「だって普通に座ったらお前休憩する気じゃん？」

こいつ単に俺の邪魔をしにきやがったな。

「まあいいけどさー」

「とか言っちゃってさーホントは座りたいんだろ？」

それが分かるのならそこをどいてくれ。

「……………」

「そついやさ、休憩するってことは誰か待ってんの？あつ妹か」

「ああ？ここで待ってとあの人に言われたんだ」

「あの人？」

「ほらあそこ」

俺が指差すところを見て善人は「えっ！？」とか言いながらその体を起こした。

「ごめんねー待たせちゃった」

「ん？そんなに待ってないから大丈夫だよ」

「そう？なら良かったー結構な荷物を持っている人を長いこと待たせちゃったら大変だもんね」

「お、おい有」

「じゃいこっか」

善人の存在が空気と化した。

「そうだねー帰る帰る」

善人を無視するのが楽しくなってきた。

「ちよつとストップ！」

ほんわかムードで帰ろうとした矢先。善人がそれに水を刺した。

「あ？なんだよ俺は早く帰りたいんだよ」
「ちよつとイラッときた。」

「お？つてことは早くあたしと二人つきりになりたいって事かな？」

すかさず咲月さんが意味ありげな言葉を放つ。

「二人つきり！！？」

善人のリアクションはいちいち大げさだった。

「ああもう、うるさいなーじゃまた明日な」

俺は善人を無視して咲月さんに「いこ」とだけ言ってその場を後にした。

咲月さんは片手にソフトクリームを持っていた。

「ソフトクリーム買ってきたんだ」

「うん、いる？」

「ああいや俺はいいよ」

新品なら良いけど…それ咲月さんが口つけてるやつだよ…いやいや俺にはそんなことできないよ。

「えー？有ちゃんも食べてみなよー」

「いやいいって」

咲月さんは俺の口元にソフトクリームを近づける。
当然俺は首を引っ込めた。恥ずかしいからだ。

「食べてみてよー」

そう言つと咲月さんは強引に俺の口にソフトクリームを当てた。
両手が買い物袋で塞がっている俺は抵抗も出来なかった。

「んぐ…押し付けるな押し付けるな」

「食べないのがいけないんだよーだ」

その攻撃（？）により俺の口の周りは白くなっていた。

「サンタさんみたい」

「誰のせいだよ」

「ん〜とね、有ちゃんが食べないから有ちゃんのせい」

「あつ、そう来たか…」

予想では『誰だろうね〜？』と予想していたんだけどなあ、意外だよホント。

咲月さんの家に着くや否や、ふにゃー！と言い、カーペットの上で大の字になる。

「あ！さっきのかわいい！もう一回やってー！」

「やだよ〜今日はもうしないー」

「え〜？かわいいのにー」

「……照れるからあんまりそういうこと言っちゃダメだっつーの」
2人っきりの時の有二は結構デレる。少なくともやわらかくなる。

それから有二は咲月に一応こよいの事を説明した……。

「……で、なんか俺の事が恋愛対象になっているみたい」

「ふ〜ん、珍しい子だね〜大体の子はお兄ちゃんには敵意を持っているよ？」

「ははっそうなんだ」

善人に聞いたことがある。『俺昨日妹に殴られた』と。

まあそんな事俺の知ったことじゃあない。

こよいへメールを送ろうとさりげなくケータイを開いたその時
「とうっ！」

「おふう！……来るならそう言えば良いのに」

咲月さんが襲い掛かってきた。まあ言ってみれば背中に乗っただけだ。

「えゝ？そんなのつまらないよゝ？で、これは？」

「メール、こよいにちよつとねー」

「ちよつと…って？」

これ説明するの初めてだな。

「えつとね、何かあつて機嫌が悪いときはメチャクチャ辛い物を作るんだ」

「ふゝん」

「で、今日何が良い？ってメールがきてたからそれに対して『麻婆豆腐』という返答を今していた所」

そのリクエストした料理は相当辛くなる。今回の麻婆豆腐もヤバい事になるだろう。機嫌が悪ければ悪いほど辛くなる。

ちなみに何でも辛くなる。中でもびっくりしたのが真っ赤に染まった卵焼きだ。一体何を入れたんだ？！と言ったら、愛情！とふざけた答えが返ってきたことがあった。

もちろん辛かった。説明しなくても分かるだろ？ヤバさとか。多分今日はそこまでではないと思うけど注意が必要だと思う。

その時、俺たちを育てたおじいさんとおばあさんはその巻き添えを喰らい

思いっきり咳き込んでいた。そのまま天へ昇りそうな勢いだった…

…。

なんな光景を見て俺は箸を置いたことがある。

ちなみにその時は友達とケンカしたという理由で機嫌が悪かったらしい。

そんな理由で天に昇ったとしたらやり切れないだろうな。とりあえず命あるだけ良かったとしよう。

「じゃあ俺帰るねー」

という訳で俺は自宅へと戻った。

途中のコンビニで飲むヨーグルトと牛乳を買っておいた。

TVで見たただけだが辛いものを対処するのには良いらしい。

自宅に着いた。少し緊張が走る。でも普通通りにすれば良いだろう。そう考え、俺はドアを開ける。

「ただい」

「おつかえりいいいいー」

まず先に妹のタックルが待っていた。

まあそこはいつもどおり受け止めてやった。

「リクエスト通り、麻婆豆腐作ったよ！」

「おうそうか、じゃあ食べようかな」

「はい」

俺は辛いだろうなーと予測し、テーブルに着いた。

皿の左に水が置いてあったがそれを見殺し、さっき買ってきたばっ

かりの飲むヨーグルトを置く。

「いただきます」

「どうぞおー」

息を整えまず一口……。

「ん？辛くない……？おいしいぞこれ」

「何で辛いつて思ったの？」

「ああいや……ただの固定概念だよ、はは」

おかしい。この場合こよいは腹を立てていないということになる。
コレはコレでいいんだけど……それにしても美味しい。

「こよい？おかわりある？」

まあ腹立てていないんだつたらそれに越したことはないだろう。

それにしても明日から学校じゃん……日曜の夕方ってなんか寂しくなるんだよね。

「はいお待ちー」

「ありがとな、こよい」

「べつべつにお兄ちゃんのためになんか」

「いただきますーす」

「えっ？！無視なの！？こよい結構恥ずかしかったんだよ？それなのにスルー！？」

「知らねえよ。こういう時もある」

ホントのところどう接していいか分からなかったただけなんだけど……
兄として

こうして無事、夕食を終えることが出来た。
せっかく買ったこいつらも役には立たなかったな……まあいい、いつ

か飲むだろう

それまで冷蔵庫へ放り投げておこう。

冷蔵庫をあけ、放り投げるとは思っていたが実際にやるとマズイのでちゃんと整理した上で入れておいておいた。

居間へ行くとこよいがいた。

「ん？お兄ちゃんだ」

「…ああお兄ちゃんだ」

ツツコミが難しいぞ…こよい。そもそも二人暮らしなんだから俺が来ることは明白なはずだろ？

首を仰け反りながらこよいが問題発言をした。

「あそうそう、この間お兄ちゃん帰ってきてないときに色々やらせてもらいました」

「色々って？」

「部屋に行けばわかるよー」

にやけ顔でそう言われ言われたままに部屋へと入った。
そこに写りこんだ光景は……。

「あれ？こよいのベッドがある」

あるえ？部屋間違えたかな？

一度出る、部屋の扉には『有二の部屋』とかかれたプレートがぶら下がっていた。

「やっぱりここか」

もう一度入ってみる。

「…やっぱりこよいのベッドがあるー！……！」

えつとなんだ！？あれか！？『今夜は隣で寝させて…』って何を考
えてるんだ俺は……！？」

「ひとまず元の場所へ、って重ッ……！」

兄の部屋に自分のベッドを移動させるなんて何を考えてるんだ？！

「
ね？色々させてもらったんだよ………」

「こよい……？一体何をしようと」

……そうか、これが……！これでストレスを発散させたんだな！そう
だな！

だから今日は辛くも何とも無かったんだな……！くそー！やられた！

「こよい、お前は一体何がしたいんだ……」

どうせろくでもない事が待っているに違いない。

「えつとね何て言うんだっけ………夜這い？」

……え？

8話（後書き）

今回ちょっと長かったかな？（2話分ありますよ）

でも一週間に一回だとこれくらいでいいのかも

感想待ってます。お気に入りに入れてくださるとありがたいです。
ではこの辺で

9 話（前書き）

感想待ってます

9 話

こよいは夜這いと添い寝を同じ意味として捉えていたらしい。よってあの問題発言を訂正すると「えっとね何て言うんだっけ……添い寝？」となる訳だ。

まあこんな事教える奴も居ないから間違えたままってのはあり得る話だった。

なんとなく似てるもんな、最終的に。

しかしこよいはここで寝る気だ。どうしようか

ああーいや、どうせ抗っても無駄だ。だったら被害を最小限に抑えるのが良策だろう

「じゃあ隣はダメだけどせめて同じ部屋だったら良いぞ」

「えへへーそんなこと言われてもこよいは行くんだけどねー」

「少しは兄の言うことを聞け……」

被害を抑えるとかいう話じゃなくなつた…

「話は聞くけど提案までは聞かないよー」

「要するに自分のやりたいようにやるんだな？」

そう言うところよいは縦に首を振つた。

もう何言っても聞かないんだな…兄としての権力が発揮できないとは……

「分かった、もうこつち来るなり寝るなり好きにしろっ」

「ホント!？」

「おう、なんか暴行を受けて気絶させられるよりかはいいからな」
咲月さんのときを思い出しながらそう言った。

「じゃあもうこれいらねえね」
するとこよいは何かを取り出した。

「　　ちょ！それ、バット！？」

「……見れば分かるじゃん」

「いや…見ればってかそれで殴る気だったのか！？」

こよいは縦に首を振った…最悪の場合…死ぬぞ俺…！

「抵抗したらねー、でもお兄ちゃんが好きにしろって言ったからもう必要ないよ」

そう言つとこよいはバットをベッドの下に押し込んだ…お兄ちゃん
はあなたの未来が不安でなりません。

その頃、咲月はというと・・・

「はあー今日は楽しかったなー」

ベッドの上で仰向けに大の字になって今日の事を振り返っていた。

「あれが有ちゃんの妹か…全然似てないよねーまあ男と女だから仕方ないんだけど」

それにしてもあの子は有ちゃんが好きなのか、じゃああたしは今、
こよいちゃんの恋敵って訳なのかな？

はあー妹ねえ………そういえばあの子元気でやっているかな？…まあ
気にしててもしょうがないよねー

「あつそうだ」

咲月は思い出したようにケータイを取り出した。
そして誰かへのメールを製作し始めた。

ゆうじとこよいはしばらく話した、こよい的に今日の女《咲月》が
気になっていたようだ。

「じゃおやすみ」

「おやすみー、後でそっち行くね」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

宣言したぞ、おい……………まあ気にしてても仕方ない…寝よう。

数十分後ホントにこよいは来た。

あつたけえーとか言いながら入ってきた。

何故それが分かるか？俺がまだ寝ていないからさ。

さつきは寝たと言ったが実は寝ていない。…寝られるわけねえだろ
！気になるんだから。

それからこよいはすうすうと音を立てて寝た。
別に何をするわけでもなく寝た。意外だった。

「何もしてこない…？」

へえー何かしてくると思ったけど別に何か悪さをするわけじゃない
んだなー。

……じゃあ別にここで寝て…いや、こんな調子だとこよいはいつに
なっても成長できないぞ…だから本当は止めた方が…あーもう！ど
うすりゃいいんだ…これを許しても良いのか？

これを許したとしてこよいは幸せな道を歩くことができるのか？

いやいや待てよ、おい。そもそもこよいの幸せってなんなんだ？

そんなことを考えていると睡魔が襲ってきた。俺はしばらくもしな
い内に眠りについた。

9 話（後書き）

感想待ってます、お気に入りに入れてやってください
同時進行中の『恋する少年と2人の居候。』もよろしく願います。

10話（前書き）

今回、初回に出てきたあの子が登場します。さて誰でしょう？
最初はボクも『誰だっけ？』状態でした。

暇つぶしにでもなれば幸いです。それでは第10話どうぞ

10話

ここに『ああこんなのいたねえ』とでも言われてしまいそうな女子が居る。

「ふわぁー！告白なんてできない…」

こよいは『大丈夫大丈夫！』って言ってたけど本当かなあ？

「これでフラれたらショックなんですけど」

ふと時計に目をやる…

「ああーもうこんな時間に」

そう言うのと美咲は布団へと急いだ。そして彼女はものの3分で睡眠に落ちた。

朝が来た。そうラジオ体操で言う『素晴らしい朝』だ。

ジリジリジリジリジリジリツバンツ！バンツ！！

「うるさいーあと五分寝させろー」

うるさい目覚まし時計に対して美咲はもう一撃制裁を下した…

目覚まし時計にしては良い迷惑である。

自分は何も悪い事していないのにその身を痛めつけられるのだから。

そこから3分後。

「おい美咲、起きないと遅刻するぜー？」

ウザイお兄ちゃんこと善人のお出ましである。

「あれ？返事が無い…コレってチャンスなんじゃ…でも自分の妹に手を出すって」

「朝から何考えとんじゃこらあああああ！！！！！」

ベッドから跳ね起き、バネを利用した見事なとび蹴りが善人の腹に直撃した。

「み、見事な蹴りだ…あ…やばい…吐き気が…」
善人の顔が見る見るうちに青くなっていく。

美咲もヤバイと感じたのだろう袋の変わりになるようなものを探し始めた。

そしてそれを手に取った。

「ここで吐くなあああああ！！！」

袋を探すより気絶させた方が良くとも思っただろうか
すぐ傍にあった革のカバンを両手に持ち全力でフルスイングした。
ゴンッ！そんな音が部屋中に響き渡った…やり過ぎたか？と思うほどに…

「ああー川だ……でも俺泳げ…ない」

そう言いながら善人は文字通り気絶した。

「ああメンドイなーまた運ぶのか」

そう言々と美咲は善人を引きずって階段を下りていった。

行つて来ます。

それだけを言々と美咲は中学校へ走り出した。

とある角を曲がるとこよいの姿が目映った。

「こよいー！おはよーって無視すんなー！！」

こよいは気づかなかつたのかそのまま美咲の目から消えてしまった。
急いで美咲はこよいを追っかけ角を曲がろうとする。

『痛っ！』

角を曲がった次の瞬間に二人はぶつかってしまった。

こよいがかすかに声が聞こえたなーという事で戻ったところそこへ急いで駆けつけてきた美咲とぶつかった。という事になる。

「いったあゝ」

こよいは痛む頭を手で押さえ美咲におはようと告げる。

美咲もそれを聞いておはようと返した。

「ごめん、こよい痛くなかった？大丈夫？」

美咲はこよいが大丈夫かを確認する。

「え？痛いし大丈夫じゃないけど……？」

「え？！ホント！やばっ！どど、どうしよう……」

こよいの「大丈夫じゃない」発言に美咲は慌て始める。

「でも大丈夫、こんなのあれに比べたら全然平気だから」

「ホントに？……ってかあれって何？」

「じゃ、行こうか遅れたらマズイし」

「う、うん……ってかあれって何なの？」

「……そういえば数学の宿題やった？」

こよいは話を逸らし始めた。

「あああれね、ちゃんとやったよ？って話を逸らすな、あれって何？教えてよ」

「写させてくれる！？」

「じゃああれっていうのを教えてくれるかな？」

「……………」

こよいが少し黙り込んだ……しかししばらくもしない内に

「……衛くんとは今どんな感じ？」

と美咲に返した。

「うーんそうだねー…ってこらこらまた話が脱線してますよ?」
「気のせい気のせい、ってもう学校着いたよ?」

学校。そこは美咲にとって『ダルイ』の塊でありそれはあまりよろしくない物だ。

この世には義務教育というものがあり小学校、中学校と強制的に通わなければならない。

しかし彼女にはここに来る目的がある。高垣衛^{たかがき まもる}、彼に会つためだ。美咲はこよいに見守られながら恋をしている。

なのでこよいが美咲の恋を応援しているということになる。

ちなみに兄、有二から『こよい!頼む!俺に恋愛の秘訣とか教えてくれ!』

と言われても彼女は『やだ。』の一言で済まそうと前々から決めている。

…まあ有二としてはもう聞かなくても良いことなのだが…

現在、こよいと美咲は歴史の授業を受けていた。

歴史だるうー…ま、ノートだけは取るけどさー

「というわけで織田信長は明智光秀に殺^やられちゃったんですね」

何だっけ?本能寺に敵あり!だっけ?あれ?敵は本能寺にあり!だっけ?あれ?どっち?

「さてここで皆さんに質問です」

皆が先生に注目した。…ついでにあたしも。

「ジャジャン！」
そこいらん！！

「明智光秀が信長公を倒す前に言ったあの有名なセリフは何！？
ああーでた。…どっちなんだろ？」

ビシッ！と…皆が一斉に手を上げた。こよいも手を上げていた。

上げていないのは…あたしだけ。

「はい、じゃあこよいちゃん」

デレんなこのロリ教師が…お前のデスクトップすごいこと皆知ってるんだぜ…？

…まあそんなことどうでもいいけどー

「えつと…『信君は本能寺にあり！』」

「……………」

…違うんじゃないかな？こよい

「…正解！」

『ええええ！！？』

一斉に教室がどよめいた。

「はい、一般的に有名なのは『敵は……本能寺にありッ！……………！

……………！』

「…うるせーよ先生！！！！」

皆がそれぞれにそう言った。

「ゴホン。ある一説によると明智さんは『信君』と呼んでいたそう
だ」

皆が『嘘だ、こいつ嘘ついた』と言わんばかりの視線を先生に向けていた。

とまあ歴史が終わり、給食ア〜ンド昼休みに突入！

本命は昼休み！衛君に声を掛けるところから始まり…最終的に…
き、キキ…ってこんな事あたしに言わせんじやないわよ！
悟りなさい！そう、悟れば良いじゃない！『言うまでもない』みたいな？！

美咲が壊れてきたので物語の視点をグツと戻すことにしよう…by
ナレーション

美咲は急いで給食を食べ、すぐに衛まもるのところへ歩み寄った。
「衛君！あのさ！」

しかしそれよりも先に行動する女子がいた。

「衛君、コッチ来てー」

「うん、分かったすぐ行く」

「あれ…？」

その瞬間、美咲の作戦は崩れ去ってしまった…
そして衛はその女子に呼ばれ席を立ち、美咲の横を通り去っていった。

こよいは全てを見ていた。

「あっちゃー邪魔が入ったかー残念」
そしてこよいは美咲に近寄った。

「美咲…残念だったね」

美咲は分かりやすく拗ねていた。

「え？残念？何が？別にあんなのいつでもできるしー」

肩が笑っている美咲、それを見てこよいはまた拗ねてるなーと少し笑った。

「ちよつと何笑ってんのこよい？」

「いやあー残念だったねーって」

美咲はまた頑張ろうと決意した。そうだライバルがいたって構わないさ。

居る人数ほど衛に魅力があるんだ。そうに違いない。

そう美咲は決意したのだった。多分…

ちなみにさつき衛を呼んでいた彼女の名前は水橋詩織^{みずはし しおり}
彼女もまた美咲と同様、恋の真っ最中であった。

10話（後書き）

感想を・・・！！お願いです感想ください！
読者の一言が聞いてみたいです。

11話（前書き）

暇つぶしになれば幸いです、ではどうぞ

11話

「いてえ…頭痛いんですけど」

頭をさすりながらそう言った。

「知らねえよ、そんなこと俺に言うな」

現在、有二是善人と登校している最中だった

「だからさー頭痛いんだけど」

ちなみに何故頭が痛いかというと今朝、善人は妹の美咲により頭をカバンで殴られたからだ。何故そんなことになったかは前回を見れば明白である。

ふと善人に目をやると善人はジッと何かを見つめていた。

善人の目にはカップルでイチャイチャしている奴らが写っていた。

「ああーああーあいつら…人前で堂々とイチャイチャしゃがって…

なあ？有二」

もしかしてうらやましいのか？コイツは…ってイチャイチャか…
いいなあー…襲われてばかりだもんない俺

「お前顔がにやけてるぞ気持ち悪い」

「おつお前に言われたくねえよ」

「うるせえ…にしても…俺の春はいつ到来するんだ？」

さあな、そんなこと知らねえよ俺は

「まあ気長に待ってるよ、あははっ」

笑いながらそう言っただけ

「ふんっだ！少なくともお前より…は」

善人の声がどんどん小さくなっていった。

善人の視線の先、俺の背の方を見てから小さくなっていったことに

気づいた。

「有ーちゃん!」

「おわっ!」

思いがけぬ襲撃に遭った……ほら襲われてばかりだろ?

声ですぐに咲月さんだと分かった。俺はうつ伏せのまま目を横にやると

男子生徒共の『テメエ……!朝っぱらから何してんだこの野郎!』

という厳しい視線が俺へ向けて放たれているのを察知した。

……俺は目を閉じた。

目は見えなくても耳は機能している、真上から呟かれる嫉妬満載の善人の言葉にはただ笑うしかなかった。

それからというもの咲月さんの積極的な行動は止まらなかった。

「おい平沢!お前姫川さんの何なんだ!」

1人の男子生徒が俺に詰め寄ってきた。

急にそう聞かれた、咲月さんの何って……どう答えれば良い?

「……彼氏だけ」

「……えええええええ!?!?!」

教室中がざわめいた。

男子共ならまだしも女子も騒ぎ始めた。

『ありえない!そんなのありえないわッ!』

『姫川さんは何処に行ったの?!本当か確かめなきゃ……!』

「おい!有二!お前本当の事言ってるのか?!」

……あえて答えなかった……ってか周りがうるさくて聞き取れなかった
「お前!答えないってどういことだよ?!……まさか……いや!そ

んなはずは…!!」

だから聞こえないって…何言ってるの？

何かを言った直後その男子生徒は膝から崩れ落ちた。

何言ったかが分からない俺にとっては『何やってんだこいつ?』としか思えなかった。

でも何らかのショックを受けたんだと俺は感じた。

未だ騒がしい教室でふと、とある女子生徒は冷静にこう言った

「ありえないわよ、だって平沢よ? あいつが姫川さんと付き合えるわけないじゃない」

その瞬間、面白いくらいに教室が静まり返った。

なんかムカつくんですけど…?

そしてしばらくした後:

「そっか! 有二! お前面白い冗談言うようになったのか! あははっ!」

膝から崩れたはずの男子生徒が生氣を取り戻し、同時に教室も今まで通りの活気を取り戻した。

それから付け加えるかのようにとある女子生徒は言った。

「それにさあ二人が手を繋いでたのを誰が見たの? それくらいの情報がないと2人が付き合ってるって決め付けるのには早すぎると思うな、んまあ繋いでるわけないと思うけど」

そう言った後『だ、だよなー』『そういうやそうだった、俺、どうかしてたよあははっ』

などともう教室の雰囲気はほぼ元通りとなった。

この騒ぎはこれで終わりではなかった。

さっきの言葉を聞き、善人は『じゃあ…あれってデートだったんだ…』と呟いた。

ちなみに善人はこの間買い物に行ったときの事を思い出していた。

「おい…今お前…ナンテイッタ？」

そんなことあるはずない、そう願う生徒が善人に問い詰めた。

善人は答えた

「ああ…この間俺が買い物に行った時見ちまったんだよ」

「何を!?」

皆が声を揃えてそう言った…こいつら面白すぎるわ

俺はただ善人が言う言葉に耳を傾けていた…大丈夫、今度こそ聞き取れるはずだ。

善人は続けた。

「俺は買い物袋を両手に持った有二を見つけたんだ、そんで有二がベンチに腰掛けるだろうと思ってあえて邪魔しに行っただ、まあただの悪戯だが」

「それで…?!」

「そしたら有二は『べつべつに座りたいわけじゃないんだからねっ!』と言ったんだ」

「言ってねえよ!」

「な!有二はいつからツンデレに…!いやそんなことはどうでもいい!続きを…!」

「そのあと…来たんだ、あの人が、そしてその人は有二と手をつなぎソフトクリーム片手に帰っていったんだ」

「あの人って！？一体誰なんだ？！」

そう生徒が質問したところ善人は指を指した。

その指の先に居た人は 咲月さんだった。

咲月さんはあたし？と自分に指差し『一体何のことだろ？』と呟いた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

少しの間沈黙が走った。

「 姫川さんだッ！！！！」

誰かがそう叫んだ、そして咲月さんの元に駆け寄り『有二とはどんな関係なんですか？！』

と、ニユースの取材陣並みの質問を繰り出した。

「あの…えつと…え？？」

咲月さんはいきなりの展開に戸惑ってた。

何も答えない咲月さんに次の質問が襲い掛かった。

『平沢有二は姫川さんの彼氏なんですか！？』

その質問への咲月さんの回答は意外なものだった。

「 え？違うよ？」

「あれ？」

…今度は俺が戸惑った。

「有ちゃんはあたしの彼氏なんかじゃありません」

咲月さんの答えを聞いた皆は『良かったー』『びっくりしたねー』
等と、中には拍手までする奴もいた…

「え？ホント何ですか！？平沢有二は姫川さんの彼氏じゃないんですか！？」

その生徒はもう一度確認を取った…

咲月さんはもう一度答えた

「だってあたしは有ちゃんのお嫁さん、だから有ちゃんは彼氏じゃなくて旦那さんだよ？」

11話（後書き）

感想待ってます！一言でも充分です！
感想もらえると元氣が出ます。

12話（前書き）

皆さんの感想が聞きたいです

12話

だってあたしは有ちゃんのお嫁さん、だから有ちゃんは彼氏じゃなくて旦那さんだよ？

あの咲月さんの爆弾発言は彼らの頭の中で勝手に削除された。

「咲月さん？」

「なに有ちゃん」

そついう訳で俺は咲月さんに聞いておかないといけないことができた。

「なんで俺咲月さんの旦那さん？」

俺は覚えがない……いつそんな関係に？わかるやつがいたら教えてくれ

「有ちゃんシリアスだねー」

咲月さんはいつも通りに答えた。

「……いいから、あれは冗談なの？それとも本気？」
俺は真剣に問い詰めた。

すると咲月さんは顔色一つも変えずにこう言った。

「本気だよ」

所変わってここはこよいの通う中学校
彼女たちは今昼休みでフィーバーしている最中だった

「おい！外野にパス回せ！逃げ遅れたやつにボールをぶつけろ！」

こよいと美咲はドッジボールに参加していた。
ちなみに今2人は必死にボールから逃げている。

「こよいつ！後ろ！」

そう美咲が叫んだ

「え？……あ、当たっちゃった……」

「……………」

こよいがやられた、でもボールはこっちのものになった、これはチャンスでもありピンチに
近づいた事になる。

「こよいのかたきいいいい！！！」

と言いつつ美咲の放ったボールはこよいを当てた生徒ではなく思い
つきり

水橋詩織、彼女に向けて放られていた。

「あぶな…！」

彼女はしゃがんでそれを回避した。

「ちっ！」

「ちょ、美咲！今舌打ちしたでしょ？！」

「別に…それより後ろろー」

その時詩織に向けてボールが飛んできた
でもそれは詩織には当たらなかった

「大丈夫？詩織ちゃん」

「衛君…」

「な！？なにいいいー！！！」

衛はそのボールをキャッチして詩織を守った、衛はそのボールを素早く外野に回した。

「ありがと衛君」

「うっん、気にしないで」

「…なんじゃ、あのピンク色の空間…！」

「美咲ーボール来てる来てる！」

え？…そう思ったときにはもう遅かった

「…結局今日は話しさえかけられなかった」

「まあまあ明日があるじゃないか少年」

「あたしは女よー」

本日の恋の進展はなかったようだ

2人はいつもの帰り道を歩いて帰っていた

『わんわん!』『カーカー』『バサバサバサ』

いつもと変わらない音が聞こえてくる

「わんわん!」

「ねえこよい?」

「わん?」

「衛君つてさ…ほらその…詩織のことが…好きなのかな?」

美咲はそれを今日ずっと疑問に思っていた。

「うーん、こよいの勘では多分愛しているという所まで行っていないと思う」

「そう?」

「だって好きだったらその人を直視できないはず」

「ああ…照れ臭くて?」

「…ごめん、慣れちゃえば関係ないね」

「いや、謝ることないよ」

2人は同時にはあーとため息をついた

美咲は衛を想い、こよいは有二を想った。

「叶うパーセント低いなー」

「……………」

「だって全然こつちを見てくれてないんだもん」

「……………」

「こんなじゃあたしには彼氏できないやあはっ」

「……………」

美咲は気づいた。

「あっ……！あの……！えと、ごつごめん……こよい」

「……いや、気にしなくてもいいんだよ？ずっと前から分かってたし」

「いや！でもさ……ほら！」

「……………だからいいんだってば……！！！！！！」

そのときのこよいの頭の中では現実を知ったときの記憶が映っていた。

12話（後書き）

感想ください><

応援メッセーじ待ってます（わくわく）

お気に入りに入れてくれたらうれしいです
では、この辺で

13話（前書き）

どなたでも感想書けるようになりました。
では暇つぶしにでもなれば幸いです。どうぞ。

13話

「ああゝあ暇だ：暇でしょうがねえ」
何をするわけでもなく善人は町をぶらぶらと歩いていた。

「今日は何かいいいことねえかな」
ぶらぶらとゆっくりゆっくり歩く彼は期待などしていない。しかしどこか期待に胸を膨らませている。
だからこそ女の子のそばに来たときゆっくりと自身の存在をアピールしているのだ。

「どこかに俺をナンパするような人はいないかねえ」
また俺うわごと呟いてるわ……そう思っていた時だった……。

「
痛！あつ、ごめんなさい！！」
背中に何かがぶつかったような衝撃が来た。声がするということは人なんだろうか、そしてこのかわいらしい声はやっぱり女性なんだろうか。

そして彼は直感した
【なんかキターー！】

「さつきはごめんなさいです」
「ん？気にしないでいいんだぜ？」
お詫びにおごらせてくださいという事で2人は近くの喫茶店へ入った。
心配性なのかな、善人はそう思った。

「それにしてもごめんなさいで済ませても良かったのに」

女の子から声を掛けられることだけでも嬉しいこの男。

彼はさっきのことを振り返るかのようにそう彼女に告げた。

「いえ、それでは私の気が済まないですよ」

「ふん真面目な子だねえ」

多分中学生くらいの子だろうか、じーっと見つめている善人はそう思った。

「あの、こんな事言うのもなんですけどメアド交換しませんか？」

急に彼女はメアドを交換しようと言った。……どこか彼女は恥ずかしそうだった。

その言葉にもものすごい違和感を覚える善人、しかしメアド交換しようと言われこの際どうでもいいやとも思った彼なのだった。

「…え？あ…メアド、はいはいいいですよーバッチコイ」

もしかしたら俺彼女できるんじゃない？彼はそうとも思った。

そして二人はお互いのメールアドレスを交換した。

「ほお白川綾乃ちゃんねー」

「そうなのです私は綾乃って言います」

「ねえねえ綾乃ちゃん。本当はわざとぶつかったんじゃないの？」

話がうますぎる。何か裏があったりして…さっきからそう思い始めていた善人はそう尋ねる。

「ただ単におごるだけなら自己紹介なんてしなくてもいいはずだね……そこからメアド交換って……」
それは綾乃にとって凶星だった。そして綾乃は本当のことを言った。それはつまり善人が思っている通りのことだった。

「あははゝ実は……わざとぶつかったのです」
そう、善人の考えは当たっていた。すると同時にうれしさが込み上げて来た。

「うーん……それってまさか」
嬉しさで思わずほんの少しほほが緩む。

「そのまさかなのです」

善人はどうやらナンパされたようだった。

「そっかーナンパかーでもさあ、やる人を間違っただけか？」
彼女を笑わせようと冗談交じりに何故俺をナンパしたのかを聞き出そうと彼は思っていた。

すると綾乃は善人の顔をじっと見つめた。その見つめる視線に恥ずかしくなり善人はもう飲み干してしまったジュースをすすった。

「間違えたかもです」
真顔で綾乃はそう答えた、彼女の目は真剣そのものだった。

「え、マジ？」

「うそなのです」

その言葉も真剣なものだった。

「あははっ面白いな綾乃ちゃん」

冷や汗がどつと出てきたのを肌で感じる、彼女ある意味面白い人かもしれない、善人はそう感じた。

「あ、私のことはどうぞ『綾』って呼んでくださいなのです」

しばらく2人はお互いに改めて自己紹介をした。

「へ、へえー高校3年生だったんですね……」

「敬語にしないでくださいなのです」

ムスツとしてストローを啜る綾乃、敬語は使わないでほしいと言うのに彼が遠慮がちなことに少し意地になって説得をしようと試みる。

「でも俺2歳年下ですよ」

「同じ高校ではないから先輩後輩ではないのです。だから敬語は使わないで欲しいな」

綾乃は同じ高校の生徒ではない。しかし彼女は同じ高校にいたとしても敬語を使わないでと言っていたであろう。敬語は人と人の間に壁を作る言葉であり、それを彼女は嫌っているのだった。

「でも年下だし……敬語使ったほうが」

「今度敬語使ったら殺しちゃうかもですよ？」

綾乃は両手を組み肘をテーブルについて組んだ手に鼻先を当て小首

を傾げるその状態で、更に笑顔でそう言った。そのセリフは爽快感さえ感じられた、何故殺すと言う言葉が使われているのに関わらず爽やかなんだろうか……。

「え？……おっけー分かった……」

笑顔の裏の恐怖という物に顔が思わず引きつる。

とりあえず善人に対して敬語を禁止したところで……会話が途切れた。

しばらく何を話していいか分からなくなり時間が過ぎていった。要するにネタ切れだった。

このままだとまずいと思った善人が話を切り出した。

「……じ、じゃあ場所移動しない？」

それを聞いた綾乃は良し良しと言わんばかりににこつと微笑んだ。善人がタメ口でそう言うてくれたのだから。

「おっけーなのですよ」

とりあえず外へ出て行った即席カップルの2人。
これから2人はどこへ行くのやら。

「こよいー少し離れてくれ」

今日はこよいとお買い物。近所のいつもお世話になっているスーパー

ーの食品売り場に連れて来させられたのだった。

「なんで？」

「……歩きにくいんだよ、ちょっとだけ離れてよ」

「こよい、離れたくないよ……」

お前の頭で展開するその恋愛ドラマは恐らくこの間見ていたやつだろう、俺も傍で見ていたからな、覚えてるわ……。

ちなみに俺はカートを押す役。そしてそんな俺にこよいが密着してくる。

歩きにくい。とても歩きにくい……。

「あはは、ゴメンねお兄ちゃん」

「……でも離れるつもりは無いんだよな？」

「もちろん！」

笑顔で返された。それも即答だ、その返事を聞き俺は一つため息を吐いた……。

「で？そろそろタイムセールの時間だと」

タイムセールだけあって続々と集まる中年のおばちゃんたち、さり気なく入り口を連れとふさぐその技(?)に苦笑いをする。

「そうなんですよお兄様、これに勝てば家計がグツと楽になるんですよ」

「そうなんですかー」

俺は棒読みで返事をした、生きていく為だ、おばさんに囲まれるく

らいなんてことない、そんなことを考えていた。

でもさあ！なんか悲しいんだけど！！咲月さんの後に見るおばさんは何かつらい！

スタイルの良い咲月さんのボンキュッボンとは違い、脂肪とベルトでボンキュッボンなおばさまたち。

あの中に入り込んでいくんだと思うと思わず、うつ……！と手で口を押さえてしまう。

吐き気を抑える俺、ほぼ放心状態にありますゆえ、妹様ようかちよっかいを出さないでくれ……。

その後もぞろぞろと集まるおばさま達。

俺の視界が中年おばさんで満たされそうになった時、俺はこよいでそれを中和した。

「こよい、悪いけど俺だけを見つめていてくれ」

「え？」

この状況下でこよいはせめてもの救いだ。おばさんに染まってたまるか……！！

と思いつつ妹で中和し始めるシスコンと噂され始めた俺。

「な……何？お兄ちゃん……なんか……恥ずかしいよ……」

うわぁ……その上目遣い……すごく良い……っておいおい何考えてるんだ俺。

でも中和効果は抜群だ、俺の顔に生気が戻っていくのが自分でも分かる。

「頼むから、いつものこよいに戻ってくれここに來てまで俺をから

かうのか」

「リアクション低いこよいはボケても楽しくない」
こよいが少し拗ねた。

「俺はボケられても笑えない」

…俺も拗ねた。

そうこうしているうちに時間が迫ってきた。

ちなみに俺達が狙うのは牛肉。

「お兄ちゃん…そろそろだよ…！」

「ああ…分かってる…！！」

俺は出せもしないオーラを出してみようと意気込んだ……もちろん無理だった。

しかし、意気込まないと吐きそうで吐きそうで……。

しばらくもしないうちに周りがざわざわし始めた。そして一度入ってみたい関係者以外立ち入り禁止の扉から男の店員さんが1つの力ートを押して出てきた。

『それではー！只今より…ッてうわあああああ！！！！！！』

その店員さんはおばさんパワーにより暴行を受け床に転がった。どこのアクションアニメだよっ！俺は思わずそうツツコミを入れた。

そして彼はほかの店員さんによって救助された。

ちなみにカートの中の俺たちが狙う商品は勢い良く何故か広範囲にぶちまけられた。おかげでこの戦争の最前線に立たなくて済みそうだ。

それにしても…ご愁傷様でした。

「こよい！」

「分かってる！」

俺たちはすぐさまにその何故か広範囲にぶちまけられたお買い得商品をゲットしようと

おばさんの中へと突っ込んで行った。

「今夜はこよいのハンバーグじゃおらあああああああ！……！」

「よっしゃ！獲つ　クソッ！放せよ！」

ようやくパックが獲れたと思ったら1人のおばさんを取り合いになった。

ちなみにあちらこちらでも商品の取り合いになっている。それゆえこの騒ぎがなかなか収まらない。

本気で奪い返そうと思っていたとき。悲劇と言わんばかりの出来事が俺を襲った……。

「これは俺が最初に獲ったんだよ……！！！」

「奪えばそんなの関係ないわよっ……！」

そこから綱引きのごとく引っ張られ引っ張ってと長期戦に持ち込まれた。

「放してくださいよっ……！」

「いやよ！私には家庭があるのよ！？」

「それはこっちも同じ！！」

しばらく引つ張っては引つ張られという状態が続き、次に俺が引つ張ろうとした次の瞬間：俺の手が悲鳴を上げた。

「あああああああああ！！！！！！！！」

俺は痛みあまり大声で叫んだ。

13話（後書き）

ちよつといいですか？…一話一話が長くてだるくなりませんか？
だるく感じられる方がいらしたらそう言つて下さいお願いします。
別に大丈夫だよ」と言う方も大丈夫ですよと教えてください。お願いします

面白かったですでしょうか？評価などをつけてくださるとうれしいです。
感想お待ちしております。ではこの辺で…

PS・10/23日以前より大分文字数が増えました。（修正により）

14話（前書き）

感想ください。おねがいします。

14話

「いてえよ！いてえよ！！いてえよ！！痛いって言ってんだよこの野郎ツツ！！！！」

俺は1人のおばさんと商品の取り合いになった。

引っ張っては引っ張られ、引っ張っては引っ張られを繰り返していた。

事件は俺が引っ張ろうとした時に起きた。

俺が引っ張る瞬間、おばさんはそれを引っ張り返さずに逆に押した。もちろん極端にバランスが崩れ商品から手が離れ俺は床に尻餅をついた。

それだけなら良かった。

すぐに立ち上がろうとし俺は床に手をつき立ち上がろうとした。

次の瞬間、俺たちが求めている商品で争っていた他のおばさんが俺の手を靴で踏んだ。

踏ん張るがゆえに力が入っていたそして……よりもよってその靴はヒールだった。

まず最初にその手を退かそうと思った。凄く痛い

しかしなかなか抜けない…動かそうとすると激痛も走り一気に顔が青ざめていった。

そこへ追い討ちを掛けるがごとくヒールのかかと部分が更に患部へ食い込んで来る。恐らく踏ん張ったのだ。

そして俺はその痛みあまり叫んだ……。この際声が枯れたって良い、だから誰か気づいてくれ頼むから助けてくれ……。

この大騒ぎの中あいつはこの異変に誰よりも先に気づいていた。

「お兄ちゃんから離れて！……！！！」

あいつの必死に叫ぶ声はここには届かなかった。

「あああああああああ！！！！！！！」

力を振り絞り俺はもう一度叫んだ。気付いてくれ……！クソッ……！！

『そのあんた！足！足！！早くお退き！』

ようやく気づいてくれた人が居た……。青ざめたままだったが少しだけ生気が戻ったような気がする。

「え？何だつて？」

俺の手を踏むこのおばさんはまだ気付いていなかった。

「お兄ちゃんから離れろッッ！！！！！！！」

「こよい……？」

こよいの声がした。それはとても殺気立っており、いつもより声のトーンが低い、周りに居たおばさんは思わず腰が砕けてしまった。言うならば殺戮状態、その普段のとは似ても似つかない殺気立ったその瞳、いや、眼球は俺の手を踏むおばさんを捉えており、こちらから見ても『殺ス……』という感情が痛いほど伝わってくる、正直自分のことよりこのおばさんの心配をした程だ。

それからこよいは俺の周りを囲む人を掻き分け俺の手を踏んでいた

おばさんを思いっきり力いっぱい蹴った。パンツッ！と肉が叩きつけられる音がする、こよいがなりふり構わずそれこそなぎ払うかのように回し蹴りをしたのだった。見事にヒットしたその蹴りを放つや更に追い討ちを掛けようと右腕を斜め後ろへ引き始める、その表情から見て殺そうとしていることが分かる、どうみたって『お手をどうぞおばさま』なんて顔をしていない、止めないとマズイことになる。それを目撃したみんながそう思っていただろう、でもあれに巻き込まれたくないんだろう、止めに入るものは誰一人としていなかった。

「痛！ちよつとアンタ何して」
2メートルか3メートル程だが確かに蹴っ飛ばされたおばさんが後ろを振り向きそう言い放った。

そのおばさんが全てを言う前に怒りでそのセリフを遮断するかのように叫ぶ。

「こつちのセリフだおらあ！！よくもお兄ちゃんを……！！
！あんた……いっぺん死ぬ？」
その言葉にはもはや殺気以外の何物でもなかった、鋭利的なそのセリフはまさにナイフのようだった。

「こよい！待ててこよい！　　痛ッ！！」
立ち上がるうとすると案の定手に痛みが走る。

「　　！ッ大丈夫！？」
俺に悲鳴を聞いたこよいは我に返ったかのように俺の方へ振り向き顔を覗き込む、さっきまでの表情とはまったく違ってもう今にも泣きそうなくらいの表情をしていた。

「頼むから警察沙汰になるようなことはしないでくれ……頼むから」

俺がそう言つとこよいはごめん、とだけ言つた。

その頃、この事件を嗅ぎつけたお客がざわざわし始めていた。

「あれ？なんか騒がしい…ハッ！しまった！今日はタイムセールの日だった！」

頭を抱えて悔しがりながら彼女は騒がしい方へと近寄つてみた。

「一体どうしたのかな？何があつたのかな？…ただ事じゃなさそう」

みんなの様子がおかしいことに気付いた彼女はただの興味でその事件があつたと思われる場所を覗き込んでみた。そして彼女は驚愕した……！座り込み、少女を睨み付けるおばさんとそのおばさんを殴りかかるうとしている少女、そしてその少女の足元には見知った顔が。

「有ちゃん！！？」

彼女ははすぐさま買い物袋を床に置き怪我をしたと見られる手をもう片方の手で覆つて痛みをこらえる彼の下へ駆け寄つた……。

ところでこの2人、いったいどこへ行くのだろうか。

行くあてなどあるのか？これではただの散歩である。

「はぁ〜やっぱりぶらぶらしてるだけなのは暇ですね〜」
ふいに綾乃はあはは〜と苦笑しながらそう善人に言った。
「そう…だね」

……まだ善人はタメ口を使う事に気が引けているようだ。

「そういえば善人はどの辺に住んでるのですか？」
思い出したかのように綾乃は質問をした。

「この先真っ直ぐのところ…」
多少緊張しながらそう善人はそう答えた。…いい加減タメ口に慣れないのだろうか？

「私の家こちら辺ですよ！？お家どこですか？！」
「あはは〜もう通り過ぎたぜー」

「え！？どこどこ？！どこですかぁ！？」

「教えませーん」
「教えてくださいます〜！」
「やーだ」

どうやら善人のいたずらスイッチがONになったようだ。

「ああ〜教えてくださいーもしかしてあれですか？」

「不正解。残念」

「じゃあ……あれ！」

「おおー！すげえ！」

「じゃああれが　　！」

「不正解です！」

「ガクッ…年上相手に結構やりますね…」

善人はいじめるときは自分が満足するまでいじめる習性があったりなかったりする。

「あははゝ絶対教えな―い」

「…善人のいじわる…私をいじめないで欲しいのですよ…?」

「その上目遣い…かわいいです」

「わわっ!?! かつからかうのは良くないのですよ?!」

「からかってなんかいいよ?」

「善人のいじわる」

これが善人の初恋の始まりだった。

14話（後書き）

応援よろしくお願いします！

感想はどんどん送っちゃってください。
ではこの辺で

15話

とある事件のおかげで俺の手は骨折した。
字は書けないし箸も使えない。俺はものすごく困っている。

「有ちゃんはいこれノート」

咲月さんが俺にノートを差し出す。

「あゝありがとーいつもごめん」

感謝を述べつつそれを受け取った。

「全くと良いんだよこれくらいー」

俺は怪我をしてから咲月さんに代わりのノートを取って貰っている。
字が満足に書けない俺にとってはとてもありがたいことだった。

唯一困っているのがこの状況を楽しむ人がいるということだ。

「有ちゃんー一緒に食べよう」

「うん、いいよー」

今日もあれが始まるんだろうなーと思いつつカバンからこよいお手
製のお弁当
を取り出した。

「おおーこよいちゃん今日もがんばってるねー」

「そうだね、じゃ早速　てあれ！？スプーンがない!？」

あるはずのものが無い…こよいが入れ忘れるはずもなく、俺はすこ
く驚いた。

「ふっふっふ」

咲月さんがなにやらわざとらしく笑った。

「まさか…咲月さん…!？」

半信半疑どころではない。完全に咲月さんが犯人だ。……と思う。

うん。多分。

「ピンポン！正解したのではないあーん」

そついいながら咲月さんは一口サイズのハンバーグを乗せたスプーンを差し出してきた。

「……ちょ、まつ、ほら周り見て咲月さ」

「へへへー周りなんて気にしないでいいんだぜ」旦那さん

ほら、この状況を楽しんでる。咲月さんはこの状況を楽しんでる……ん？【お前も楽しんでるだろ】だって？……う、うるせえ。

「はいあーん」

「……………」

どうしても周りが気になる。

「はい次ー」

でも咲月さんはお構いなし。

「……………」

言うまでも無くクラスの男性陣の視線を痛いほど感じながら昼食を終えた。

「なあ有」

善人が声を掛けてきた。

「なんだ？」

「殺していい？」

「やめとけ」

……どうでもいいことだった。

放課後となり下駄箱へ行き咲月さんに靴を取り出してもらった。

「ありがとう」

そう言って靴に足を入れた。

「どういたしまして」お礼に頭をなでてくださいな」

「はいはい」

咲月さんの頭をなでるとえへーと照れたような声が出てきた。

それから手を離すと俺の手からシャンプーのいい香りがうつすらと漂ってきた。

「じゃ、帰ろうか」

「そだね」

家に帰ると今度はあいつがいる。テープでグルグルな手を見てひとつため息をついた…

15話（後書き）

明日も投稿するんで短いとか言わないでください><

感想どんどん送ってくださいこの作品に対する評価もお待ちしております。
ります。

そして応援よろしく願いしますということまでこの辺で。

16話

家に帰るとあいつがいる。もちろんこの状況を楽しむ一人だ。

「ただいまー」

俺は玄関のドアを開けた。一瞬飛び掛ってきたらどうしようと思ったけどそんなことは無かった。

「お兄ちゃんお帰りー今日はシチューだよー」

うれしいことに自重してくれたいらしい。

「今日もシチューか」

的確に突っ込みを入れカバンをソファーに置いた。

「ギクツ…ふ、二日目はおいしいっていうじゃん？」

「それはカレー」

続けざまにくるボケもちゃんと突っ込んだ。

ここ最近、こよいは箸を使わせようとしない。

弁当もハンバーグやから揚げ。野菜でいうとブロッコリーとかスパインとフォークで何とかなるものしか入ってない。とても気が利く妹だと思つづく思ったりする。

「今日ねー美咲ちゃんがねー」

こよいが世間話を持ち込んできた。

「美咲ちゃんって確か善人の妹ちゃんだったっけ？」

確かそのはずだよな。

「うん、でねその美咲がね今日ね『お兄ちゃんに彼女ができたみたい』って言ってた」

え？…

「は？！あいつが！？」

「うん、なんかそう言ってたよ」

そうかーとうとうあいつにも春が来たんだなーもういつそのことから年中冬眠しとけばいいのに。

俺がその話について色々口々に思っていることを口には出さず頭の中、脳内で並べていつていると、よいしょと、こよいが器にシチューを入れてやってきた。

「あれ？こよい…器がそちらに二つあるのはなぜ？」

質問しているが俺はこよいがやるうとしている事が薄々分かっている。多分これはあーんって来る。

「もーわかってるくせにこのこのー」

片手に器を持ちもう片手でスプーンを持ち…ってほらあー当たってるじゃん…

「シチューくらい自分で食べられるってば」

差し出されたスプーンを見て後ずさる。

「そう？じゃあはいあーん」

俺の隣に移動してもう一度あーんとスプーンを差し出す。

首を引っ込める。そこにこよいが迫る。まるで俺がシチュー片手の女の子に押し倒されたみたいになっている。

「はい口空けてー空けるーこんちくしょー」

うー。とこよいがほっぺを膨らまし迫ってくる。くそーこっという顔かわいいんだよなー

反則だその顔。

「あ・け・て！」

まだやるつもりかこよい…ああーやめろーそんな目で見つめるんじ

やねえ

お前はいいかもしれないが俺が恥ずかしいんだ。頼むから分かってくれよ…

「なあゝお願いだからさ俺の言うことをきいてくれないか？」

「却下」

即答かよ。しかも笑顔で言うな笑顔で。

「ほらあーん」

もうダメ…くそーこいつかわいいなゝ妹離れできねえかも…

「……ん」

結局シチューは有りが美味しく食べましたとさ。もちろんこよいのあーんで…

16話（後書き）

今後どうなるんだろ…この作品。

感想や評価待ってます。感想や評価待ってます。大事なことで

2回言いました

お気に入りに入れていただければうれしいです。

ではこの辺で

17話

「早く治らないかなあ？ホントに」

俺の手が傷を負っている事はもう分かっていると思う。

だから俺はこよいと咲月さんに好き放題やられている。

抵抗しようとするといつも手が出る。そしてその度に痛みが走って…

いつも通りの登校。俺は咲月さんと必ずと言っていいほど一緒に登校をするようになった。

ほら今日もあそこの角から…

「有ちゃーん…っていつけねーこんなことしたらケガに響くよね」

ほら来た。しかも有ちゃーんって言いながら両手を広げていたとなると恐らく怪我さえしていなければ抱きしめられていただろう、少し状況分析をしてみればこの手の傷についてのイライラが増してきたような気がする。それから俺は少し嫌味っぽく、

「あははーまだ治らないんだよねーこれ」

と、開いて閉じる行為もままならない手を見ながらそう言った。

「早く治ればいいのにねー」

全くですよ。こよいといいあなたといい、俺は好き放題されてますからねー

「そうだねー全く」

とりあえず今日は何も起きませんように…

咲月は今日もあーんしてやろうと思いつながら有二に声を掛けていた。
ふっふっふ、有ちゃんが恥ずかしいことは分かっているんだよー。
でもさーあたしだってあーんってしたいんだよねーそしてされたい
んだよねーでも「あーんってして」なんて言えないよねえ……でも
まあ今は怪我しているから仕方ないとして、でもそれが治ったら頑
張って……へへ、照れちゃうかも、ってか言えるわけないよー。

頭の中で楽しいことを考えていると、そのムードを壊すかのような
何かがいるかもしれないということにあたしは、

「ちよっと待って」

「ん？何？」

と、有ちゃんを呼びとめた。あたしはどうも誰かに見られているよ
うな気がした。この感覚は嫌でも忘れない、誰かにジッと見られて
いる感覚、多分後ろの方から見てる。

そうなると当然のごとく後ろが気になって後ろを振り向いてみた、
けれども結局何もそれらしきものは見えなかった。

そうなつてくるとこの不思議な行動をなんでもないとと思わせないと
かえって有ちゃんに心配を掛けるかもしれない、そう思ったあたし
は靴を履きなおすかのようにコンコンと鳴らして前を向いた。

「おっけーいやいや今ねー靴に足がちゃんと入ってなかったから直
したんだー。じゃいこ」

「ふーん。ちゃんと履いて来ればいいのに」

良かった有ちゃん気づいてないみたいだね。それにしても…何だっ
たんだろ。勘違いならそれが良いんだけど。

「って、今あたしのこと軽くバカにしただろ？このこの」
「やつやめろ頭を撫でるな撫でるなってこら」

でも、絶対誰かがいたって……絶対。

弁当弁当！今日も有ちゃんにぁーんってしてやるぞー！

というわけであたしは有ちゃんが教室にいないうちに有ちゃんの弁当からあらかじめスプーンを取っておきました！。

あれさえなければぁーんしなくなるでしょ？食べる方法。ふふ、あたしっていたずらっ子だね。

有ちゃんがイスに座って弁当の中身はなんだろうな、と言わんばかりの表情を浮かべながらその弁当箱を開けた。

「弁当オープン！いつも通りスプーンが無い！？」

有ちゃんはすぐあたしを見た。まさか……犯人は咲月さん！？って感じ。

この反応がかわいいんだよねー早くあたしだけのものになればいいのにー。

あたしの仕業だと気づいてそうだからここは少し意地悪そうに、

「あつはつはー見たまえ旦那さん、スプーンはここだよー」

と、さあさ弁当箱を渡してもらおうかー。そんな感じにあたしは頂戴の手を差し伸べた。

すると有ちゃんはポツリと、

「もうスプーンは懷に持っておこうかな……？」

なんてことを言ったもんだからあたしは少しムキになって、

「えー！そんなことしたらダメだよー！」

と、説教してやった、全く有ちゃんって子は……まあそんなことしてもあたしがスプーンを持ってきて有ちゃんのスプーンを奪えばいいだけの話なんだけどね！。

「ほら最後だよーあーん」

最後の一口も終わった。

「……ん」

どうやらまだ恥ずかしい様子です。かわいいなー有ちゃん。

「はい昼食終わり」

「ったく。恥ずかしい事この上ねえよ」

「またまたーそんな事言ってーうれしいんじゃないの？」

「別にーうれしくなんか」

うわーやっぱこの子独り占めしたい、有ちゃん最高！

17話（後書き）

感想お待ちしております。この作品に対する評価もお待ちしております。

応援のコメントがほしいです（おねだりおねだり）
お気に入りに入れてくれると嬉しいです

18話（前書き）

評価、感想お待ちしております。皆様の一言が励みになることをお忘れなく。

18話

お互いのメアドを交換し、タメ口を使わないようにお喋りを続け、それから善人がようやくタメ口になってきた来たところ。ふいに、突然綾乃がこんなことを言った。

「善人ー付き合ってくださいですか？」

つまり、善人は告白をされた。

「うん？あぁいいぜー」

この展開が予想できた善人は驚くことなく返事を返した。もしかしたら……とか思っていたが、まさかその勘が当たったとはな。

「おお意外と即決なのですな」

綾乃は返事を聞き、ニコツと微笑みながらそう言った。

「だって綾ちゃんかわいいし。逃したらなんかもったいない気がするしね」

今度は善人が微笑みながらそう言った。

「おおー嬉しいです。そんなこと言ってくれるなんて」

そう言いながら綾乃は善人の腕に抱きついてみた。

白川綾乃。彼女には親2人に姉が1人と弟が1人。

そしてここらじゃ数少ない女子高校に通ってる3年生。

男子禁制の女子校だから出会いが無い。なのでよく彼女は町へと出かける。

男性との交際は善人が始めて。勇気出して声を掛けたかいがあったみたいだ。

「そついやさー綾ちゃんの『』ですよ」とか『』です」って口癖？
行宛も無く歩き続けてみると、義人はそれが気になったので口癖について質問した。

「ああー、これは意識して使っているのですよ？だから口癖ではないのです」

「どうやら口癖ではなかったようだ。」

「へえーそうなんだ」

「そうなのです。結構昔から使ってるんですよ？」

「ちなみに善人でその質問をした人数は確か：13人目だね」

13人：善人はそう眩き

「13人か、ちなみにそれが素の綾ちゃん？」
と質問してみた。

「うん。これがあたしの素だね。ってもうこんな時間。今日はここでおさらばです」

時間を見てみると午後6時半だった。

「ああうん。分かった。じゃあまたいつか」

名残惜しさを感じながら善人はそう言った。

「うん。じゃあまたいつかね今日はありがとね善人」

バイバイと綾乃は手を振る。善人もじゃあなと手を振った。

そして綾乃は帰宅した。

「ただいま」

玄関のドアを開けると弟が見えた。弟こと巧たくみは

「綾姉あやねえお帰り：どうした？なんかいいことあった？」

と聞いてみた。

「なんでもないよ？」

そう答えたが本当はなんでもあつたりする。

「あり？綾乃帰ってたんだ。どうよ？彼氏は見つかったかい？」

綾乃の姉こと紗希紗希が声を聞き綾乃に今日の成果を聞いてきた。

「なんと。がんばってゲットしたよ」

そう答えると紗希はおー！とビックリし、巧は

「え？！姉ちゃんに彼氏！？…何の間違いだこれは」
とビックリしていた。

「こら、巧。お姉ちゃんにだって彼氏はできるんですよー」

そう言いながら綾乃は弟の頭にチョップをお見舞いした。

「綾乃やるじゃんー」

自分の事のように喜び始める紗希。

「結構よさそうな人だったよ」

善人のことを思い出しながらそう付け加える。

「はあ…やつは彼氏で来ちゃったんだね綾姉…失望したよ」

そう言いながら巧は肩を落とした。

「そっかあじゃああたしも頑張らないといけないねえ？」

その言葉を聞き綾乃はえー？と一言。

「そついえば大学に良い人はいないの？狙ってる人とか」

「あれ？俺のことは無視？…まあいいや、風呂入ってこようっと」

巧は相手にされないと感じて風呂場へ行った。

「ええ？ダメダメみんな誰かと付き合ってたりするんだもん」

「でもお姉ちゃんスタイル良いんだからすぐ彼氏は見つかるって」

綾乃から見て紗希は完璧だと思っている。

「そうかな？」

そついうといやみのように綾乃が

「胸は大きいしウエストは細いし料理はできるし。あと胸大きいしさ完璧じゃん」

と言った。すると姉はわざとらしく両腕で胸を寄せあげた。

綾乃の言う通り、紗希の胸は大きく、それは綾乃の目標だったりする。

「ん？胸が大きいのがうらやましいのか？2回言ったよ2回」

ほれほれとそれを見せ付ける紗希、そして気にしている事がばれたくない綾乃は

「え？…ああいやいやあのっあれだよ【大事な事なので】ってやつだよ」

と誤魔化した。…誤魔化せてないのは置いといて。

「ふーん、まあ別にいいんだけどね…そっか綾乃は胸にコンプレックスを…」

紗希は自分の胸を見つめる。確かに大きいけど…そんなにうらやましいのかな？と思った。

そんな時、なにやら巧が着替え忘れたーと戻ってきた。

「ねえ巧、どうよ？」

両腕で胸を寄せ上げ弟に見せ付ける姉。

「お願いだからやめてくれー！」

目と鼻を押さえる弟。それ見て姉はさらにからかってみる。

「とかいいつつ？見たりするんだよね巧ー」

あははと手を叩いて笑い始める姉。そして隣ではあーとため息をつく妹だった。

18話（後書き）

感想や応援のメッセージ待ってます、是非送ってください喜びます
ではこの辺で失礼します。

19 話（前書き）

評価、感想大歓迎です。

19話

咲月さんと一緒に下校。2人で手を繋ぎまだ明るい町を歩いた。

「はあゝ有ちゃんの家に遊びに行きたいんだけど妹ちゃんが面倒なんだよね?」

勝手に思い込んで失礼なんだけど…俺の部屋に行きたいだけだった
りして?

「ああゝ。まあねこよいが何をするか分からないからなー」

でもこよいの奴女の子を連れ込んだら…下手すりゃあの時のバツト
で襲い掛かりそうだし…。

「あでもさ有ちゃん。有ちゃんの部屋に何とか上がりこめば大丈夫
なんじゃない?」

普通はそうだよな。

「それがさ…俺の部屋こよいに占拠されたんだ。ごめん」

「え!?!どゆこと何で?!」

もう笑うしかないよこれ。

「なんか…トイレから帰ったらベッドがあつて。それから占拠され
ていった」

「ちよつと待つて…じゃあ何?有ちゃんはその…こよいちゃんと同
じ部屋で寝てるの?」

うわー恥ずかしい質問来た…正直に言つたほうが良さそうだなー。

「…まあそういうことになる」

「ええええ!?!マジ?!兄妹とはいえお年頃の男女が一つの空間
で一夜を過ごすって危なくない?!」

「その一夜って言うのやめて、なんか危ないものを連想させそうだ
から」

何があってもそれだけは避けたい。全力でそう思う。

「…そっかごめん」

「でも俺だって抵抗したんだけどねーあっちは武器持ってた」
バットですよバット。あんなの反則だっつーの。

「それで逆らえなくなつたと」

「そゆこと。じゃまた明日」

繋いだ手を離し、俺は咲月さんに手を振った。咲月さんは笑顔でじやあね〜と手を振り返してくれた。

それにしても。一つの空間で男女と一緒に寝るということはそれだけで何かがあってもおかしくは無いと思う。うん。でもまあ……うちの場合はいたずら程度に収まるから大丈夫だろ。

一人になってから、カラスや飼い犬の声を耳に、電柱や電線。商店街のポスターを目にしながら帰っていた。

するといつもより一枚ポスターが多い事に気がついた。

「夏祭りか……」

嫌でも覚えてるぞ。去年はこよいに振り回されっぱなしだったっけ？
しかも「これおいしそう！」の連発……んで俺がお金を取り出そうとしたら

「こよいちゃん！これサービスだよ！」とタダで様々な食べ物が手に入ったんだ。

……お面が欲しくて同じように「これおいし……」と言いかけたのには笑えたけどな。

今年は何とかして咲月さんと一緒に居たい。

浴衣姿の咲月さんと一緒に夜空高く打ちあがる花火を見たい。
できれば本当に邪魔が入らないで欲しい。二人っきりで居たい。

だからそれを叶えるべく、とりあえず俺は立ち止まりこつ言っ
た。

「いつまで隠れてるんだ？」

19話（後書き）

感想や応援のコメント大歓迎ですのでどしどし送ってください。

20話（前書き）

昨日はドタバタしてて投稿する事が出来ませんでした。

感想、評価待ってます。お願いします。

20話

「出てきなよ」

そう言っていると彼女は電柱の影からそつと出てきた。

制服を着ている。という事は学生さんだな……つてこよいと同じやつじゃないか？

もしかして同じ組の人だったりするのか？それだとして……何のようなんだ？

「ねえ、もしかして中学生？」

この制服には見覚えがある。こよいと同じだ、いつも朝それを見ているんだ俺は。

「あ、はいそうです中学3年です」

当たった、しかも3年生ときた、もしかして

「もしかして平沢こよいを知ってたりする？」

「は、はい！こよいちゃんとは同じクラスメートですっ！」

出た。クラスメートか……でもそのクラスメートが俺に何のようだ？

……つてか何でストーキングされにやらないんだ？

「クラスメートか、うちのこよいがお世話になってます」

とりあえず俺は目の前のこよいのクラスメートに挨拶しておく。

「いえいえいいんですよ」

ちゃんとこれを解決しよう。ずっとストーキングされてたら気が気じゃない、さあ早速本題だ。

「……で？何でこついうことしてるの？」

「何で……と言われても、本当なら普通にこうやって堂々と話したいんですけど……」

ふと、頭に原因らしきものが浮かび上がってきた。

「あ、もしかして隣に女の人がいて出て来れずに隠れてたって訳？」

「えへへ……そういうことです」

当たり……か。咲月さんが気になり話しかけられず電柱から機会をうかがっていた……。

「あっあの」

急に彼女がもじもじして身長之差もあつてか上目遣いで何かを質問するかのようには言葉を切り出してきた。

「え？何？」

「もしかして……あたしのこと覚えてませんか？」

……どうやら一度出会っているようだ。

「……ちよつと待てよ、でも思い出せない」

思い出せ、思い出せ。この子は誰だ？何処で会った？何者だ？こよいが家に連れてきたことなんて無い、友達すら連れてこないんだ、それはそれで心配だ、ってか一体この子誰だよ。

「……やっぱり覚えてないんですか？」

……なんか俺が悪者みたいになってきた。

念のため状況を整理しよう。

朝俺はストーカーの存在に気づいた。でも咲月さんに心配をかけないようにその時は無視した。

で今1人になって話を聞くのにはチャンスだと思い「出てきなよ」

と言った。

それから少し会話をした。すると覚えてないんですか？発言。

要するに一度は会った事があるってことになる。

……でも思い出せない。何で？歳？いやそれはないだろ……多分、まだまだ15歳だ。

「ああ、こうすれば思い出せるかも」

「ちょ、突進?!」

ふいに受け止めようと両手を前に出す

！あ！思い出した！

「ストップ！ストップ!!」

俺今手をケガしてるんだよ！これ以上怪我を増やしたくないわっ！

「おっとっと」

よろけながら彼女はほぼ真横に飛び、徐々に徐々にそのスピードを殺していった。

彼女が止まったのを見ると俺は何も言わずに手を見せた。すると彼女は慌てて

「ケガしてるんですか?!ごめんなさい!」

と、必死に謝り始めた。

「ああいや分かってくれたならいいんだけど」

その必死さにこっちの気が引けてきた。悪い人じゃ……なさようだなこれ。

「本当にごめんなさい」

「いいっていいって」

ふと思う……あれ？シリアスモードどこ行ったよ？……もういいや俺のことだし。

「で、誰？わかんないや俺」

回答を求める俺。このモヤモヤを吹き飛ばしたい。ごめん、歳みただわ。

「えー？あの時あたしを抱きしめたんですよ？覚えてないんですか？」

「だ、抱きしめた？！」

何で！？おお、俺、抱きしめた！？何やってんだよ俺！ってかいつの話しだよこれ！

「はい！曲がり角でぶつかりそうになったあたしを抱きしめてくれたんです！

ああーあのときの有二さんかつこよかったな〜！」

いつだよ？！その曲がり角は何処だよ？！そしてそのピンクのふわふわした空間なんだよ？！

「……俺の名前知ってるんだねーあははっ……」

「だってその時呼び止めてまで名前を聞きましたもん」

呼び止めた？……なんか閃いたぞ

確か……咲月さんの家に行くときだ。曲がり角を曲がろうとして曲がったすぐそこにこの子が走ってくるのが見えて……それで思わず受け止めたんだ。

これが……【抱きしめた】って。

俺はそれがわかるとため息をつき誤解を解こうと内容に訂正を入れる。

「今思い出したよ。でも一つだけ訂正ね、俺は【受け止めた】のであって【抱きしめて】はない」

そっくだよぶつかりそうになったから受け止めてやったんだよ。そっかその時の子か。

「えー？抱きしましたよ、ぎゅーって！ー」
してないって。んですげえ嬉しそうだねキミ、こちとらすげえ迷惑なんだけど……。

「いやいや、抱きしめてない抱きしめてない」

「またー照れてるんですか？」

「照れてない照れてない」

何でからかわれてるんだよ俺。

「で、でも抱きしめてくれたのは本当ですよ？」

まだ言うか。抱きしめてないのに。ってか抱きしめたって部分は譲らないんだな。

「ああーもうそれはいいって。名前は？名前聞いてなかった」

話をそらそうと名前を尋ねた。抱きしめたって言ったたびにこの子昇天してんだもん。

「ああ、名乗るほどのものじゃないですよー」

「じゃ、『ストーリーさん』で」

そう言うとな彼女は慌てて

「ちょ、それはナシ！ナシですよ！」

と、そう言った。

「じゃあ名前は？」

もう一度尋ねると

「もう、仕方ないな！。あたしの名前は水橋詩織みずはしおりです」

彼女はそう答えてくれた。

20話（後書き）

本当に感想とか評価とかお願いします。

早く腕を上げていかないといけなくなりました。

本当なら安定した職に就いて養っていかないといけないんだけど、でも夢を諦めたくはありません。なので評価、感想をどうかお願いします。

21話（前書き）

感想や評価お願いします。

では面白い（？）本編は からです。

21話

あのストーカーは何だったんだろうか。悪いやつではなかったけど。そんなことを思いつつ自宅へと足を運ばせる。

八百屋や魚屋のおっさんが安いよー！と声を張って客を呼んでいる。そんな中を俺は歩いていき、いつも通り商店街のポスターに目をやった……すると夏祭りの他にも、もう一枚ポスターが増えているのに気がついた。

「そっぴや明日は七夕か」

どうやら七夕の祭りがあるようだ。まあ祭りといっても広場に竹がいくつも並べられ勝手にお願い事を書いた紙をくくり付けると言う内容になっている。これで祭りと言えるんだろうか。

七夕かあ、今年は何をお願いしようかな。

ふと俺は気が付いたかのように怪我をした手を見た。相変わらず治っていない、ヒール痛かったなあ。

だが、正直なところもう大丈夫だったりする。でも念を入れて安静にはしている、医者に言われたんだ大丈夫だと思ってからもう一週間安静にしよう、と。

とりあえず、ちゃんと治ってますように、とかにしようかな。

そんなことを考えながら玄関に立つ。思わずこれから起こるであろう事を思うと思わずため息が出てしまう。嫌な予感しかないのだ。

嫌な予感しかないが帰らないわけにもいかず、ドアノブに手を掛け、家へと入る。

「お兄ちゃんお帰り！ご飯にする？お風呂にする？それとも……言わせないでよう」
と、こよいが出迎えてくれた。

「……ご飯にする」
とりあえずそう答えておいた。

「あいあいさー」
そう言つてこよいは台所へ行つた。

七夕さあマジで何お願いしようか……うーん。こついつのが治りますようにって方が良くかもしれない。

そうやって考えているとこよいが戻ってきた。

「お待たせー」
「お疲れさん」

「今日はカレーですよーはいあーん」
平然と『あーん』をしてくるこよい。

「自分で食べるって」
当然のごとく俺は断る。

「でもー？折角作つたし？昨日のあーんが楽しかったし？つかまた

やりたいしー」

だそうです。身勝手すぎます。こっちの事考えてはいるけどもそれ以上にこっちのことを考えてください。

「こっちは恥ずかしくて死にそうだったんだけど」

ちよつと大げさだけどまあいいか。どうせ聞いちゃいない、筒抜けなんだよ。

「死んでないからいいじゃん？じゃ、あーん。ちなみに抵抗すればなにその脅し……」。

「それ以上言うな、分かったよ。言っておくけど治る間だけだから」

「はいあーん」

……聞いてんのか？こよい。

恥ずかしい時間が終わった。何故だろう嫌^{いや}なはずなのに、でも最近
は……。

今日は7月6日で明日は七夕。学校でも少しだけイベントがある日。
美咲は『彼氏が出来ますようにー』とかお願いするんだろうねー。

そう思っていると

「こよいー明日は七夕だろ？」
と。お兄ちゃんがそう聞いてきた。

「それがどうかした？」

多分『お願い事何？』って話かも。

「いや、何お願いするのかなーって」
当たった。

「知りたい？でもね教えない」

「何かそう言われると気になるな」

「人間の心理？そんな感じだよ」

入るなと言われると入りたくなるってあれだよ。

「まあな」

七夕。どうしよっかなー何お願いしようかな？ちなみにお兄ちゃんは何お願いするんだろ？

七夕祭り。咲月さん誘って一緒に願い事書いたりってのも悪くないよな。

出来ればこよいも一緒になんだけど……今年は無理そうだな。

そんなことを考えていると

「お兄ちゃん。大好き」

こよいがそう俺に言った。

「急にどうした？」

久々に聞いたからか少しドキツとした。

「うっん。何でも無いけどー？」

その意味ありげなその顔は何だよ。深くは追求しないけどさー。
「……そうか、ならいいんだけど」

「じゃあ寝るぞ」

そう言うところよいがソファーから急いでこちらへ来て俺の肩に手を伸ばし

「へいおんぶー」

と言った。仕方なく、【仕方なく】おんぶしてやることにした。

「はあ。いいけど背中で寝るなよ?」

どうせ寝るんだろうな。まあさっさと寝るのはいいんだけど。それ以上何もしてこないって意味だからな。

「おっけー」

それからしばらく。寝室のドアを開けてベッドにこよいを降ろす。

「……寝てるじゃん」

なんだか嬉しそうな、少しだけ微笑んでいるような、そして目を閉じすうすうと音を立てていた。

その顔を見るとこよいがとても可愛くて、とても大切に。そんな気持ちでゆっくりとこみ上げてきた。咲月さんも好きだけど、こよいのそれとはまた別なんだよな。

俺も布団に入って寝る事にした。

入ってすぐに寝られるわけじゃない。眠りに落ちるまでの少しの間
隣に寝かせたこよいの頭をさすり続けた。

何だろう。やっぱりこよいの事が……愛おしく感じる。

21話（後書き）

感想、置いて帰ってもらえると嬉しいです。

評価、してくださるととてもありがたくて元気が出ます。

お気に入り、追加してくださると自信が出てきます。

22話（前書き）

お久しぶりです！

感想や評価をどうかお願いします。

感想なんです、良いところと加えて批判してくださいとありがたいです。

用は非の打ち所がないよう作っていけばいいんですから。
協力お願いします。

22話

「お兄ちゃんはいこれ！」

そう言ってこよいに長方形型の紙を渡された。

「んじゃこよいはこれ持って書いておきな」

お返しに俺はこよいにペンを渡した。

「ありがとう」

ペンを受け取ると早速こよいは紙にお願い事を書き始めた。

願い事か。何にしようか。

「有ちゃんはなんて書くんだい？」

そう言って咲月さんが現れた。私服なんかかつこいいクールだなー。

「ああ咲月さん。いや、まだ決めてないんだよね」

ホント何書こうか書かなかつたらそれはそれでもつたいないと言いますか……

「あたしはもう決めてるけど教えなーい」

「妹にも同じ事言われたよ」

こよいは何を書くんだろうか……いや予想は付くんだけどね。一体何を書くんだろうねー！。

「マジかあははっ 案外こよいちゃんとは気が合いそうだねー」
気が合いそうって、いやいややめた方が良くないよ？マジで。

「そうかあ？こよいは敵対心を持って接して来ると思っけど」
そんなことを言っているとそのこよいがこちらへやってきた。

「こんばんはーお兄ちゃんのお友達ですか？」
うげー来たよ、うちの妹来たよ、もう書いたのか。何書いたんだ？

「うん。そうだよーこよいちゃんだよな」

「あ、はい平沢こよいです。兄がいつもお世話になってます」
ん？『あんた誰……！？』って予想をしてただけ……考えすぎだったか。

「おお、なんて礼儀正しい子。あたしの名前は姫川咲月、よろしくねこよいちゃん」

名前を告げられ咲月さんもこよいに名前を告げた。

「姫川さん。珍しい苗字ですね」

そっぴやそっぴや、咲月さんの苗字ってなかなか聞かないよな。

「そうだねーあんまり聞かないよねーってかあたしの事は『咲月さん』……じゃ被るから……有ちゃんどうしようか」

急に振ってきた！

「て俺に振るのかよ！？もう何だかっていいじゃん『姫川さん』とか俺みたいに『咲月さん』って事でよくない？」

被る。って『咲月さん』って呼ぶのは俺だけか？

「えー？じゃとりあえず『姫川さん』でいいや」
何か不満そうにそう言った。

「じゃあ姫川さん。改めてよろしくお願いします」
「ふふっこちらこそよろしくね」

この二人。実は一度は面識があるんだよね。ほら、手を怪我したときに。

「じゃ有ちゃん。ちょっとこよいちゃん借りていくね」

「ん？……まあいいけど」

何をするつもりなんだろう？まさか……女同士の激しいバトル……んなわけあるかよ。

「こよいは別に良いよ？お話してみるのにいい機会だし」
ああーやっぱ疑ってるよなー咲月さんが何者なのか。

なんかおなか減ってきたなー。

「こよいちゃん、何食べる？あたしもお腹空いちゃってさー」

「こよいは別に大丈夫ですよ？」

ふーむ、遠慮してるねー。

「またまたーそんなこと言ってーあたしの好意が受けられないのか？」

「いえいえそんなことじゃないですよ？……でもそう言ってくれるならありがたく頂戴します」

おおーいい子だ流石有ちゃんの妹ちゃん。

「よし来た、じゃあ適当に何かを買ってから付いてきな」

「あ、はい」

人も多いけど屋台も多いんだよねーったく。

「なーんかいろいろあるねー」

「りんご飴、綿菓子、チョコバナナ、焼きそば、焼き鳥、焼きイカ
その他諸々……」

お金はあるけど何買うか迷うなーって、やっぱり敬語止めさせようか
ー。そうしよう。

「これだけあると困っちゃうよねーってかあんまりあたしに敬語は
使わなくて良いよーいつも通りで良いよ？こよいちゃん」

「いつも通りは流石に……」

遠慮するなよー。仲良く行きたいんだよ？こっちは。

「そつかーじゃあ……ジャンケンポン！」

ふっ……勝った。

「え？！え！？……負けた。ってずるいですよー姫川さん」

！？今の上目遣いは何？！萌えた。ヤバいなんか込み上げてきたよ
……！？いやいや落ち着けあたし。

「テ、テイクアウトできないの？この子……」

「へ？何ですか？」

落ち着け、もちつけ、ぺったんぺったん……とりあえず敬語を解除
しなくては。

「いやいや何でもないよ？よし。罰として敬語を禁ずる！」

「えー！？気が引けま……気が引いちゃうよー！」

「おおー早速修正起動を利かせたか。おぬしやるではないかーでは
行こうー！」

かわいいー！やっぱこの子かわいいー！

こよいちゃんの手を引いて焼きそばと書かれた看板を立てている屋台にあたし達は入った。

「すみませーん焼きそば1つ、割り箸二つお願いします」

「割り箸二つね、いいよ400円になります」

「ちょうど400円で」

「はい400円お預かりしました。はいどうぞ」

「ありがとうございますーす」

焼きそばゲット。

「おーぶん！そして箸どうぞ」

「ありがとうございます……ありがとう」

敬語が解除されるのにはちよいと時間がかかるかな？

「そう。敬語は禁止、まだまだ続けるよー！じゃいただきまーす」

焼きそばを食べようとした瞬間こよいちゃんが真剣なまなざしで質問をしてきた。

「姫川さん。一つ聞いてもいい？」

「ん？なんだい？」

「姫川さんって彼氏居る？」

「……あっちゃーどう答えようか。いやいや待てよ？……これならイケる。」

「彼氏？……いないけど。あっ居ると思ったんでしょー！？」

「だってこんなに優しくしてくれるしモデルさんみたいに整った顔

……。絶対彼氏居るよね？」

「あははーまったくー彼氏は居ないっての」

いや、いるけどさ。いないよー！ちよっとおかしいね。

「じゃあお兄ちゃんには姫川さんにとってどんな人？」

「うーんそうだね。」
『好きな人』
「って所かな」

「……ちよつと待って『彼は！いない！？』は！？」

『は』を強調してきたね。気づいたかな？気づいたほうが話早くていいんだけどー。

「鋭いねえ。こよいちゃん」

「えっ！？明らかに姫川さんに対して好意を持っているお兄ちゃん。そしてそのお兄ちゃんの事が好きな姫川さん。二人は彼氏彼女じゃないとしたら一体……！？」

「まあまあその事は置いておこうじゃないかこよいちゃん」

さあ喰いついてくれよ？

「気になる！気になる！お兄ちゃん絶対言わないもん！」

よっしゃ釣れた！これでイケる。

「はあ……じゃあ教えておくね。ちなみにこれのせいで有ちゃんにとってなにか悪い事が起きたらその時は有ちゃん拉致しちゃうかもって事を前提にだよ?」

「え、ええ……ええええええ！！！！んぐうううう！！」

「こよいちゃん声大きいって……！」

周りの視線が一斉にこっちへ集まった。迷惑になると考えてこよいちゃんの口を手でふさいだ。

「ごっごめんなさい……で、でも婚約者?!」

やっぱびっくりだね。

「こいちゃんが不安になるような事は一つもないから安心して」
「あるよ！ 婚約なんかしちゃったらお兄ちゃんこいいのそばから消

えちゃうもん！そんなの嫌だよ……」
「やっぱこの子にとって有ちゃんは大切な存在なんだねー。」

「へ？……だから不安な事は一つもないって。誰が『二人暮らしをする』って言ったの？」

「え？どういうこと？」

説明してやんよこいちゃん。

「じゃああたしが考えているみんながハッピーになる事を教えてあげようー！」

「みんなが……ハッピー？」

「そー！【あたしは有ちゃんと二人暮らしはしない】要するにこいちゃんも一緒に暮らそうよって事。そしたらこいちゃんは大好きなお兄ちゃんと一緒に居られるでしょ？まああたしが有ちゃんを占領していない間だけだねーあははっ」

最低条件としてこいちゃんから有ちゃんを離さなければこいちゃんはそのだけで不安な事はないんでしょ？つまり一緒に住んじやえばいいんだよ。

「は、はあ……姫川さんって何かすごい人だなあ」

「これならいいんじゃない？ってかあたし以外の女の人と結婚なんかしたらそれこそずっと会えなくなっちゃうよー？」

まあ独り占めは無理になるけどそこは妥協してもらうしかないよね。

「う……確かに」

「だからあたしとは仲良くしようね？ホントに有ちゃん独り占めにしようと思ったら出来ちゃうんだから」

「……う、うん。仲良く」

よし、説得終了ー！

「はぁー！しゃべったら喉が渴いた！ほら飲み物買いに行こ！」
「……………うん」

七夕祭りに出向いていたのは有二たちだけではなかった。
数日前から、美咲は衛をこの祭りに誘っていたのだ。

「おーい衛！こっち来いよ！」
数名の男子が衛を呼ぶ、中学の生徒たちだ。

「あ！ダメ！今日は前からあたしが予約してたんだから！」
そこへ割り込むは美咲であった。
「んだよ美咲！お前衛の事が好きなのか？」
男子生徒が美咲をからかい始める。

「はぁ！？うつせーよバーカ！」
「バカはお前だヴァーカ！！」
「バカはすつこんでろバーカ！」
小学生のようなやり取りをしていると衛は
「ちょ……………俺の存在空気化」
と呟き、それを聞いた美咲は衛の手を取って
「さあ行こ！衛君」
と衛をどこかへと連れ出した。

強引にも美咲は衛の腕にしがみつき引つ張りながら皆が書いたお願い事を見ていく。

そして面白いものがあれば衛にも教えていった。

「こ、これは……」

衛が立ち止まった。美咲も立ち止まり

「へ？どれ？衛君」

と衛の見る短冊を探す。

「これ……書いた人思い当たる節があるんだけどまさか本人？」

「えっと？【お兄ちゃんと一生幸せになれますように！】……うん。多分あの子だ」

「こよ」

「あー！もう言わなくてもいいよー衛君」

そう言って美咲は衛の口をふさぐ。

「おっ合格祈願してる人もいる。あとは恋愛成就かー」

「あー【合格しますようにー】とか【彼女、彼氏が出来ますようにー】って？」

「うん。そうそう」

美咲はそれ以外の類のお願い事を見つけた。

「ふーん【有ちゃんの子供が出来ますように】子供かいね」

そう言って美咲は衛に視線をぶつける。

「何？その視線。俺？」

「べっつにー？さあどんどん見ていこう」

「すごいたくさん書かれてるよこれ」
若干呆れながら衛はそう言った。

「どれどれ？【彼女が出来ますように、受験に合格できますように、できれば先輩が彼女になつてくれると嬉しい……あと神崎先輩の口リコンが治りますように！父さんの浪費癖が治りますように！母さんが家に帰ってきますように！】……なんか悲惨な事が……衛君。見なかったことにしよう？」

「……賛成。なんか後半が悲惨だね」

まさかこれを書いた人が高校時代を共にすることになるうとは美咲も思ってもいなかっただろう。

22話（後書き）

少し長いですね。2週間分って事で先週投稿しなかった事を許して
！。

では読み終わったあなたの評価や感想を送りつけてください。

どんどんこの作品を盛り上げていきましょう！

ではこの辺で

23話（前書き）

評価してください！感想ください！もしも1話からここまで読んだ
所見さんは是非お気に入りに入れてください！

23話

祭りに参加している人は他にもいる。ほらあそこに……

「善人ーちよつと疲れたかも」

そういつて今にも座り込んでしまいそうなのは白川綾乃。

「あー疲れちゃった？じゃあ何か飲み物買って来てやるからさそこで待ってるよ」

「お願いねー」

善人は飲み物を買おうと出向いた。そこで彼は妹を発見した。

「お、美咲じゃん……え？！隣の彼はまさか、お前のげば」

「下僕ちやうわー！」

美咲が思いつき蹴りを入れる。善人は直撃の寸前で腹筋に力を入れそれに耐えた。

「おうっ！！相変わらずいい蹴りだ……ったく、男らしく成長して。

お兄ちゃんは弟が出来た気分だよ」

「うっさいわ！あっち行け！」

「へいへい買うもの買ったらさつさと退散しますよーだ」

「さつさとどっか行けバカお兄ちゃん」

これがいわゆるコミュニケーション。目の前でそれを見た衛は
「……兄妹ってすごいね」

と呟いた。

「衛君は兄弟いなかったんだっけ？まあ兄妹なんていない方が楽だと思っよ？」

「あははっ、そうかな？」

「そっだよ！いない方が良くよ」

善人が買い出しに出た頃。

「おーい、綾乃。ずっとそこで見てたよ」

「げっお姉ちゃん！？」

どこから現れたのか分からないが綾乃の後ろから紗希が現れた。

「げっ、とは何だよーそれにしても彼はイマイチね」

そう紗希が言うのと綾乃はムツとして

「お姉ちゃんでもあんまり悪い事言つと許さないよー？」
と威嚇した。

「あははっ冗談だよ冗談。……彼氏が居るのが憎らしい」
心の声がボソツと出てしまったようだ。

「ん？何か言った？」

「え？何も言ってないけど？どした、何か聞こえてしまったのか？
ちなみにあたしは何も聞こえなかったよ？……もしや幽霊の声が聞こえたんじゃない……！」

「ないないそんな事」

「いやいや案外あるかもよ？ってかお邪魔だよ、それじゃ
そっいいながら紗希は立ち去った。

「……なんで茂みに入ったの！？」

そう言われガサガサ音を立てて紗希は

「妹のデートを監視する義務がある！」
と言い返した。

「ないよ！そんな義務ないから！」

「で、ですよー。それじゃもう家に帰ってるね、お先ー」

綾乃の行動を見ててもキス一つもしない事につまらなさを感じ家に帰ってテレビでも見ようと紗希は思ったのだった。

相変わらず周りはお祭り騒ぎだ。そんな風景を横目にしばらく歩いた紗希は急に足を止めた。

「咲月ちゃん!？」

そう言って紗希は駆け寄った。

「えっ？紗希さん！紗希さんじゃないですか！お久しぶりです」
紗希が駆け寄ったのは咲月がいたからだった。二人は小さい頃の親友だ。

「やっぱ咲月ちゃんじゃない！大きくなってー」
まるで母のような台詞。

「えへへ。あの頃から確かにセンチは伸びましたよ」

「やっぱ少しは伸びるよね、で？この子は？」

そう言って紗希はこよいに視線を向ける。

「この子はこよいちゃん。あたしの旦那の妹ちゃん」

旦那と言うワードをさらりと受け流す。

「旦那って咲月ちゃんの？」

「はいそうです」

しかし、冷静になった紗希は事の重大さに気づいた。

「……ちよつと待って。旦那?!結婚したの!?早くない!？」

「いえ、まだ籍は入れてないんですよまだ年齢が達していないし」

「あそつかまだ15歳だっけ？咲月ちゃん」

咲月と有二共に15歳。結婚するとしても3年は必要になってくる。

「うん。15歳」

「あ、あの咲月：姉ちゃん」

おとなしくしてたこよいが口を開いた。

「うん？なんだい？」

咲月はこよいを調教していた。いまこよいが咲月姉ちゃんと呼んだのもそのせいだ。

「そろそろ家に帰らないといけないから帰るね」

「りょーかい！今度遊びに行くかもしれないからよろしくねー」

「うん分かった。その時はこよいが手料理食べさせてあげるね」

こよいはもう既に咲月に懐いていた。咲月の雰囲気なぜか心地良く感じたのだ。なぜかは分からないが。

「おおー！それは楽しみ！」

「ばいばい咲月姉ちゃん」

そう言って自宅へと急ぐこよいだった。

「ばいばーい！」

「あの子いい子だね咲月ちゃん。ああいう妹が欲しかったなー」

「え？綾乃さん。でしたっけ？彼女じゃ不満があるんですか？」

「まあね、最近善人とか言う彼氏を作りやがって」

「そうなんですか、ってことは紗希さん彼氏持ちじゃないんですか？」

ズバリと言い当てる咲月。結構鋭い。

「そうなのよ咲月ちゃん。困ってんのよーヤバいのよー！」

「大丈夫だと思うんですけどねー、たぶんアレですよ。紗希さんに

は既に彼氏が居ると思われてるんですよ。だから誰も紗希さんを狙わないんですよ」

そう咲月がフォローすると紗希は元気になった。

「……そっか！そういう事だったのか！なんだなんだそういうことだったのか」

「そういうことだったんですよー」

しばらく懐かしさを感じながら語り合っていた二人だったが時間も時間だったためアドレスを交換して二人とも自宅へと急いだのだった。

そしてお祭り騒ぎも終わり少し寂しさを感じながらも皆は去っていった。

「咲月さんもこよいもどこ行っただ？」
ただ一人、残されたものを除いて。

23話（後書き）

悪いところも書いてくださると成長に繋がります。今回は読者のリクエストに沿って紗希さんを出しました。

ではこれを読んだら感想も書いてくれると嬉しいな。ついでに評価ポイント入れてくださると大喜びします。
では来週もお楽しみに！

24話（前書き）

感想や評価を送ってください。評価してもらえると嬉しいな

24話

なんでも無い日のことだった。

「はい、お兄ちゃんはお留守番よろしくね」

こよいは有_二を置いてお買い物へ出かける。

「おう任せろ！行って来い行って来い！」

こよいの束縛から解放される有_二は少し嬉しげ。

「なんか機嫌良いねー？何か隠し事でもあるのかな？どうなの？」

「なーんもないって」

「ふーん、まあ良いけどね、じゃ買い物行って来るねいつも通り6時半には帰るから」

そう言つてこよいは靴を鳴らす。

「りょーかい、じゃあ気を付けて」

「じゃ、じゃあ行ってらっしゃいのチュー」

いつも通りこよいはふざけて求愛をする。いや、ふざけてはないか。
むしろ本気^{マジ}だろう。

この時こよいはまさかあんなことになるとは本人でも予想できなかっただろう。

「んなもんあるか、さっさと行って来いって」

そう言つてこよいはほっぺたを膨らませ甘えるような声で返した。

「うー、たまにはいいじゃんかよー」

「まあそうふくれるなよ」

「今日のところは見逃すでしょう、じゃあ行ってきまーす」

まさか有_二に『一緒に行けばよかった』と後悔するような日が来ようとは微塵も考えられなかった。

その頃、白川家ではこんなことが

姉弟が集合するこの部屋で綾乃が紗希に服選びを手伝ってもらっていた。

「姉ちゃん今度のデートなに着て行けばいいかな？こっち？それともさっきのやつ？」

綾乃はいくつかの種類の服を鏡の前で着替えてはうーんと唸っていた。

「やつぱりさっきのが良いんじゃない？」

「じゃあさっきのにしようかな」

「服選びはいいけどさ……普通に弟が居るところで着替えなんてするんじゃないよ、まあ綾姉だから別に大丈夫だけど」

「でもあたしとなると事態は一変しちゃうんでしょー？」

からかうかのように紗希は巧に聞いた。

「うん、なんかいろいろとヤバく変化するいろいろと」

そう返事した瞬間巧のほつぺたをつねる手が出現した。

「こら巧いいいいい！って事は何？！あたしに魅力がないと！？サービスもサービスでなくなると？！そう言いたいのかない！？巧！？」

たーてたーて、よーこよーこ、とその手を上下左右に動かす綾乃。

「やめろほつぺたつねるなこら、綾姉やめろって」

下着の姉にほつぺたをつねられる巧。いたって冷静であるが仮にこれが紗希だとする、恐らく巧はこんなに冷静を装えないであろう。何故かって？それは悟ってもらいたいところである。

「そうだよ綾乃、あんた今下着だよ？さっさと何かに着替えなつて」
綾乃の体を指差し紗希はそう言った。

「う……そうする」

確かに今自分は下着以外何も身に着けていない。もしこれを恥らわないのなら乙女として重症である。そう思った綾乃は即座に着替え始めた。

「まったく綾姉は……」

「まあまあ巧。綾乃だつて一応女なんだしさ少しは恥らつてあげなよ。確かに綾乃は魅力が少ないし、あたしみたいに胸が大きいわけじゃない。でも貧乳はステータスって言うじゃん？だからさ心遣いでいいから恥らつてあげてね？」

そう言つて紗希は巧を説得する。が、そこに

「さり気なくフォローになつてないフォローが聞こえるのは気のせい？！」

と綾乃がツツコミを入れた。

「え？何か言つた？綾乃」

白を切る紗希。

「いえ、なにも言つてませんが何か……！」

呆れて無かつたことにする綾乃。

「おおー綾姉からドス黒いオーラが！」

「出てないって！んなもん出ないよ！」

「いやいや綾乃だし。出せるかも！」

「出るわけないでしょうが！」

「つてかさつさと着替えてよ綾姉！なんかこう……ああーもう！なんでもない！」

……とまあ今日も平和な白川家だった。

所変わってこよいはスーパーで買い物をしていた。

「さあてお兄ちゃん、今日の晩御飯は何にしようかなー？って居ないんだった」

ある意味あの一件で食料品売り場が怖くなった有二はしばらく買い物には付き合わないとの事。

いろんな野菜とにらめっこをすることよいに声を掛ける人が居た。

「おや？こよいちゃんじゃないか」

「咲月さ……咲月姉ちゃんじゃないか」

それは咲月だった。ちょうど買い物に出ていたようだ。

「ふふっ可愛いーお主ゝわしの嫁にならんか？」

何故かプロポーズをする咲月。なぜプロポーズをしたのかは……謎である。

「お兄ちゃんが居るならそれでも良いよ」

快くプロポーズを受けるこよい。何故かは……やはり謎である。

「へへっもちろん有ちゃんも一緒だよ」

「なら良いよー、でさでさ咲月姉ちゃんは今日の晩御飯何にするの？」

主婦なお話に路線が変更された。

「あたしはねちよつと今日は疲れちゃったからさっさとチャーハン作ろうつて考えてる」

この日咲月に何があったのかはまたの機会と言うことで。

「じゃあうちもチャーハンにしよう」

「あらら、決めてなかったのね？」

二人で楽しくお買い物、作るものが作るものだったからあんまり長

くは話せなかったようだ。

簡単に材料が集まってしまったのだった。

「じゃあまた会おうねこよいちゃん」

「うん、絶対だよ？」

「ふふっ、りょーかい」

そう言つて二人は別れた。

この時咲月と一緒に帰つてあげればよかったと後で思ふ事となった。

そして事態が急変した。こよいが帰宅しているところへ二人の男女が現れた。

これがきつかけだった。こいつらが現れなかったら良かったんだと有二は後でこの二人を恨む事に。

「あなた、やっぱりこの子【こよい】よ」

「ああ、分かつてる、じゃあ行こうか」

そう言う二人はこよいのことを知っているようだった。

「買い物袋重いなーこういうときお兄ちゃんが居てくれたらいいのに」

そうこよいが呟いた時だった。

「すいませんちよつといいですか？」

「え？何ですか」

目の前には女の人、その後ろに男の人が立っていた。女は今にも泣きそうだった。男は俯いたまま何も言わないで立っていた。

「やっぱりこの子が……大きくなって」

まるで自分を知っているかのような台詞。思わずこよいは2歩3歩

と後ろに退いた。

「ちよつと何ですか？あなた達一体誰なんですか？」

「ごめんなさい、紹介がまだでしたね。私たちはあなたの親で、あなた達を引き取りに来ました」

この女は自分たちは親だと言った。そして引き取るとも言った。それを聞いたこよいの表情は一変して真剣な表情へと変わった。そして最善策を考えた。自分たちを捨てた人のところへ行くなんて最悪だ。

じゃあどうする……そうだ今のところ自分から名前を明かしていないじゃないか
相手に完璧な素性がばれていないのなら

「人違いじゃないですか？」

こよいはそう言った。

「え？」

女の人はまさに目が点といわんばかりの表情。後ろの男は相変わらず申し訳なさそうな表情をしていた。

「人違いですよ。それじゃ急いでるから失礼します」

そう言つてこよいは走り出した。まだ気は抜けない。こよいはわざとあらゆる道を使つて帰宅した。後ろから追いかけれ追いつかないためだ。

「人違い……？いえ、そんなはずは」

財布から2枚の写真を取り出す。そこには保育所の時代のこよいと有二。そして中学時代のこよいと有二が写っていた。これは母方、要するにこの女の母から譲り受けた写真だった。

一体何？親？いまさら何をしにきたって言うのよ？とりあえずお兄ちゃんに言わなきゃあと咲月姉ちゃんにも言っておこう、いざと言うとき助けてくれるかも

そう思いながらこよいは玄関のドアを開け、さっさと閉めた。

24話（後書き）

シリアス回ってこんな感じでしょうか？

とりあえず次回が気になれば僕は嬉しいです。

感想や評価、あと応援メッセージを募集します。 よろしくお願いします。

25話（前書き）

今週からあとがきのやり方を変えてみようと思います。

25話

「　　という訳です」

真剣な面持ちでこよいはそう言った。

「親か。一体引き取ってどうするつもりだよ」

なんかすごい腹立たしい、ぶん殴りたい気分。

「ってか信じられないあたしはその二人が許せないかも」

咲月さんもいつもと変わってイラついていた。こんな顔するんだね……。

「咲月さん……俺も同じだよなんかいまさらって感じ」

「ねえお兄ちゃん。どうしよう……」

こよいが不安そうな顔で尋ねてくる。そこで一つの疑問が浮かび上がってきた。

「うーん、どう対処しようか。ってか待てよあいつらどこに住んでるんだ？」

考えはしなかったけど今となっては結構重要なこと。現在どこに住んでいるのか。

近場だとそれはそれで遭遇しやすく危険だ。遠くに住んでいるとなると、最悪の場合……。

そんな事を考えていると咲月さんがその最悪の場合に気づいた。

「……！有ちゃんそれって！つまり何？あたしと会えなくなる可能性出てきたって意味！？そんなの有り得ない」

普段こんな大きな声を張らないだけあって今の咲月さんはとても迫力があつた。

「で、でも意外と近くかもしれないし、遠くに住んでいるとか決ま

った訳じゃない。んでもって俺は引き取られる気もさらさら無い今まで通り仕送りだけ続けてもらう」

俺たちを捨てておきながらどの面下げて来やがったんだよ、一回でいいから思いっきり殴ってやりたい。

「じゃあ引き取られないよう説得しなきゃだねお兄ちゃん」

「ああ。そうだな」

「でも有ちゃんどうするの？多分また出てくると思うけど」

「そうなんだよな」

「明日も来るかな？」

来るだろうな。俺だったらまた確認しに行く。多分来る、いや絶対来る。

その考えを伝えようとしたら咲月さんも同じ考えだったらしく代弁してくれた。

「来るかもねーあと、こいちゃんは『人違いです』って言ったんでしょ？」

「うん、言った」

「じゃあ遠くから見てる可能性が高いかも、相手側からすれば何かしろの方法で顔を見てると思う。あたしだったらそうだね、誰でも良いからその人の友人の卒業アルバムでも貸してもらうかな」

探偵だなあ、咲月さん。

「……やっぱり俺も付いていったほうが良いよな？」

強行手段に出たら危ないだろ、相手は二人だし多分片手に買い物袋だろ？

「いや、お兄ちゃんは今来ないで、二人揃って出くわしたら今度こそ誤魔化せないよ」

「そっか……」

「じゃああたしが一緒についているよ」

おー、咲月さんが付いているなら出くわしても何とかかなりそうだな。
「ホント?……でも」

で、でも? 断る気なのか?…… あでもこれで咲月さんに迷惑かけたら申し訳ないか。

「でも?」

「これはあたしとお兄ちゃん。ましてや家族の問題なんだよね。だからあたしだけでがんばる。でもヤバかったら咲月さんにも協力してもらおう」

「そっか、がんばりなよ? で、協力って?」

「うん。最悪の場合咲月さんが二人に向けて「うちの妹に用ですか?」って言ってもらおう」

それを聞いた瞬間、頭の隅で浮き上がっていたいろんな考えが繋がりそしてひとつの結論に至った。

「ちょっと待ったこよい、それはいいんだけどやっぱり真正面から説得するほうがいいんじゃないか?」

現実的に考えようぜ……。

「何で? 最悪の場合一緒に過ごすんだよ? こよいはそんなこと認めない。他に同居するなら咲月姉ちゃんしか認めないからね!」

お、怒られた……。

「おおーこよいちゃん可愛い事言うじゃない! 更に気に入った!」

咲月さん……! 今はそんなこと言ってる場合じゃないって!

「咲月さん可愛がるのは後にしてとりあえず話し済まさない?」

「うん分かった。で? どこからだっけ?」

「説得しようって所」

咲月さんはうーん、と考え込みこんなことを言った。

「……うーん、あたしが考えるにはその二人はお金に余裕が出来たから引き取るなんて言ったんだと思うのよね、結局有ちゃんとかよいちゃん的生活費ってその二人のお金なんでしょ？」

「ああ、あとおばさんの也使ってる、おばさんの講座にそいつらのお金が振り込まれてそこから俺たちの口座に振り込まれる、って流れでお金が入ってくる事になってる」

これが止まったらもう俺たちは生きて行けなくなる。要するにこのパイプが切断されたら俺たちの命も絶たれることになってしまう。

「ん？おばさんって？」

「俺たちを育ててくれた人の事。昔はおばあちゃんって呼んだ。今はおばさんって呼ぶことにしてる」

おばさんにはとても感謝してる。引き取り手が無い俺たちを自分から、私が引き取りますと名を上げてくれたのだから。

「そっかー、でさでさこちらの要求ってのは？」

「一緒に過ごす気は無い。そのままおばさんに仕送りを続ける」

あれ？そっぴやさっきの結論どんな考えだったわけ？パツと浮かんパツと消えたぞ……。こよいに怒られてるうちに考えを繋いだ鎖が解けてしまった。

翌日、こよいは警戒しながら家に帰ってきたのだがこよい曰く何も

無かったとのこと。

あれだけであきらめたとは思えない……日にちを置いているだけか？

こよいは買い物袋をテーブルに置き左手で右肩を押さえブンブンと肩を回す。

「ああー疲れた疲れた」

そう言つてこつちをチラチラ見てくるこよい。な、なんだよその視線は……。

「え？何その視線」

「べつにー？なんでもなくは無いけど」

「そつか、何かあるんだな。おおよそ見当は付いてるけど……」

ここしばらくずっと考えていた、結論から言うとなんか俺はあいつらにくまってもらった方が良かったんじゃないかと思った。だからあの場に俺が居合わせてたら話のひとつやふたつが入っただろう。もしそうなったら恐らくあいつらと一緒に過ごすことになったに違いない。だから俺は後悔した、こんなことこよいに言ったら怒られるに違いないだろうけどもつと現実に考えないといけないのがこの世の現実つてやつだ。それに実際、家計が苦しくなってきた。

とりあえずこよいが勝ち取った特売品をフルに活用してなんとかやつていけているけど……本当はジュースとか買ってる場合じゃないんだよね。120円あれば秋刀魚一匹買えちゃうんだ。そしてジュースを5回も我慢すれば600円。600円あれば色々と買えてしまふ。もちろん大きいものは買えないけど、でもそんなのいらないから論外だ。

そんなこんなで家計は結構苦しい。正直引き取ってもらって養って貰うほうが良かったのかも。

俺ながらシリウスに事を考察していると丁度こよいがエプロンを着て包丁を取り出していた。

こよいは昔から包丁を持つときにニツと笑う癖が付いてしまっている。それは狂氣的な笑みにしか俺は見えない、久しぶりに見たなこれ。この笑みはこよい曰くよーし、がんばるぞーと意気込んでいるらしい。

トントントントンとリズム良く何かを切っている音がする。同時に鍋の水が沸騰している音も聞こえる。沸騰したな、俺がそう思ったときにはこよいはその鍋に何かを入れていた。

慣れてるよなー、そういえば咲月さんの手料理オムライスしか食べたこと無いからふだんの料理が気になる。そういや一人暮らしだったっけ？

そんな事を考えていると、お兄ちゃんとかよいが呼び、俺はどうした？と答えた。

お風呂が用意できてるから先に入ってとかよいに言われた。俺は分かった、とだけ言って風呂場へと向かった。

風呂場へ行くと服を脱ぎ、体を洗うタオルと体を拭くタオルの二枚を持って浴室へ。

浴室に入ると後ろに振り返って鍵を閉める。ガチャ、その音が俺を安心させてくれる。

「なんで鍵閉めるのー？」

「なんでこよいはそこにいるのー？」

来たぞ、やっぱり来たぞ。こよいから風呂入って良いよ。ってのはもう夕飯は出来た、って意味も含まれている。だからこうやって俺を困らせに来ることができるんだ。

「……ねえ、お兄ちゃん」

急に悲しげな声でこよいが俺を呼んだ。

「ど、どうした？」

急に寂しそうな声を出すもんだから思わず心配してしまった。

「あのね、あの人たちが出てきたとき、『引き取りに来た』って言った時こよいはすごく怖かった」

「……………」

俺は何も言うことが出来なかった。どう言ってもやればいいのか分からなかった。

「お兄ちゃんと一緒に過ごしてもうすぐ半年。おばさんがこんな良い家を与えるなんて思わなかったよ」

「俺は不動産やってたんだ、ってビックリした」

それにしてもひとつ家を与えるなんて凄いとしか言えない、実はおじさんが相当稼いでいるらしい。だからこんなことが出来たんだとコレを貰った後におばさんからそのことを俺は聞いた。

「ねえ……初夜の時覚えてる？」

「初夜とか言うな、勘違い多発だ」

知らない人が聞いたらどう思うだろう。多分良い方向には思ってくれないだろうな。

「あの時ねこよいすつごい心臓バクバクしてて中々眠れなかったよ」
「何興奮してたんだよ……………」

明日は遠足だ……！ああー明日から修学旅行かーって少年でも最近

はアッサリと寝るんだけどな。そのところどうなんだこよい。

「ある日ダンスの角にお兄ちゃんが小指をぶつけてもがいてたりして」

「あんなことまだ覚えてたのか……」

【なぜダンスに小指をぶつけるのか】って題名で自由研究したっけ？結局パソコンで調べただけど……。

「カレーは作ったのにご飯炊いてなかったりした時悔しかったな」

「食べようと思ったら水に浸かった米を見て笑っちゃったよ」

「よし！食べるぞー……あれ？ご飯が。ってしばらくポカーンとしてたっけ？」

「でもね、わざとじゃないんだよ？全部こよいがお兄ちゃんのためにと思ってたやってるんだよ？」

「急にどうしたよ。変なもんでも食ったか？……ってちょっと古すぎるか。」

「分かってる、だから俺は怒らなかった、いつもこよいには感謝してる、ありがとなこよい」

「……っ！グスッ……」

泣き出した……！？この事態に俺は慌て始める。

「ちょ、こよい？……泣いて、いるのか？」

「な、泣いてなんかいないもん……ズズッ」

泣いてるじゃん、鼻水まで出てるのか？それにしても唐突だな……。

「鼻水すするな。ティッシュでなんとかしろ……」

「分かった……ごめんね」

「何で謝るんだよ」

そう言つてこよいは居間へと歸つていった。何だつたんだ？ 一体……。

風呂から上がり夕食も食べ終えた俺はさつさと寝ようとベッドに潜り込む。

「意外と早かつたね」

先客が居た。何十分か前に風呂場で泣いていたこよいだ。

「こよい、せめて自分ので寝ろつて」

「ヤダ、ここ動きたくない……」

「じゃあ俺がこよいの」

そう言つて移動しようと思つたそのときこよいが俺の腕を強く掴んだ。

「ダメ！ 行かないで！ 一緒に寝て？ ね、お願い……」

徐々にかすれていくこよいの言葉。俺は後ろのこよいを見た。

そしてこよいの目に溜まつた涙を見たとき俺の中で何かが動いた。

その直後に思い浮かんだ言葉は『シスコン？ 何とでも言え』

俺の決意は固まつた『あいつらなんかこよいは渡さない、こよいは俺が守つてやる』

そう決意した。

それから涙目のこよいに腕を掴まれた俺は一つ提案をした。

「なあ、こよい。ベッドくっ付けるか」

「え？」

こよいは手を離した、そして俺はこよいが使うベッドの横から力強く押した。

初めはギギギ……と嫌な音がしたがしばらく押していると抵抗感がなくなりスムーズに押せた。

「これで広くなっただろ？じゃ寝るか」

「お、お兄ちゃん！」

そう言っただけで抱きついてくるこよい、かわいい奴め。でも少し暑いや、まあそこは我慢するでしょう。

「嬉しいからお兄ちゃんの頭撫でてあげる。すぐ寝られるはずだよ」
こよいの細くきれいな手が俺の頭を優しく撫でる。

これはとても気持ち良いかも……すごいなこよい、すぐ寝てしまいうさだ。

そんなゴットハンドを持つ妹により俺は気持ちよく寝ることが出来た……。

次の朝こよいは俺より早く起き、パンを焼いて目玉焼きを作り俺を起こそうとした。

が、俺はそれより少し早く目が覚めた。

イスに座りパンにかじりつく。カリカリとした良い音が鳴った。

こよいの焼いた目玉焼きも食べ、カバンを手に取りそして玄関へ。

「明々後日は夏祭りだから覚えておけよ？」

ちなみに咲月さんと同行することになっている。

「うん、覚えてるよ。楽しみだったもん」

「ったく、良いよな。振り替え休日で」

俺も振り替え休日が欲しいわ……。

「こよいはお兄ちゃんが居ないとちっとも楽しくないよ」
嬉しい事言ってくれるじゃん。

「そつか、あれ？こよい、ちょっとほつぺた見せて、ははっこれ二
キビかも、薬塗ってあげる」

そう言ってカバンから薬を取り出す……フリをした。

「ホント？良かったー今日学校じゃなくて……って、え！？」

「じゃあな、行ってきます」

「い、行つて……らっしい」

有二が出て行き、ドアが止まった瞬間、こよいの腰は砕けた。

「お、お兄ちゃん……ほっぺにキスした」

それからしばらくこよいはぼーっとドアを見つめていた……。

25話（後書き）

「作者さん作者さん」

「ん？なにこよい」

「どうしてあたしがここに呼ばれてるわけ？ってか今週長くない？
3週間分

ありそう……」

「それはね、ただこういうのがやりたかっただけ、ちなみに長さは
気にするな」

「そ、そんな理由で俺もここへ来させられたのか？」

「まあまあ有二。いいじゃないか」

「お兄ちゃん大好きー！」

「うおっ！久々に飛びついてきやがったなこよい」

「えへへー久々に飛びついちゃった」

「あの、二人とも。俺の目の前でイチャつかないでもらえる？すごく嫉妬する」

「そっかー作者さんには15年間、いや今まで彼女できたこと無いんだっけ？」

「有二」……あまりそういう事実を言っな。俺が傷つく」

「え?!今までで彼女ゼロ!?!うそ!?!」

「こよいー!傷口を掘るんじゃない……もうコレ読んで。帰って良
いからさ」

こよいは作者が渡した紙に目を通した。

「えと、感想と評価をお待ちしております!お気に入りに入れてな
い方は是非入れてください!」

「はい、良く出来ました」

「あと彼女募集んぐ!」

「んなこと書いてないだろーこよい?有二、こよいを連れて帰って
あげてその鏡とそちらの世界が繋がってるから」

「なんという仕様……」

「では感想と評価をお待ちしております。柴わんこでした」

「あたしが読んだ意味無くない?」

「気にするなこよい」

26話（前書き）

えと、感想と評価を心待ちにしております。

そして25話を超えたという事で【第一回人気キャラ投票】を行おうと思います。

詳しくは活動報告（8/22）をご覧ください。では本編をどうぞ

26話

「綾乃ちゃん、どうしてこうなったんだろ……？」

「うーん、何でだろ？大変だったね」

少し前にさかのぼる。

善人は綾乃に呼ばれ、指定されたファミレスでコーヒーにチャレンジして待っていた。

「熱ッ！舌が痛いなこれー、よく皆飲めるよな……あっちち」

ふーふーしながら飲み進める善人。毎度毎度顔をしかめては苦い苦いと愚痴をこぼす。

ついでにコーヒーもこぼした。

「おうわっ！危ねえー！」

「賑やかだね、一人で何してるの？」

「ああ、まあコーヒーにチャレンジしようと思って……とりあえず座ったら？」

そう言われ綾乃は善人の向側に座った。

「コーヒーか、あたしはあんまり好きじゃないんだよねー」

それを聞き善人は何故かホツとした。親近感が沸いた、そんな感じだ。

「あははー俺もさ、飲んでみたところちょっとキツイかな。やつぱオレンジジュースで良いや」

オレンジジュースというところにピクツと反応する綾乃。

「オレンジって、善人かわいいところあるんだねー」

少しからかってみたりして。

「オ、オレンジジュースなめんなよ?!」

意外な一面が発覚した善人。恥ずかしくなり少しの間退場。

しばらくすると帰ってきた。その手にはオレンジジュースが。

「やっぱオレンジジュースかー」

手に持っているそれを見て綾乃はまたからかってみる。

「わ、悪かったな!でも俺ホントにオレンジジュース好きなんだよ」

「はいはい、怒らない怒らない。そういえばうちのお姉ちゃんコーヒー飲めるんだよね、信じられないよ」

「……そっぴや、弟と姉が居るんだったっけ?」

大好きなオレンジジュースを飲み、善人は少し機嫌が良くなっていた。

「うん、お姉ちゃんは大学生で弟は中学生」

「へえ、一回で良いから見てみたいな」

善人はそう呟いた。ただの好奇心というやつだ。

「うーん……じゃ行こうか」

しばらく考え込んだ綾乃は善人を自宅に招き入れることを決めたのだった。

「なんか弟君が凄い見てるんだけど……」

「ああ気にしないで良いよ善人」

ファミレスを出る直前に彼氏を自宅へ連れて行くというメールを綾乃は紗希に送った。

そのメールを紗希は早く連れてきてーと返信してきた。

紗希はジツと見ているのだが弟君こと巧に至ってはほぼ睨め付けている状態にある。

「はあ……お姉ちゃんも巧も見つめるだけじゃ善人が困っちゃうでしょう？」

「うーん、それもそだね。ごめんね善人君」

「ああ、いえいえいいんですよ美人に見つめられるのは男として嬉しいですからね」

あははと笑って見せる善人。その間に綾乃は巧を部屋から追い出していた。

「よし、邪魔な弟が消えたよー」

「ナイス綾乃」

「良かったの？追い出して」

気になってドアを見てみる善人、まあ別に異常は無い。ただ、なんでも入っちゃダメなの？という声が聞こえてくるだけだった。

ちなみにそこから紗希による怒涛の質問が善人を待ち受けていたんだとか……。

所変わって本日もスーパーで買い物をするこよい。だが、いつもと違って隣には美咲が居た。

「こよいー何か取ってきて欲しいものある？」

「うっん、美咲は何もしなくて良いよ。今日はこよいがおもてなしするんだから」

今日は夕食に美咲を招いていた。

普段のこよいならそんなことは絶対にしない、有二と二人っきりが良いはずだからだ。

しかしこの間の事があり、少し二人っきりが恥ずかしくなってしまうのだった。

美咲って何が好きなんだろ？まあ無難に豚のしょうが焼きでも作ってみようかなー？

それならお兄ちゃんも喜ぶでしょ。

「とりあえず豚肉だねー」

「確かあつちのほうにあつたよね」

二人でお話をしながら買い物を買わせていった。

お会計を済ませ店の外へ、寄り道もせずにつますぐ家へと帰る。

「明日だね、夏祭り。楽しみだよー衛君と一緒にいくんだよねー」
美咲っていつの間に衛君ゲットしたんだろ？あたしキューピッドするつもりだったのに。

「そうだねーあたしは咲月姉ちゃんとお兄ちゃんの3人で行く」
うん、3人で仲良くやれば楽しいはずだよ。

「咲月姉ちゃんって？」

こよいの口から聞こえたお姉ちゃんという言葉。姉なんて居たっけ？そう思い美咲は質問した。

「うん。近い未来のあたしの義理のお姉ちゃん」

「え?! あれ!?! お兄ちゃんはどうしたのよ!」

今までお兄ちゃんがお兄ちゃんがとベツタリだったこよいだけあって美咲はその返事に驚きを隠せない。

「うーん、咲月姉ちゃんに取られるんだったら別に良いんだよ、それ以外の人だとどっかここじゃないところに行っちゃうし」

「こよい……」

どこか寂しそうな顔をするこよいを見て美咲は掛ける声を見出せなかった。

「さ! そろそろ着くよー! こよいは腕によりをかけて作っちゃうからねー!」

「……………」

元気に接してくるこよいを見て美咲は何も言えなかった。元気な顔よりさつき見た寂しそうな顔を思い出してしまう……。そしてせめて悲しそうな顔を見せないようにと心に決めたのだった。

美咲はちょうどこよいの家の前辺りに二人の人物がいることに気づいた。

「こよい? 誰か来てるよ?」

そして美咲は家の前に2人のお客さんが居る事をこよいに伝えた。

確かに家の前には2人の客人が居た。

「すみませーん、誰か居ませんかー？」

女がチャイムを鳴らしてはそう言っていた。

それを見たこよいは居ても経っても居られなくなった。

「あの人……！一体何をしに来たって」

こよいは買い物袋を落とし、今にも走り出そうとしていた。でも、バレたらどうしようと思心で隅ではそう思っていた。

しかし、そんな感情よりもそれに勝る感情に流されていつてしまう。

こよいの様子なんか変じゃない？そう感じた美咲はこよいの腕を掴んだ。

「どうしたの……？買い物袋まで落として……変じゃない？おかしいよ」

「離して、美咲」

そう言われた美咲は思わずこよいを掴んだその手を離してしまった。そして歩き出すこよい。俯いたまま徐々に距離を縮めていく。

やっぱり止めたほうが……。明らかにただ事じゃないと薄々美咲は感じ始めていた。

しかし、こよいの背中を見て、美咲は止めるという行動には出られなかった。

ただこの状況を見守る事しか出来なかった。

こよいが徐々に距離を詰めていく、尚も続くインターフォンと呼びかけ。

もう少しでこよいが二人に接触するかというその時……それまで開かなかったドアが開いた。

「ごめんなさい、お風呂入ってて。で？ご用件は何ですか？」

「あら？あなたはどちら様でしょう？ここ平沢さんの家ですよね？」
確かめるように女が尋ねる。

「はい、ここは平沢家ですが……それが何か？」

「あ、あなたのお名前を聞いてもよろしいでしょうか？」
もしかして間違えた？そう思い、次に名前を尋ねる。

「え？名前ですか？あたしの名前は【平沢咲月】ですけど？」
中から出てきた彼女はそう名乗った。

26話（後書き）

「こんにちは」

「おー咲月ちゃんが来てくれたか」

「おお、この方が作者さん。小さくてかわ」

「それ以上言うな……」

「あははっ、そういえば人気投票が始まるって聞いたんだけどホント？」

「ん？あーホントだよ、予想では咲月さんとこよいで人気争いだね」

「えー？ホント？！」

「あ、あくまで予想だから……あ、でもさり気なく紗希さんも来るかなー？」

「ふーん、やっぱり男性陣は票取りにくいかー」

「まあ、この作品読んでいる人が一体どちらが多いのかさえ分からないんだし？」

「女性なのか男性なのか」

「まあ難しいってことね」さあさアレを渡してくださいな」

「ああ、アレ……はいこれ」

「感想、評価待ってまーす。あと人気投票もお願いします。メッセージボックスの方へ投票する形になっています。詳しい事は活動報告を読んでください」

「ありがと」

「それじゃ、バイバイ（撫で撫で）」

「くそ……身長が少し高いからってこんなことしやがって……ありがとうございました！（実は嬉しい）」

27話（前書き）

突然の更新です。いつもより短いですが読んでみてください。

感想や評価を待っています。どうかよろしく願います。

では気になる27話は からです。

27話

「え？平沢……咲月さん？」

「はい！平沢咲月です！」

なんだか嬉しそうにそう答える咲月。対して女は困ったような表情を浮かべ

「おかしいわ、ここ（この地区）で平沢といったらあの子達しかいなかったんじゃない」

そう呟いた。それを聞いた咲月は間を空けないよう

「誰かを探しているんですか？」

と、聞いた。

「え、ええ。平沢こいさんと平沢有二さんを探してしまして、聞いた話しによるとここだと聞いたものですから……」

「そうだったんですか、人探しは大変でしょうけど頑張ってくださいね？じゃ少し用があるのであたしはこれで」

咲月はやや強引に話を切り、家へと戻っていった。

でも、用があるのは本当だ。そろそろ聞こえてくるころだ有二のやめてー！いやあああ！というヘルプコールが。もう何があったかはご想像に任せておこう。

キーワードはお風呂、だ。

咲月が戻って置き去りにされた二人。一つため息をつく女はこう呟いた。

「……………はああの子が咲月さんね。結構やり手ですね……………あらあなた？どうかしたんですか？」

どこか違う場所を見ていた旦那にそう問いかける。

彼はこよいを見つけていた。こよいが自分の子供だという事も分かっていた。

そして彼はこよいの姿が妻に見えないよう体で遮り、妻の肩に手をやり

「いや、何でもない。さあ帰ろう、しのぶ」

そう言っつてその場を去っていった。

何故彼はこよいを見つけたのにそれを妻に伝えなかったのか。ましてやこよいが見つからないようにしていた。一体これはどういうことなのだろうか……？

彼は引き取りに來たのではなかったのだろうか……？

「こよい、大丈夫？」

「うん……」

何で？今、あたしが見えないように帰ったよね？明らかにあの距離からだから顔が割れちゃうし、でもまあしてくれなかったら今頃どうなつてたんだろ、あたしったらバカみたい。

「美咲、行こつか。今ちようど咲月姉ちゃん來てるみたいだし賑やかになるよ？」

「さつき出てきたのが咲月姉ちゃん？」

「うん、早く行こー咲月姉ちゃんとってもいい人だから。たまに何

考えてるか分からないときあるけど」

ただいまーと言うと咲月姉ちゃんがこよいちゃんおつかえりー！つてすぐに返事してくれた。

その後、^{あと}この子はこよいちゃんのお友達？つて聞いてきて、こよいは、こよいの親友だよー！つて答えて、美咲が初めましてと挨拶をしてから靴を脱いだ。今日は楽しくなりそう。

27話（後書き）

Q・何故短いのにあげようとした？ A・シリアスもどきと楽しい場面を混ぜたくなかった。別々に読んでもらおうと思った。

はい、そういうわけで柴わんこです。

今回の後書きはひよんなメッセージが送られてきたのでそれに答えますよー。

ええ、質問が来たんですよ。

というわけで質問はこれです。

Q・これってなんかのパクリ？

A・オリジナルです。パクっては無いです。ってかパクルんならもうと面白いでしょうに（笑）

こんな質問が来ちゃいましたよ。なんかキャラ名と性格が似てるって事でしたが思い当たる節が無いんですよ。ちよっと怖かったですよ。

まあ少し怖い思いをしたんですが今回の件があつたんでこの作品に対する質問募集してみようかと思っています。

質問のほうはメッセージボックスにでも放り込んでおいてください。咲月の靴箱と違って大量にあるわけじゃないから迅速に対応しますよ。

では感想と評価の方と人気投票に質問の方をよろしく願います。読んでくださっている読者様に感謝！ではまたいつか。

28話（前書き）

まさかの連日投稿です。何であげたんでしょうね。土曜の分無くなるって（笑）

感想を送ってください。あと評価を付けてない方は付けてください。正直にということが良いです。

では楽しい（？）本編は からです

28話

た、大変な目に遭った……。 (キーワードはお風呂) 咲月さん強引すぎだよ。何故かこういうときの力強いし。

……ん？誰か来てるのかな？賑やかだな。

「お客さんでも居る？」

「あっお兄ちゃん！たっだいまー！」

いつもの様にこよいが俺のお腹目掛けて飛んでくる。そんなことお構いなしに

辺りを見渡すと女の子が居た。……たしか善人の妹ちゃんだったかな？記憶が曖昧だけど。

「今日はね、美咲ちゃんが来てくれたんだよ？こよいが呼んだの」俺の背中に腕を回しそのまま顔を上げ、多少上目遣いでこよいはそう言った。

上目遣い得意だなーこよい、俺が他人だったら落ちてるよ。

俺には咲月さんって言う勿体無いくらいの彼女(嫁？)がいるから大丈夫なんだけど。

いや、嘘ですごめんなさい。妹にトキメク時あります、咲月さんゴメンナサイ。

……んでもってその咲月さんが人差し指を下唇に当ててジッとこちらを見つめている。

何だ？何なんだ？俺は知っている、ジッと見ているときは大体困らせるような事を考えている事を。この間は耳にふう、と風を送り込んできた。ホントにあれば勘弁して欲しい。

って美咲ちゃんが空気だ、イケないイケない。

「やっぱり善人の妹ちゃんだったか、俺の記憶力も捨てたもんじゃないな」

「あははーこんばんは、いつももバカでアホで救いようの無い大バカ野郎《お兄ちゃん》がお世話になってます」

ニコニコ顔でそう言われた。笑うしかないよなこれ。

つてか俺、こよいにこんな風に言われたらちよっと数日引きこもるかも。

「あははっ、凄いいわれようだな善人の奴」

そう言った後、こよいは晩御飯の準備するね、と台所へ向かう。

咲月さんも何か手伝う、と言い同じく台所へ。

美咲ちゃんもじゃああたしも、と言ったがこよいに止められた。

今日はおもてなしされるんだから何もせずに待ってて欲しいのと。

美咲ちゃんと高校の事や中学の事を話した。同じ中学だったから先生の話になるとどうも懐かしかった。中には結婚した先生も居てちよっと感動した。結婚というキーワードを聞いて咲月さんがなにやら言っていたけど……俺には関係ない。うん、まだ早いと思うんだ。

ちよっと急ピッチでおしゃべりしてたから会話の種が無くなってしまった。

もうちよい深いところまで掘るべきだったか？そんなことを考えて

いるとあのうわさが気になった。

「善人って彼女で来たってうわさがあるんだけど……」

「あれですか。ホントです、ナンパされたんだぜー？って自慢げに言ってきましたよ」

マジか、どんな子なんだろう？善人の彼女って。

それにしても以外だな、アイツをナンパするなんて。

そんなことを思っていたらあちらから質問が来た。

「咲月さんって有二さんの彼女さんなんですか？」

「ああ、えっとね」

「ううん、有ちゃんはおあたしの嫁！じゃなくてあたしの旦那さん！何を急いで言ってみただ、しかも嫁って。俺、女じゃねーか」

「は俺の嫁！」ってのを意識してないか？気のせいかな。いや気のせいじゃないな、うん。

「お嫁さんだったんですねー」

「おう、そう……なんだよ、あれ？大体ここじゃ『はあ！？嫁！？』って帰ってくるんだけど」

「ああ、いえ、うちのバカが魚みたいな目をして『姫川咲月は有二の嫁、平沢有二は咲月さんの嫁……』って帰ってきたときがあつて、まあ相当のショックを受けないとそうはならないんですけど、そういうわけであまり驚きませんでした」

ああ、そういうわけね、って善人は重症だったんだなああの時。懐かしいな、あれ以来咲月さんの靴箱は平和になったんだよね。いつもあふれてたみたいだけど、あれ一体どうやって入ってるんだろ？手で押さえながら閉めようとしても閉める寸前になれば落ちてしまう。今世紀最大の謎かも、……そりゃないか。

「お兄ちゃん出来たよー！お皿に盛ってあるから運ぶのだけ手伝ってー！」

「おう！分かった。じゃ、ちょっと行って来るね」

俺は席を立ち台所へ、そこに着くと豚の焼いたものがあつた。多分しょうが焼きか何かだな。

それにしても今日は野菜すげーなおい。見栄えが凄い、もしかして咲月さんがやった？

だとしたら凄いな、こんな奥さんもらえるなんて嬉しいにも程がある。

少し感動しながらテーブルの方にお皿を運ぶ、美咲ちゃんもそれを見た瞬間、おお……！と

小さく感激していた。ちなみに俺が運んでいる間にこよいはほぼ全ての片付けをしていた。

もう後は食べ終わった食器を洗うだけ。そしてこよいはこちらへ来た、俺は適当に座つた。

何処でも良いんだから、座つた瞬間。そう瞬間、隣に咲月さんが漫画でシュツ、とでも音が付け加えられそうな速度で俺の隣に座つた。仕方なくあははと笑っている間にこよいは美咲ちゃんの隣に座つた。テーブルは正方形をグツと横に引き伸ばしたような長方形型のテーブルだ。

ちなみにそれなりに縦の長さもある程だ。

俺は美咲ちゃんの向かい側に座っていた。そこまで適当というわけでもなかったかな？

んで隣に咲月さん、その向かい側にこよいが位置を陣取り、3人で

手を合わせる

それを見て美咲ちゃんも合掌し首で、せーのとタイミングを取り

「いただき」

「「「あつ水！」「」」

「いただきますちゃうんかい！」

と忘れていた水の存在を思い出す。美咲ちゃん、いいツツコミだ。
ほら咲月さんがグッジョブと親指を立てている。

水から一番近かった咲月さんがそれを取り出し、俺とこよいが2つ
ずつコップを持ってきた。

「騙された！まんまと引つかかったー悔しいなあこれ」

「あははっおっかしー！引つかかった引つかかった！」

こよいがとても楽しそうに笑い始める。ついこの間涙を流していた
とは思えないほどこよいは笑っていた。

「いやさ、実はあたしもこの二人に初めて夕食に招かれたとき引つ
掛けられたんだよ？」

そう、咲月さんも引つかかった。あの時は俺が笑いすぎて後で恥ず
かしいセリフを言わされた。

それから罨に引つ掛けてごめんねと誤ってから楽しく夕食を楽しん
だ。

さあ、明日は祭りだ、もっと楽しくなるに違いない……浴衣の咲月
さん、いいわぁー楽しみじゃん？

夕食も食べ終えた俺たちは解散という事で玄関に集合。まあ解散っ

ても人数半分になるだけなんだけど。

「今日は誘っていただきありがとうございました。出来ればまたこうしてお呼ばれになりたいです」
うわぁ、礼儀正しいな美咲ちゃん。兄^{善人}ががんばれよ、お前の妹すげえぞ。

「じゃあねーまたね」

「え…… 咲月さん？」

え？ 咲月さんは見送られる側であってじゃあねを美咲ちゃんに言うのは状況からしておかしい。

「ん？ どうしたの有ちゃん」

どうしたも何もおかしいでしょ咲月さん。

「いや、帰らないの？ 自宅に」

まだ残るつもり？ 結構夜遅いからもう帰ったほうが良いと思うんだけど。

そう質問した俺に対してとんでもない返答が帰ってきた。

「うん、帰らないの。ここに居るの、ってか家売っちゃった」

えへっと笑って見せる咲月さん。結構凄い事言っちゃってますけど……。

こうしてまさかの同居生活が始まった……。

28話（後書き）

是非とも、評価を付けてください、感想を送ってください。
ではまた今度……。

29話（前書き）

今回でこの話はラストです。ここまで読んでくださった方、どうもありがとうございました。評価をされていない方は評価をしてから去ることを願います。

29話

「有ちゃん早くー!」

そう言われ俺は急いで靴を履き、ドアを開ける。

後ろからサンダルを履く咲月さんとこよいが続く。

二人とも浴衣を着ている、今日は夏祭りの日だ。

咲月さんは黒をベースとした紫の花を散りばめた感じの浴衣でこよいは白をベースとした水の流れを感じさせるような青が彩られている感じだ。

これはレンタルしたもので、選んだのは咲月さん。
近所のデパートで入手したらしい。

「じゃ、出発しようか」

「うん!」

こうして夏祭りは始まりを告げた。

賑わう会場、漂う匂い、声を張り上げてお客を呼ぶ店員さん。

これぞ祭りって感じに盛り上がっている参加者を横目に俺たちはひたすら歩く。

こよいが前で俺と咲月さんは後ろ。こよいの行きたいところに一緒に行くということにしている。ちなみに俺の左手は密かに咲月さんの右手を握っている。

正直こよいに見られたらどうしようどドキドキしている。

射的してみようよ！とこよいが言った。俺はやってみるかーと言ってお金を払って銃口にコルクを詰めて狙いを定める。こよいが狙っているのは熊のぬいぐるみ。正直ビクともしなさそうだ。

なので撃った後に撃って熊に2連撃を与える予定。後ろでは咲月さんががんばれーとはしゃいでいる。はしゃぐ咲月さんは中々見られない、そしてはしゃぐ姿が目に残りあのかわいい子誰？と口々に呟いているのが俺の耳まで聞こえてきた。

パン！とこよいが撃つ、俺もすかさずパン！と撃つてみる。結果は残念だった。

ああー後もう一回か。まあもう一回同じようにやってみるか。そう思っているときだった。

「ねえ、お願い。あの熊さん取るの手伝ってくれない？」

咲月さんだった。近場にいる男複数にそう言っていた。

それを言われた男たちは手伝わせてください！とそれぞれに銃を持つ。

そしてこよいがパン！続けて俺、それから男達が順番に撃った。なんということでしょう。熊さんノックダウン！そしてそれを受け取るこよい。

こよいは嬉しそうにこちらに熊さんを見せてくる。俺は銃を置き、よかったなこよい、と一言。

役目を終えた男たちは特別欲しいものはないし、でも後一発あるし……でも結局商品はいらないからと横で座っていたおじさんの輝く

頭部へと発砲。するとあらまノックダウン、良かったね、大物じゃないか。

やれやれ一通り回り終えてしまった。熊を手に入れて急に目的が無くなったのかこよいはもう疲れ果てていた。

カキ氷を食べつつ花火の時間まで待つ。

俺とこよいはメロンで咲月さんはイチゴだった。

「有ちゃんはいあーん、これ食べ比べだから勘違いしないでよ?」

「分かってるって……イチゴも美味しい」

にしてもイチゴって買にくいんだよな。そこの所女子って得していると思う。

……ん。口を開けてスタンバイしてる……やれと言う事が。

「ほら、俺のも食べてみな」

「ん……メロンいい感じだね、あたしメロン食べた事なかったかなー」

そうなんだ。ああ、例の如くこよいがじーっと見ている、残念だったな、こよい。

「お兄ちゃん、こよいともやろうよ、食べ比べ」

「こよいと俺同じじゃん、お兄ちゃんと一緒にいいって言ったのはこよいだぞ?」

うつ、と悔しがるこよい。熊さんの手を操りパンチを繰り出してくる。

「こよいちゃんちよつと失敗だったね」

咲月さんがそう励ましていた。

所々に設置してあるスピーカーからお知らせが入る。

『ええー只今から打ち上げ花火を行いますので上空に注目ください尚、只今射的の方ですが事情がありまして一時的に営業しておりませんのでご了承ください』

ああ、おじさん……。

「ねえ有ちゃん、ちよつと良い？」

咲月さんがそう言うてきた。何？と返すと咲月さんは立ち上がって俺の手を引っ張る。

「こよい、少し咲月さんと話があるからそこで待ってるよ。後で膝枕してやるから」

「おおお！膝枕〜！うん！ここで待ってる」

咲月さんに連れ出された俺は質問する。

「どうしたの？」

それに対して咲月さんは重要な話がある、と返事をした。何だろ？と思っていると咲月さんは口元を俺の耳に近づけこつ言った。

「あのさ、あたしと結婚してくれる？」

そう言つと咲月さんは口元を耳から離れた。そして恥ずかしそうに下を向いた。

やっぱり恥ずかしがる事あるんだね、可愛いかも。

そして俺は返事をした。

「……う、うん！改めてこれからもよろしくね有ちゃん！」

「当たり前だ、ってか昔っから結婚する事になってたんじゃなかったっけ？」

「えへへ、まあね……っ！」

咲月さんは言葉を失った。俺は咲月さんを抱きしめた、何故だか分からないが抱きしめたくなった。

「ゆ、有ちゃん……」

「ったく、先にプロポーズする奴がいるかよ」

「ごめんね。へへっ、有ちゃんが他の女に取られたくないからさ……」

……」

抱きしめ寄せ合う二人の体を優しく照らす光は夜空を彩り儚く散っていった。

29話（後書き）

第一部終わり。

第2部はいつになるか分かりません長期にわたって連載を休止すると思います。

次の作品が来週から投稿するつもりなのでそちらへ移って頂けるとうれしいです。

まあこれを越す作品は当分書けないでしょうが……。

ご愛読ありがとうございます。またこの作品で会えることを願っています。

それまで当分の間次の作品で会いましょうということで失礼します。

30話（前書き）

はぁー、長い休みを取りましたね。

鈍っしょうがない。どんな世界観だったか勘が戻らない。
それでも頑張るんで見捨てないでください。

では少し成長した彼らのストーリーは本編からです。

30話

「有ちゃん起きて、朝だよ」

そう言われ、俺は目が覚めた。俺を起こすのは長くきれいでくせない黒髪の少女だった。

……まあ咲月さんなんだけど。そう、咲月さんが直接俺にモーニングコールをしてくれた。

隣では、んんっ……とこよいが寝返りをうっていた。

ひそひそと咲月さんは朝ごはん出来たから食べて、と囁いた。

階段を降り、テーブルに着く。良い匂いがする、味噌汁かな？

まだボーっとする頭を冷水を飲みながら覚ましていく。

「はいどうぞ、ごはんに目玉焼きに味噌汁の三つだよ」

「あ、ありがと……は、箸が無いんですけどどこにあるんだっけ？」

「はいあーん」

うん。久々に恥ずかしい事になったよ、途中まで最高だったんだけどなあ。

でもまあこれが俺の嫁です。この間決まりました。

こよいの事ですが、とりあえず一緒に住むことに話はまとまりました。

咲月さんのお金はとてつもなく大きかった。家売っちゃっただけはあるわ。

ホントやる事たまに凄いよね。

今俺は高校2年でこよいが高校1年。咲月さんと楽しく生活を送っている。

んでもって新しい後輩が入ってきたりして今ようやく落ち着いてきたところだ。

あ、こよいが起きて来た。

「おはようこよい」

「あーおはようお兄ちゃん……お姉ちゃんもう作ったのか、ふあゝあ」

そうそう、こよいはこの一年で咲月さんの事を咲月姉ちゃんと呼んだりお姉ちゃんと呼んだりって呼び方のレパートリーが増えた。

「こよいちゃんもはいこれ」

「ありがとう」

ここで一つ今の現状を伝えておこうかと思う。

まず卒業式と入学式があったので俺の周りの人が変わった。

まず善人、あいつはこの一年で大きく変わった。

彼女だった綾乃さんが県外の大学へ行ってしまった。

彼女から別れようか、と言われ善人はショックを受け数日不登校になった。

彼女なりの愛だったのかな？俺はそう考えている。

そして善人はようやく登校してきたと思ったら大きくイメチェンをして来やがった。

ム力つくほどかつこよくなりやがった。髪型変えるだけでこんなに変わるかよ……でもこの変化を簡単に言うとはタレからイケメンって所なんだよね。

でも、中身が変わらなかったからこいつは残念なイケメンとなってしまったのだった……。

んでその妹の美咲ちゃんとは俺たちとは違う高校へ進学、少し良いところへ行ったらしい。

そのため詳細は不明。

ちなみに詩織ちゃんも同じ高校に行ったらしい。

他は……よく分からない。白川の3人については情報不足。綾乃さんが県外に行った事以外まったく分からない。

次にこよい。こよいは親友と離れ、少し寂しそうだった。しかし、時間がそれを解決していった。

高校入りたては今まで仲が良かったやつが居たり居なかったり正直不安ばかりだろう。

でもなんとかこよいは乗り切ったようで、安心した。

最後に咲月さん。咲月さんは家売って大金を手に入れた。そして夏祭りの夜、咲月さんは俺にプロポーズをした。

俺の答えはYES、俺がその日から俺と咲月さんは結婚を約束した。仲となりそれから咲月さんは俺の嫁となった。まさかあつちからプロポーズされるとは思わなかった。

入学式後、咲月さんは先輩からモテモテで、毎日のように告白を受けていたりどこかに呼び出されている。毎度の如く、あたし婚約者いるからという言葉を残してその場を去るらしい。

そしてフラれた生徒は『姫川親衛隊』という怪しげなグループに勧誘され入隊するらしく、その後毎度の如くイベントには現れ咲月さんの言うとおりに動くといういわゆる【奴隷】となってしまう。ちなみにリレーで咲月さんと競っている者あらば3秒後にはダイナミックに転んでいる。ちなみに俺は標的にはならないらしい。ありがたいことだ、ちなみに理由は【そんなことしたら姫に殺される】との事。ここで言う姫とは咲月さんの事、そう姫川の姫だ。

さてもうこれ以上言う事はないだろう。あ、俺の紹介がまだだったな。

サクサク説明しようか、あれから俺は変わったかといわれるとそうでもない。あの頃の俺と一緒に。大きく違うのは嫁がいる事くらいだな、うん。あ！そうそう！身長伸びたんだよ！少しだけ……。

それにしても……2年生になったというのに1年の頃となんら変わりが無いとはどういうことだよ。

30話（後書き）

調子が戻らない柴わんこです。どんな感じで書いてたんだっけ？って別ブラウザでコレを読みながら「あーなるほど」とか呟きつつ書き溜めていきました。

とはいっても溜めたというには少ないですがねー（笑）

ではまた近いうちに。出来れば来週に。

感想、評価ワクワクしながら待っています。それでは失礼します。

31話（前書き）

だんだん長期連載になってきましたね。初めはどうなる事やらと思
っていましたねー。いや、元々この話はこよいが主人公で兄の有二
が受けのラブコメでそこに咲月という第3者が割り込んできて……
って設定だったんですよ。

秘話としてここに記しますね。では続きを……。

31話

「起きてお兄ちゃん、朝だよ？遅刻するよ？……でもこよい的にはこのままずっと隣で寝てたいんだけどなあ……」

「……そんなこと俺が許さない、ちゃんと学校は行っておけ」

「ちえーケチ、お兄ちゃん大好き」

「……………」

まだボーっとしている頭をどうにか覚まさせようと洗面所に行き水を流し顔を洗う。

「はつくしょん！」

ちよっとやり過ぎたか……。冷たい冷たい、そう思っているところよ
いが横からタオルを差し出してくれた。

ありがと、とそれを受け取るとこよいはえへへ、と微笑んだ。

「朝食出来てるから早く姉ちゃんそこ行つてね、こよいは学校の支度をしてくるから」

りょーかい、と顔を拭きながら答え、タオルをかごに投げ入れた俺は今言われたとおり、テーブルに足を運ぶ、味噌汁のいい匂いがす

る。具は何だろ？豆腐とか？ワカメとか、大根なんか好きだな！

色々な予想をしつつ俺はテーブルに座った。そしてまあまあ気になつていた具を覗き込んでみる。

「おおー流石咲月さん、俺の好きなもの分かってるだけあるわ」

そう彼女に言った。

すると彼女は

「だって有ちゃんのお嫁さんだもん、コレくらい当たり前だよ」

と、お玉片手に最近大きくなったらしいその胸を張ってそう答えた。

咲月さんもエプロンを外し、いつもの場所に仕舞うとこちらへ戻ってきて座っている俺の頭をポンと叩いて隣に座った。

「こよいちゃんまだかな？」

「学校の支度だつてさ、つたく高校1年にもなつて朝用意するかよ」

「まあまあそんなこと言わずにさあ、おとなしく待っていていようよ」

そう言うとき咲月さんは俺の肩に頭を預け、疲れたよと呟いた。

3人分作るのは大変だろう、そしてその分早く起きないといけないから更に大変だろうな。

しかも弁当も3人分作ってる訳だし。

いつもごくろうさんと寄りかかる頭をやさしく撫でてやると、咲月

さんはうん、いいんだよ。あたしが選んだ道なんだし。と目を瞑って小さく答えた。

少しだけでも静かで心地の良い時間を感じた2人はどうせならこのまま時間が止まってくれたらどんなに嬉しいかとそう思っていた。

しかし良い時間というものはずぐに終わってしまう。ダッダッダッダッと階段をおりるこよいの足音で咲月はその目を開いた。

「はあ、起きなきゃだねー……」

「妻は大変だ、頑張って咲月さん」

「うん、頑張るよ……だから、さ……キ、キス」

「こらー！その2人！こよいの前でイチャイチャしない！ジェラシー感じちゃうっ！」

「うるさいやつだなあ」

「お兄ちゃんがいけないんだもん！……こよいというものがないからお兄ちゃんは」

「いただきます」

「ふふっ、あたしもいただきますーす」

「無視するなー！もう……いただきます」

この1年で少しこよいに対する態度が変わったような気がする。多分、咲月さんを意識しているからだと思う。

まあ、早いところ兄離れをしてもらい所なんだけど……。

午前中のだるい授業が終わった。それにしても鬱だ、午後も授業があるなんて……。

「有ちゃーん！弁当食べよう！」

朝とは違ってすっかり回復した咲月さん。そんな咲月さんを見るとこっちまで元気になってしまふ、不思議なものだ。

「いつも弁当ありがとな、じゃ……」

2人で手を合わせて。

「「いただきます」」

敷き詰められたレタスの上に卵焼きやたこさんウィンナー、そしてハンバーグにサラダがついてお値段プライスレスな俺にとって世界一の弁当を食べ進めていく。

「あーんする？」

「え、しないよ」

「そっかーじゃあ、あーんしようか」

「日本語通じてる？……ングッ」

ハンバーグを口に入れられた俺は嬉し恥ずかしながらよく噛んで飲み込む。

「おいしい？」

首を少し傾げて咲月さんが質問する。

「うん、おいしい。流石俺の嫁ーははっ……あ」
それを言った瞬間、この空間に存在する男の嫉妬のオーラがその空間を包み込むのが分かった。ような気がした。ちょっと調子に乗ったかな……？

そんな緊迫している空気の中、咲月さんはそれをもろともせず、次のおかずをスタンバイさせている。俺はそれを見て、あははあ、とどうしたものかなあと困っていた。
そんな時、一人の男が堂々とこちらへ近づき俺に声を掛けてきた。
この空気の中なのに、だ。

「おーい有二、いい所邪魔して悪いけど宿題写させてくれねえか？
300円やるから」
俺がその声に振り向いてみると善人が俺に手を合わせていた。

宿題写させる代わりに300円か、即決価格だな。

「おう、いいぞ。しかし前払いな、こういうところちゃんと取り立てるからな」

「あいあい、ほら300円。金はたくさんあるからな、助かるぜ」

100円玉を確かに3つ貰い受けると俺は机からノートを取り出した。そのノートには

宿題となった問題とそれに対しての俺の回答が書き綴られている。それを渡すとあざあーすとひとこと言っつて自分の席へと善人は帰って行った。

綾乃さんが大学へ行ってしまったときは分かりやすく落ち込んでいた。

ちなみにコイツは綾乃さんとたくさんデートをするためにがんばってバイトをしていた。

さっき言っていた、金はたくさんあるからな。というのはそれで手に入れた給料の事だろう。

用を済ますと食べていない弁当を食べてしまおうと箸を片手に弁当箱をもう片手に持ち咲月さんのほうを向く……すると待っていましたといわんばかりの笑顔で、あーんが待っていた。

31話（後書き）

調子が戻ってきたあ！こんなカンジでしたよね、いつもいつも。

それではこの調子を保ちつつ連載していこうと思います。

毎回毎回、ほとんど進展も無い日常を繰り返す彼らですがどうか温かく見守ってやってください。

感想、評価、受け付けています。それではこの辺で失礼します。

32話（前書き）

えと、次回から【咲月過去編】やります。今思いつきました（笑）
主人公はもちろん咲月です。

咲月がまだこの地へ引越してくる前、咲月の過去に何があったのか。

咲月がこの地へ引越してきた理由が明らかに……。

今思いついたのでどんなラストになるんでしょうか。

笑い事じゃないのに笑えてきちゃいますね。参った参った。

ではいつもの本編をどうぞ。

32話

夕方のまだ明るい時間に、2人で手を繋ぎ帰っていたある日の帰り道に、俺はその瞬間を見た。

2人の男女が曲がり角のあたりで何かをしているのを見た。やけに見覚えがあるあのシルエットは……まさか？いや、そんな……
…あ、そのまさかだ。

「こよいちゃん、あのさ。もし良かったら俺と」

「ごめんなさいっ!」

「即答!？」

女が告白を受け、男が速攻でフラれた。少し声がこちらまで届いており、少し吹き出してしまった。しかし、聞き捨てならぬ名前、そしてシルエット。そしてなによりこの声。

頭の中でヒントが重なり合い、やがてひとつの答えが出てきた。あの2人だな。俺は確信した。

おそらく女のほうはこよいだ、なんかそう思っているところこよいに見えなくなってきた。……こちらから見た限り、愛の告白を受けていたのだろう。そして、速攻で断ったと。なぜ断ったかは……はあ。

それにしても仕方ないよな、告白を受けていても。俺は驚かないぞ、こよいかわいいもん、世界で一番かわいい妹だし。誰がなんと言おうとこよいは世界で一番かわいい妹だ。

そんな妹に誰かが告白するのはとても良い事だ、出来れば引き取って欲しいくらいだ。

でもなーブラコンなんだよあ、すまないな。とは言わないぞ……………

…【善人】よ。

お前以外の男なら俺は許す。でもお前となると俺は許さない。綾乃さんの気持ちも知らないでこいつは……………！

「こら善人！あたしのこよいちゃんに何したのー？…………あたしのこよいちゃんに何したの？」

何したの？と怪しむかのように、咲月さんは善人に近づいていった。ちなみに尚もその手は繋いだままだった。

一方、善人の隣にいるこよいは俺を見つけてご機嫌になった。

よっ、こよい。今帰りか？そう聞くとこよいはうん、今帰宅途中。と答えた。

「でね、美咲のお兄ちゃんから告白受けちゃった〜！もちろん断ったけどっ！」

天使のスマイルでそう言いかけて来た。相手からするとどんなに辛いことか……………。

俺はそっか、と言いながらこよいの頭を撫でてやった。わしゃわしゃと撫でるとえへへーとこよいは頬を赤く染めた。

しかし、それはそれはとてもいい選択をしたな、こよい。善人なん

かと付き合ってたら俺が承知しない。

でもな少し気になることがあるんだ。

……そもそも、お前の脳内の選択肢には、『ごめんなさいの』一択しか用意されてないんじゃないか？

【強制的にごめんなさいが出てくるってわけじゃないよな？】RP
Gじゃプレイヤーがびっくりだぜ？
無限ループよりタチが悪いもんな。

帰りに俺を見つけたことがそんなに嬉しかったのかというほどこよいはニコニコしていた。

そして頬を赤くして腕にまで抱きついてきて、じいーっとこちらを見ては微笑みかけてきた。

正直なところ、俺を見ずに前を見て欲しかった。ゴツンと電柱ぶつかってたし……。しかもそのあと鼻から血を流しながらでもこっちを見て、それでもえへへと微笑む始末。新手のホラーですか。

一方咲月さんは善人に帰るように、いや、帰れと説得。

そして善人は無理だったかーとか愚痴りながらも自宅へ帰っていった。

それから少し不機嫌な咲月さんがこちらへ来て

「ったく、こいちゃんはあたしの嫁なんだから……」

と、凄いことを言った。しかし、この『あたしの嫁』発言は既に聞き慣れた気がしないでもない。

オレンジ色に照らされる坂をよいしょよいしょで登っていく。

そのよいしょが聞こえてしまったのか、老けたねー。と咲月さんに笑われてしまった。それでもまだ16歳……のはずだ。

そんな時だった。

「有ちゃん、あたし最近思うことがあるんだよね」

急に咲月さんが話してきた。こいもいつのまにか咲月さんに耳を傾けている。

ん？何？と聞き出すかのように問い出してみた、すると

「もし、去年さ、有ちゃんが親御さんと一緒に暮らすことになったとしたらあたしどうしてたかな？って。ほら、家だって売っちゃったわけだし？」

なぜか昨日の事みたいに覚えているあの一件についての話が出てき

た。

「ホント、咲月さんと離れたくない一心だったなあ……」

この話、笑い話……なのだがちょっと、もしも、i fのことを考えると咲月さん相当のピンチだったことが分かり始めたりして少し胸が苦しくなる事がある。

「ホント、有ちゃんが遠くに行かなくて良かった」

そう言うとき咲月さんは隣にいる俺のほっぺにキスをした。

俺は当然のごとく、かあああつと顔が赤くなった。不意打ちどころじゃない、これヤバイ。

さらに俺の隣では姉ちゃんにやってるの?!とこよいがビクビクしていた。

そして、こよいだって!と呟き始めて俺はこよいの頭を掴み、ホルドした。ううううう、とこよいが唸っている、でも前を見て歩いてもらわないとな、こっちが困っちゃうからな。ったく、電柱が怖いっての。

坂を登りきり、はぁーとため息を付いた俺を横目にへへへと笑った咲月さんは思い出を振り返るかのようになんと言った。

「ちょっと……あたしの昔話でもしようか」

32話（後書き）

ああー何というか。前書きであんなこと言っただけにたたいまものすごく反省しております（笑）でもがんばります！なのでこの作品を見捨てないでやってください。では、来週をお楽しみに。

33話（前書き）

過去編突入です、3回にわたって完結させます。ちなみに土曜（今回）、火曜、金曜の3つで終わらせます。なぜこんなに急ぐのかというと、先が気にならないからです。また来週って言って、同じ内容の続きを見せられても新鮮さは落ちるし、ましてや内容が酷いと更にマイナス効果だからです。

だから一気に出します。初めて闘う事になる短編ですがどうかよろしくおねがいします。出来れば『必ず』感想が欲しいです。いつもとは違う事をするので余計に面白かったか、ダメではないかが気になっています。どうかよろしく願います。

33話

「咲月、今度の日曜映画でも見に行くか？」

お父さんがあたしに新聞を読みながらそう言って来た。

「ホント？なに見に行くの？」

「何でもいいぞ。今回は咲月の卒業記念だ、あでも女の子向けの劇場版アニメは」

「ふふ、そういうのもあたしは卒業したから大丈夫だよ」

あたしは久しぶりのお出かけにワクワクしていた。

映画なんてとても久しぶり、去年の……確か中学2年になった頃以来だと思う。

進級おめでとーってお母さんとお父さんが祝ってくれた際に映画を見ようってなった気がする。

だからほんとに久しぶり。ちょうどテレビで宣伝してある感動モノの映画が気になるからそれを見ようかな。多分見たいって言うたら見ようって言うってくれるはず。お父さんってあたしの言うことはあまり反対しないから……それもやっぱりあたしの学校生活の事を知っているからなのかな。

「おい、姫川。ここの掃除やつとけ、俺ちよつと用事あるから」

「うん、分かった。やっておくね」

あたしはよく押し付けられ役になっていた。

だからこうやって掃除をあたし一人にやらせることもたくさんあった。

それに授業終わりの黒板消しなんかホントは日直の仕事なのにほとんどあたしがやっていた（やらされていた）

そんなある日だった。

「姫川、少し話があるから職員室に来てくれ、少し先生と話をしよう」

担任の先生から呼び出しを受けてあたしは昼休みに職員室に入った。

職員室はいつもコーヒの匂いがする、あたしはこの匂いは好きだけどここに来るほかの生徒はコーヒ臭いと言っているのを耳にしたことがある。

でも最初はあたしも臭いと思っていた、でも慣れた、しかも嫌な臭いを良い匂いと感じるほどに。

それからあたしは先生の席まで行って先生、来ました。と告げた。

「おお、来たか。早速なんだが姫川、お前いじめに受けているとかあるか？」

そのときあたしはびつくりした。先生に気づかれたのかと心配した。なぜ心配するのか。先生に助けてもらえるのではないか。そうじゃない。

もし、先生が注意したとすればあたしが先生に告げた、とそこからまたからかわれてしまう。

だからあたしは心配した。またいじめられるかもしれない。そう思うと昔傷付けられた背中の患部が疼く。あたしの背中には小さな縫い跡が残っている。至近距離だとすぐにばれる程度の跡。

そのケガはあたしを押し倒してその際にガラスが衝撃に耐えられず割れ、そしてあたしの背中に突き刺さり押し倒され更に深く突き刺さった時に付いたもので、跡が残ったと知るとショックだった、でもそれより先週まで仲が良かった友達になんでこんなことをされるの、というほうがあたしにとって大きなショックだった。

34話

先生に呼ばれ、問い詰められ。それでもあたしはそんなことないですってばーと笑顔を作り続けた。すると先生はそうか、なら良いんだ。どうやら俺の勘違いだったみたいだ、悪かったな貴重な昼休みを潰してしまつて。と、あたしに言った。

「いいえ、良いんですよ」先生だつて人の子なんだから間違いだつてすることもあるけど勘違いだつてすることもあり得ない話じゃないんですから」

とあたしは返した。

でも勘違いじゃないんですよ。ごめんなさい、嘘ついて。同時にそうあたしは先生に心の中で謝った。

それに、呼ばれて良かったのかもしれない、だつてあたしの居場所なんて無いんだから。

教室に帰つても誰もあたしの相手なんてしてくれない。だからあたしはいつも本を読んでいた。

恋愛モノの小説が好きでよくその類の本を読んでいた。

そこには様々なシチュエーションがあつて、いつかこんなことしてみたいとも思っていた。

「ねえ、咲月。あんた先生に何言われてたの？」

少し棘のある口調で彼女は言ってきた。彼女の名前は沙耶^{さや}、あたしを目の敵にしてみんなを味方にして攻撃してくる主犯者。だからあたしはコイツが大嫌い。カッターナイフでもあればすぐにその顔を傷付けてやるのに。でもそんなことしたら先生に呼ばれてあたしの両親に迷惑を掛けてしまう。だからあたしは何もしない。何も出来ない、ただただやられるだけ。

「なに言われてって、あたし宿題やってなかったからちゃんと出せよ？って」

「ふーん、そうなんだ。じゃ別にいいか」

そう言つと沙耶は自分が中心のグループの輪に戻っていった。願わくばあたしに近寄ってきて欲しくない。

小説を読んでいると掃除の開始のチャイムが鳴り、それぞれ愚痴りながらも掃除場所へと急ぐ。

あたしも彗を挟んで掃除場所へと向かった。でもそこにはあたし以外誰もいなかった。

事の始まりはあたしが2年生になってしばらくのことだった。

あたしが友達とこの間見に行ってきた映画の話をしているとあたしたちの教室に3年の男子が入ってきた。

ちなみにこのとき話していた友達っていうのは紛れも無く沙耶のこと。

その沙耶に用があつたらしく男子が沙耶に声を掛け、そして告げる。

「沙耶ちゃん、ごめん。俺他に好きな子が出来たんだ」

「え？」

沙耶はしばらく固まり、そしてようやく口を開く。

「その人って誰？」

その声はとても力弱く、まるで生気を抜かれているかのようにだった。

その問いに対して男子はそれは秘密、とだけ言った。でもあたしは気づいてしまった。

そのとき彼があたしを見てニヤニヤしていることに。

好きな人を見ると嬉しくなって頬が緩むっていうことはよくある。だってこの間まで沙耶がそうだったから。そして好きな人が出来た。あたしを見て頬が緩んだ。この二つから推測されることはとても簡

単なことだった。彼はあたしに惚れてしまった、ただそれだけのこと。

あたしはそれに気づいてからこの人とは距離を置こうと思っていた。でも強引にあたしはこの人に呼び出され、告白された。

「姫川咲月ちゃんだったよね、あのさ。もし良かったらなんだけど」

「ごめんなさい、そういう話ならお断りさせていただきます。だって親友の彼氏だし、気が引けます」

そういつて丁寧な告白を断らせてもらうつもりだった。でも

「はあ？そんなの関係ないね、なにそれ女の友情？そんなつまらないものにしがみ付かないで俺と付き合ってくださいよ、ね？」

彼はそう言ってきた。でもあたしは断り続けた。

「あたしは付き合えません、だから諦めてください」

そう言つて何度も断つていたときだった。

「ふーん、じゃその大切な沙耶ちゃんに怪我させちゃおうかなーあいつ俺に惚れてるし、多少傷付けても何にも言わないだろ」

「そんな……止めてくださいっ！そんなの酷い」

「……やっぱそういうのは良くないよな、じゃあそれを止める代わりに付き合ってくれよ、それなら文句無いだろ？友情だもんな」

「え……？」

結局、彼に乘せられてあたしは彼の彼女になった……。

その翌日から『浮気泥棒』として沙耶はあたしを目の敵にし始めた。

「あら、ごめんなさい姫川さん。わざとじゃないんだよね？」

あからさまに肩をぶつけてきた沙耶はあえてわざとらしく言ってきた。

そのことに對し、感じ悪いよ。と沙耶はクラスのみんなに言われた、でもその度に
ふーん、あんたもいじめてほしいのね。分かった。と言い、皆を怖がらせていった。

しかも沙耶が彼氏と別れたなんて事はあたしと本人以外誰も知らず、沙耶に脅されるたびに

『沙耶には3年の彼氏がいるからたてつかないほうが良い』と陰で注意する生徒もいた。

そして皆それが怖くて沙耶の言うことに齒向かうことなんてしなかった。

おかげであたしはいつの間にか一人ぼっちになってしまった。

34話（後書き）

次回、完結です。

35話（前書き）

これで終わりです。始まりにも書きましたが出来れば『必ず』コメントをください。自分じゃアリなのかナシなのかすら判断できませんし、実際、これが面白いのかどうかという事についても分かりません。なので感想をよろしく願いますといつにも増して真剣な僕が画面越しに頭を下げます。

35話

「咲月先輩、先輩ってもしかしていじめられてるんですか？」

ある日あたしはひとつ年下で後輩の男の子にそう質問された。

あたしはこの子とは出会えば挨拶を交わす程度だった。

でもそんな子がいつそんな情報を手に入れたんだろう。あたしはそれが気になった。

でもここで、はいそうです。と言えば彼は何をするんだろうか。あたしを助けるのだろうか。

それともあたしの相談に乗るのだろうか。でも、そんなことしたら彼の居場所も無くなるかもしれない。馬鹿馬鹿しいけどいじめはふとした拍子に始まる。ここで彼に対して沙耶があいつのことは無視しなさい、いいわね？とも言えばそれはひとつの火となりその日が徐々に広がり彼を苦しめていく。だからあたしはその火を決して灯させないよう嘘をついた。

「んー？何であたしがいじめられなきゃならないの？巧たくみは心配性だねえ」

そうあたしが笑いながら言うと驚くことに彼は急に怒り出した。

「止めてくださいよそういう態度！何で嘘つくんですか？！僕だって最初は違うって思ってた。でもこの間のあれはないでしょう！なんであんなことされないといけないんですか！？」

いきなり大声に驚きつつ彼を見る、気づけば彼の瞳には涙が浮かんでいた。それを見てあたしはハツとした。

この気遣いが逆に相手を傷付けるのだと。そして彼は今現在あたしがとった態度によって悲しんでいる。

「咲月さんがいじめを受ける必要は無いです、だって何も悪いことしてないでしょう？それに姉ちゃんも知ってましたよ。僕が、もしかしらって話したら『やっぱり巧もそう思う？』って言っていました。僕はまだ1年生だから中学っていう雰囲気は良くわからないけど、沙耶さん、いや。あんのカスがやっていることは小学生以下だって事はよく分かっています。3年生の姉に聞いても『あの子のやることは幼稚だよ』とも言っていました」

「そっか……」

あたしはそれ以上言葉が出なかった。なんて話せば良いのか分からなかった。

でも巧は言ってくれた。

「その……僕はいつでも咲月さんの味方ですから、もちろん姉、いや、綾姉あやねえも味方です。」

「ありがとう……巧」

あたしは家に帰ってそのこと言葉を思い出すだけでしきりに涙が出た。

家に帰るとお母さんがいつもあたしを温かく迎えてくれた。

だからあたしは家では何一つ不安にさせるような態度はとらなかった。

「おかえりー咲月！今日はオムライスよーお母さん頑張ったのよ？だから早くテーブルにいらっしやい」

玄関のドアを開けるだけでお母さんはすぐに出迎えてくれた。

あたしはうん、すぐ行く。と言って素早く自分の部屋に戻ってカバンを置いて部屋着に着替えてからテーブルへと急いだ。

「おっお父さんじゃないかーもう帰ってたの？おかえり」

「ただいま……咲月ーお前まだ彼氏なんて作ってないだろうなあ？」
あたしをからかうかのようにお父さんはいつもそんなこと言うてる。

でもあたしはそれを迷惑だとは思ってない。あたしはそんなお父さんが好きだから。

まあ、好きとは言ってもLOVEじゃなくてLIKEの方だけどね。

「か、彼氏なんているわけじゃないじゃん。うんいいいいい」

ワザと動揺して見せるとお父さんはさっきまで読んでいた新聞を閉じて、いやまさか。いやいやまさか……な。と動揺していた。あた

しはその反応が少し面白かった。これだからお父さんは好きだ。

「馬鹿ねーあなた、咲月に彼氏なんているわけ無いじゃない」

「ちよつとー失礼じゃない？」

お母さんがオムライスを人数分お盆に載せてテーブルに次々と置いていった。

それを見たあたしは一応それを手伝った。

でもさっきの発言は聞き捨てならない。

「そつかーそくだよな母さん、咲月に彼氏なんて出来ないよな」

「お父さんも失礼だぞー、そんなこと言っていると彼氏どころかお嬢さん作っちゃうからね」

「またまたそんな事言っちゃってーあんたにはまだまだ早いわよ」

そうお母さんが言つとお父さんもそれにうんうん、と頷いていた。

「いいもん、高校になったら一人で生活して旦那さんと共同生活するもん」

こうなつたら意地になってしまふ。絶対作つてやる。

「な！咲月、それはお父さんが許さないぞ！」

お父さんが過剰反応してきた。やっぱ愛する娘を手放したくないのね。

「まあまあ、あなた。いいじゃない、一人暮らしだなんて。それに高校のときから一人で生活できるようになっておけば何処の大学に行っても安心じゃないの」

「……ま、まあそうか」

「だからこの際咲月の家買っちゃいましょうよ」

お母さんが思いついたかのようにそう言った。初耳……いや、お父さんの収入も凄いけど。

でも家を与えるだなんて行き過ぎた親だと思う……。

「えええ！？馬鹿か！？それはいくらなんでも」

お父さんが反発した。やっぱお父さんはちゃんとしてる。

「そうだよ？！お母さん家なんてプレゼントあたしには」
事が事なのであたしもお父さんの意見に便乗する。

「それは高校生になったら言うって約束だったじゃないか！俺だつて言いたくてたまらなかったんだぞ？それをお母さんは……」
お父さんは前々からそのつもりだったらしい……さっきの発言取り消しする。

もう、このときのお父さんはあたしに関するいじめのことを知っていたらしい。

そしてそのいじめの事を聞いたとき、あたしに一人暮らしをさせ、この地から離させる決意をしたんだと後で知った。

それからもしじめは続いた。でもあたしはそれに負けなかった。

負けなかったのには理由がある、それはお母さんとお父さんの存在だ。

この二人がいつもあたしを優しく包み込んでくれるからあたしは負けなかった。

確かに辛いけどその辛さは家に帰るといつもお母さんが癒してくれる。

お父さんも可能な限り自慢の愛車を運転してあたしをいろんな場所へと連れて行ってくれた。

他にも巧が休日になったら遊びに来てくれてあたしを一生懸命笑わせてくれた。

お母さんは巧が来るたびにあたしをからかった。でもあたしはそれが楽しかった。

それから無事とは言えないけどあたしは中学を卒業した。

それから数日後のある日、いつも忙しくていつ家に帰ってこれるか分からないお父さんが珍しく家で新聞を読んでくつろいでいる時に、そのお父さんがこう言ってきた。

「咲月、今度の日曜映画でも見に行くか？」

35話（後書き）

前書きに書いたとおり、感想をよろしく願います。

もしこれで感想こなかったら……ああ、いや。何でもないです。

兎に角、僕はよろしく願いますと頭を下げます。

36話

「……そんなことあったのかよ」

「お姉ちゃんかわいそう……………」

「ちょ、二人とも悲しそうな顔しないでよーいやだなあ冗談に決まってるじゃん、冗談だよ冗談。ちよつとリアルすぎたかな？」

「え…………冗談？」

うん、冗談。と言いながら咲月は脱ぎ脱ぎとその白い背中をチラツと見せた。その内にかけて沿っている背筋のラインは凄く綺麗で思わずうわあ綺麗、とこよいが呟く。対して有二は何してんの？！とその嫁の白い肌を自分以外の野郎共に見られないよう自らの体を張って壁を作っている。

「ほら、傷なんてどこにもないじゃん？あれも嘘だよーあははっあたしお話作るのうまいね」

服をちゃんと着た咲月はあははーと笑って有二を見る…………それはどこか悲しそうな表情で。しかしそんな表情をしたのもほんの一瞬、二人とも咲月のその表情に気づかなかった。更に有二は咲月に背を向けていたのでなおさらのこと気づくはずもなかった。

「先、お風呂入らせてもらっねー！」

そう咲月が二人に言うのと二人とも声を揃えて、いいよー。と返した。

咲月が風呂場へ行つた事を耳で確認するこよい。その口元は妙に怪しげな微笑を作り出している。へへ、と思わず悪役さながらの笑いをこぼした。

「な、何？」

有二是新聞の番組表から目を逸らしこよいを見る。

「ねえーお兄ちゃん……今二人きりでしょ？」

「お、おう……ちょっとこよい怖いぞ」

「だからね、力ずくでキスしようと思って……」

そう言つてこよいが床に膝をついてこちらへ寄つてきて、見るからに全力で俺の肩に両手を乗せて押し倒そうとしている。最近のこよいは妙に積極的だ。でも俺にはこれがある。

「そうはさせないっ！」

俺はさつき読んでいた新聞紙でこよいの顔面を鷲掴む。くしゃつと収まったこよいの顔を新聞から浮き出た丸みで確認しつつ、後ろに回りこみお腹部分からギュツと抱きかかえ、胡坐を掻いた中に入れる、これでこいつは大人しくなる。

「……えへへっ」

そんなに嬉しかったのか、とにかくこれでこよいは落ち着いたがこれじゃもう新聞もテレビを見れない。

こよいが俺の視線を後頭部でブロックしてくるからだ。俺が右に頭をずらすと同じようにこよいも右にずらす。左にずらせば同じように左へずらす。一瞬だけ見えたテレビには草原でチーターが取材陣に向かって走り出すのがチラッと見えた、次の瞬間というものかとても気になる。

取材陣は逃げ切れるのか、それとも襲われるのか……。最悪の場合殉職というのも考えられる……。だからすげー気になるんですがそこんところどうでしょうかこよいさん？退いてくれませんかー？

「ちょっとこよい、テレビが気になるんだけど」

「じゃあ音声だけでお楽しみくださいって事で」

「俺は映像がないと満足しないんだよ」

「じゃあこよいがそれよりもいいことしてあげる。きっと満足すると思うよお兄ちゃん」

満足すると思うよ、と言ったこよいは俺の束縛をもろとしないかのようにその体を180度回転させ、自らの体重を俺にすべて乗せてきた。

後ろに倒れそうになり慌ててその拘束を解いて、手を床につけて倒れそうになるのを防いだ。

しかし甘かった。

「痛ってー！」

こよいはピンと張った腕の関節部分に手刀を入れた。腕にもカクンってあるんだな……。

ってそんな場合じゃないって、早くこいつをどうにかしないと！

「んー……」

目を閉じ俺の手首を自らの手で押さえつけそして俺のお腹にまたがるこよい。そして迫ってくる。

俺は必死に足をバタバタした。しかしそんな努力も虚しかった。ただその空間にドンドンドン！という大きな音が響くだけだったのだった……。

服を脱ぎ、タオル片手に浴室へ入る咲月。そして真つ先に鏡を前に座り込こんだ。どうやら背中を気にしている様子だった。

「あ、あははー冗談って言っちゃった……」

咲月が見つめる鏡は咲月自身の背中を映し出し、そして小さくはあるが過去に残った傷跡をも映し出していた。

こっちで一人暮らしするようになってから咲月のいじめはすっかり消えた。

しかし咲月が受けた心の傷は消えそうにない。背中には消えなく

なつた傷までついてしまっている。

よほどのことが無ければ見られることは無いがそれでも咲月は気にしてしまう。有二が風呂に入ったとき、自分もホントは入ろうと思っていたがこの傷のせいで仕方なく服は着たまま、背中を流しに突入した事がある。とにかくこの傷だけは見られたくないのだ。咲月にとってこの傷は少ないコンプレックスの一つなのだ。

頭を洗って次にリンス。流して体を洗った後、湯舟に入る。片足ずつそーっと入れていく。ちなみに今日は有二が風呂の準備をしていた。

「お、丁度いいかも」

そう言ってもう勢い良くもう片方の足も湯船に浸けてしまふ、そして肩まで浸かれるよう足をまっすぐ伸ばす。そして流石あたしの旦那だねと思いつき背伸びをして体の芯まで温まる。そして15分くらいこうしていようと咲月は思っていた……のだが。

『痛つてー!』

という大きな声が聞こえてきた。

「何事?……げ、有ちゃん?」

次に『ドンドンドン!』と、壁でも叩いているかのようなそんな音が有二たちのいる居間から聞こえてきた。

「いやいや何してんの……?!めっちゃ気になるんですけど!?!」

ただ事じゃないと女の勘がそう言っている、恐らくこよいちゃんの仕業だな、早く何とかしないと。
そう思っているときだった。

『キスはまずいだろー!!』

「うわっ!!止めなきゃ!!」

そのセリフが聞こえた次の瞬間には湯船から出て咲月は大きなバスタオルを身に纏い居間へと向かった。

「有ちゃん大丈夫?!こよいちゃんに何かされ」

その瞬間あたしは言葉が出なかった。目の前の光景を見て唖然とした。ただひたすら驚いた。旦那が自分の妹にキスを迫られている。手首をガッチリと掴まれ、オマケにお腹の部分には妹が乗っかっている。いったいここで何がどうなったというのだ……。

「咲月さんヘルプッ!」

そうだ。助けなきゃ、妹なんかに負けてたまるか。こっちは嫁なんだ、妹ごときに負けるはずが無いんだ。早く妹ちゃんを退けて上げなきゃ。

有ちゃんの声がした瞬間、あたしはこよいちゃんを脇から抱え引

き離した。

するとこよいちゃんは今もう少しだったのにーと落ち込んでいた。こつちにだって負けられないものがあるんだ、だから許してね、と心で謝罪しつつこよいちゃんをソファーに座らせ、有ちゃんの安否を確認した。

た、大変な目に遭った。こよいからの襲撃を咲月さんに助けてもらったのはいいけどこれ、いわゆる第二派ってやつだよな。血が出そうだが、主に鼻から。とにかく咲月さんが助けてくれたが今現在咲月さんはその体をもつてして無意識のうちに俺に大ダメージを与え続け、出血を誘っているんだ、主に鼻から。

そしてこれが男と言うやつで……見るんじゃない！と頭で思っている中々目を逸らすことができない。

そして咲月さんがこちらを向いた瞬間、俺はとうとう血を流した……主に鼻から。

「大丈夫?!でも一応ファーストはあたしだったからそこは気にしなくてもいいよ……ってあら?」

「嘘!?姉ちゃんもうキスしちゃってたの?!こよいはてつきりお兄ちゃんの事だからまだやってないだろうからこれでファースト奪えるかもしれないって興奮してたのになー……で、あれ?お兄ちゃん?血が……鼻から出て」

「ち、違う!これはさっきこよいが俺を押し倒したから出ちゃったんだよ!」

全力で二人の想像している事とは違うという事を主張する。でも悲しいかな、この二人全然信じてくれる気配が無い。こよいは落ち込んでるし咲月さんに限ってはニヤニヤしながら両膝を折り曲げて座っていたところをわざわざ四つん這いに変更し始め俺をからかい始めた。止めるチラリズム、止めてチラリズム……。そのバスタオル急いで来たせいなのか少し巻きが緩い……。

「さあ、それはどうかなあー？有ちゃん興奮したんでしょ？ほらあたし今バスタオルしかつけてないんだよ？だから、これさえ払いのければ生まれてきた姿ってわけだ、どうする？脱がす？脱がしちゃう？むしろあたしは脱がしてほしいんだけどなー」

じりじりと近寄ってくるこの同棲中の妻。とはいっても高校生なんだが……高校生なんだが……その威力、侮れない。

「ば、馬鹿言うなよっ！！？脱がすわけ無いだろうが！」

全力で否定する、肯定したらまずいでしょ！？俺はようやく視線をこよいに向ける事によって咲月さんから逸らすことができた……。しかしその瞳は更なる問題を映し出していた。

「そしてこよいはなぜ落ち込んでる？！さっきまでの威勢はどうした？！」

見るからに落ち込んでいる、体育座りになって膝に顔を埋めている。なにやら呟いているようだがいったい何を呟いているんだか。

「有ちゃん全力で話逸らし始めたあ。くふふっ続きは部屋に行っからにしようか……」

「へっ？つ、続き？何の……続き？」

「まあまあ、ちょっと付いてくるがいいさ」

そう言つてさりげなく力が強い咲月さんは俺の腕を引つ張つて部屋へと入り込んでいった。い、嫌な予感が…… つか先の味方は今の敵か？！

くふふふふつ、さっきのセリフ明らかに卑猥な方に意味取っちゃうよね。でもやっぱ言っておかないといけないからね。こよいちゃんにだけは秘密にしておくけど。これって夫婦の秘密ってやつ？

咲月はとりあえずベッドに有二を座らせた。そしてティッシュ箱から何枚かティッシュを取り出しそれを有二に渡した。

「あーでもティッシュもつといるかな？」

咲月はそれだけを言つと有二に背を向けてゆっくりバスタオルを腰まで下げた。

露わになる健康的な白い肌、そこに残る過去の傷、咲月は唇を噛みながらそれを有二に見せた。

あれ？おかしいな、覚悟したはずなのに目からは涙が少しずつ流

れ落ちてきた。やっぱり見せなくなかったのかもしれない。

でも嘘はいずれバレてしまう、バレてしまったその時、有ちゃん
は嘘ついていたのかと言ってくるかもしれない。そう思うと見せな
きゃと思ってしまう咲月だった……。

「ごめんね……あれ冗談じゃないんだよ、だから……傷、残ってる
んだ……」

「え……？」

36話（後書き）

感想待ってます、ではまた来週。

37話

「有ちゃん全力で話逸らし始めた。くふふっ 続きは部屋に行つてからにしようか……」

「へっ？つ、続き？何の続き……？」

「まあまあ、ちょっと付いてくるがいいさ」

くふふふふっ、さっきのセリフ明らかに卑猥な方に意味取っちゃうよね。でもやっぱ言つておかないといけないからね。こよいちゃんにだけは秘密にしておくけど。これって夫婦の秘密つてやつ？

咲月はとりあえずベッドに有二を座らせた。そしてティッシュ箱から何枚かティッシュを取り出しそれを有二に渡した。

「あーでもティッシュもつというかな？」

そして咲月はそれだけを言つと有二に背を向けてバスタオルをそつと腰まで下げた。

露わになる白い肌、そしてそこに残る過去の傷、咲月は唇を噛みながらそれを有二に見せた。

覚悟したはずなのにいつのまにか彼女の目からは涙が流れ落ちてきた。自分でもびっくりしているのか顔が驚きの表情のまま固まってしまっている。やっぱり見せなくなつたのかもしれない。

しかし、嘘はいずれバレてしまう、その時有二は『嘘ついていたのか』と言ってくるかもしれない。そう思うと見せなきゃと思ってしまう咲月なのだった。信用を失うことが彼女にとって最大の恐怖でしかないのだ。

「ごめんね……あれ冗談じゃないんだよ、だから……傷、残ってるんだ……」

背中越しにそう言い、ごめんなさいと付け足した。するとそつとバスタオルを肩まで上げられた。

そして……小さく泣き声が聞こえてきた。

有二が泣いていた、今自分のすぐ後ろで有二が泣いている。咲月は泣くのを忘れ、何で有ちゃんが泣いてるの？と問いかけた。

その問いかけに有二はゆっくりと口を開いた。

「咲月さんが、そんな……目に遭ってるなんて、知らなくて……まさかいじめに遭っていただなんて考えられなくて。さっき聞いたときまさかとは思ったけど……何も残るような傷をつけられただなんて……悔しくて」

「悔しい？」

「俺、昔『咲月さんは……俺が護る』って言ったのに、護れてない……護るって言ったのに」

「それは過去のことだから仕方ないって……ほら、泣かないで、血と涙でぐっしょりだよ」

ティッシュで鼻血と涙を拭き取ってやる咲月。いつの間にか彼女は笑っていた。

「はぁーったく、まだ言うべきじゃなかったかもね」

そう言っただけで彼女はこっちを見ないでよくと告げ、着替え始めた。

いつもあんなに明るい咲月さんにそんな暗い過去があったただなんて……。俺にとって咲月さんは……。こんなこと言っただけで馬鹿みただけでホント太陽のように俺の辺りを明るく照らしてくれるような人だ、そんな人がこんな目に遭っていたなんて……。

俺は知ったかぶりをしていたのかもしれない、知ってるつもりで知らなかった。最悪だ、最悪の彼氏だ、いや、夫か。

それにしても、だ。こんなことなんて言っただろうか。泣いてまで告げることだったんだろうか。

そんな過去があったとしても今の咲月さんが今の咲月さんなのだから、昔はどうだっただなんて俺には関係ない。

……俺も秘密を、いつか打ち明ける時が来るんだろうか、打ち明

けたとしてこよいはどうするだろう、咲月さんはどう思うだろうか……そしていつ打ち明けるべきなのか。あるいは打ち明けないほうがいいのだろうか。正直、俺自身知らないほうが良かったのかもしれない……。

37話（後書き）

次の話から1話1話が短くなります。そして週2〜3回の投稿に切り替わります。

予定としては月曜、水曜、金曜。のどれかにしようと思っています。いづれも午前9〜10時くらいに予約投稿しますのでこれからよろしく願います。

38話

有二と咲月が二人で出て行ったため、残ったこよいは一人で何やら愚痴っていた。

「……こよいはどうせったんこだもん、咲月姉ちゃんくらいもないもん」

今、こよいは体育座りになり、両膝の間に顔を埋めるように俯いていた。

「咲月姉ちゃん卑怯だよ、こよいに無いものあるんだもん、こよいだって昔は大きくなるって思ってたよ？でもだんだん分かってきたよ……こよいはべったんこなんだよ……」

そう呟いた次の瞬間、テレビから『うつせーぺったんこ！』と芸人の声がこよいの耳に聞こえてきた。

それにピクツと反応するや否や

「貧乳で悪かったなこのやろおおー！」

と、叫んだ、テレビに。隣近所の事なんか知ったことか、とにかくムカついたから叫んだんだ、怒らなくていられようかこれが。

そして叫んだ後、何とも言えぬ脱力感がこよいを襲った。もう何もやる気が出ない。極端だが生きることにもやる気をなくした、もうお兄ちゃんなんてどうでも良いやとすら思うこよいだった。しかし次にテレビから聞こえてきたコメントがその時のこよいを救った。

締め切ったカーテンからぼんやりと光が部屋を弱弱しく照らす。

その部屋にはベッドの上に仰向けになってケータイとにらめっこをする男が居た。

『善人元気？私は元気だよー大学で楽しくやってまゝすw』

そんなメールが彼の元に届いていた。ちなみに差出人は白川綾乃と表示されていた。

「あれ、一人称変わってる……」

それだけ呟くと彼は階段を降り、食器棚の下からコップをひとつ取り出し、冷蔵庫を空け、中にあるお茶を注いだ。口いっぱいに冷たい液体が含まれ、それから勢い良く喉を通り越していく、その際の喉をひんやりさせる感覚にもう一度、もう一度とその冷たさを求め結果、一気にコップ一杯飲み干した。

くはーとビールを飲み干したそれと似たような唸りを上げ、また階段を上がり、部屋に籠っては過去の記憶に浸っていた。

綾乃は今や県外にいる人物、そう簡単に会えるわけでもない。しかも卒業の日にはフラれたのだ。

メールを送れば帰ってはくるが何か素っ気無いものばかり。そんな返信にいつの間にか飽きてしまい、善人は新しく彼女を作ること無く綾乃とのことを引きずるばかりだった。

有二に、こんなことを言われた。

『善人お前さあ、綾乃さんのこと引きずりすぎだと思つうよ？そろそろ切り替えなつて。でないと後輩からアプローチ受けてたとしても気づかなかつたりするかもよ？お前髪形変えてから大分かつこよくなつたんだぞ？』

俺はそう言われ、その時何故か有二に苛立ちを覚えた、もしかすると有二にうらやましい等という感情を抱いてしまったのだろうか。良く分からない、でも、凄く腹が立った。

それにしても美咲が安アパートで暮らすことになったおかげでこの家も寂しくなった。

たまに、いないことをつい忘れて『おい、美咲そろそろ起きないと遅刻するぞ』なんて言ってしまったりしてな……。悲しくなつたもんだぜ、またあの声が聞きたい。アドレスくらい交換させるよな。

別に泣くほどじゃないが、それでもいつも賑やかだったからか美咲がいなくなつてから何か大きな穴が開いてしまったかのような感覚に心が苦しくなる。

いつも物足りない気分になつてしまつ、こんなこといったら変だ

が、美咲に蹴られたい。んで『中々やるではないか我が弟よ……』
とか言ってやりたい。また昔みたいなやり取りがしたい。

くそ、急に俺の周りから人が消えていきやがって……。

置いていくなよな俺を。

寂しいじゃねーかよ。

お願いだから俺を一人にしないでくれよ……。

一人になったら俺は……俺は……。

……くそ、あん時のこと思い出してきやがった。止めろ、思い出
すな。思い出すんじゃない。

止めてくれお願いだ止めてくれ！！思い出したくないんだよッ！！

あのときの俺とはもうお別れをしたんだ、もう振り返ることなん
てしないって決めたんだ……。

それから俺は必死に話題を探した、でないと思いついてしまっ
か。思い出すなと意識すると何を思い出してはいけないのか、それ
を確認する時点でそれ自体を思い出してしまう。だから俺は必死に
何か違うものを連想させた……。

38話（後書き）

感想待ってます。あと比較とか嬉しいかもです。初期の頃と現在で何か変わったことがあれば感想に書いてください^^

39話（前書き）

あっという間に終わる小説ってタグつけようか迷ってます（笑）

39話

「はつくしょん！ くそッ！ 誰よあたしのうわさをしたのは？！」

「ち、ちよつと美咲、口悪いよーもつとお・ん・な・の・こ・らしくあるべきだと思っただけどなー！」

「うっさいわね、詩織」

二人、美咲と詩織は同じ高校へ進学し、その高校から近いところにある安いアパートで共同生活をしていた。3食とも自分たちで作ったりしている。決して、とある容器の蓋を開けて粉末、かやくを中に入れ、更にお湯を注いで3分待つなどということとはしていない。意外とすごい事だったりする。

ちなみに美咲は今でも衛との交際が続いている、対して詩織は相手をそろつとしていない。

そんな詩織に対して美咲は何度か彼氏作りなよと言ったことがあるのだが詩織はそれに対し有二さん以外興味が無いの、だから今は作る気が無い、としか彼女は答えない。

そんな二人も高校に入学してある程度月日が経ち、そして今度学園祭という大きなイベントを迎えようとしていた。しかしそこで問題が起こっていた。

「はあー。んで、さっきの話だけどさ」

くしゃみをして鼻がムズムズしたのかティッシュで鼻をかんで美

咲が戻ってくる。

「あー出し物のことね」

「そそ」

二人はこの件についてイライラしていた。愚痴をこぼさないと気が済まない程に。

「一体、どうしてメイド喫茶なの！？ あたしはお化け屋敷が良
いって言ったじゃん！」

「そうよね、私もメイドは嫌だなーそれにしても美咲のお化け屋敷
すぐに却下されたよね」

右手を口に当てくすぐすと詩織が笑い、何よ、と美咲がいじけた。

「だいたいどうしてメイド喫茶なのよ、普通に焼きそばとかそれこ
そ普通に喫茶店やれば良いのに！ どーしてメイドが絡んでくるの
よー！」

そう美咲が言ったのに対し、詩織はあははと笑いながら

「メイドはある種のロマンだからねーそれを考えると仕方ないよう
にも思えてきちゃうわよね」

と言いつ返す。さり気なく世間体（同世代）の事が分かっている詩
織だった。

「ロマンとか糞でしょうが！ ああーもうっ！」

「だから口悪いって美咲、もはや男子を通過して野郎になってるよ」

39話（後書き）

これが今からのスタイルです。いつの間にか終わるような話を展開し続けます、たまに開きっぱなしのことがあると思いますが、目を伏せてください、でないとこよいが決りにやってきますよ？（嘘です）ではまた次回

40話

学校が終わって家へと急ぐ、別に何があるから急ぐというわけじゃない。ただ早くゆっくりしたかったんだ。そんな理由で俺は急いで自宅へと向かう。

最近、咲月さんは学園祭のクラス実行委員だとか何とかで放課後も何やら忙しそうだ。毎日のように委員だか何かのメンバーは残ってまで作業を行っている、まったくもってご苦労なことだ。

一緒に帰れないのは寂しいけどなんだか同居する前のことが思い出せてこれはこれで懐かしくて面白くとも思えた。でもやっぱり寂しいかな、いつも隣にいたからなんだか違和感を感じてしまう。

ともあれ家へと着いた俺は肩からカバンを下ろしながらドアを開ける。

「ただいま」

そう言つとドタドタとこよいが出迎えてくれた。

そしてこよいは微笑みながら

「ポテチにする？クッキーにする？それともこ・よ・」

「水」

「ちょっと！？ こよい全部言っていないじゃん！ しかもそれ選択肢に無いやつだし！」

「いいから水をくれ……膝枕してやっても良いから」

「了解つすよお兄様あ、早くそれを言わなきゃ！」

そう言つてコップを取り冷蔵庫を開けてと水を持って行こうとしているのを横目に俺は床にカバンを置き、ソファーへと腰掛ける。今日も一日疲れた……特に何にもしてないけど。けど何にもしなくても疲れることはあるよな？

冷蔵庫を閉めたのかボタンという音がした、すると

「はいどうぞお兄様」

「ああ、ありがと妹様」

と、ソファーに腰掛けている俺の元に水を持ったこよいがやってきた。

どうぞ、と受け取った水を飲もうと口を近づけると、こよいがわーいとか言いながら膝に頭を置いてきた。

「妹様、それだと水飲めないんですけ」

「ふぁいとー！ いっぱあーっ！」

ダメだ話通じねーよ。

「膝枕ーへへひざまくらー」

頭を何度も何度も置き換えるこよい、膝の上でそういう風に動かれるとくすぐったくなってきた。

手に持つコップが小刻みに震えている、頑張って目の前のテーブルにコップを置こうとしているのだがこよいのおかげでくすぐったいのをこらえるのが精一杯だ、ここから逃げ出したい、膝枕してやるなんていうべきじゃなかった。

俺の膝の上に腕を組んでいるこよいの後頭部をみているとそのこよいが何かを思い出したかのように

「あっそうだった!」

「あがつつ!」

と、自らの頭を俺の顎へクリティカルヒットさせ急に起き上がった。そして俺の頑張りもむなしくコップの水は床にぶちまけられてしまった。

「うーん……………気のせいかな」

「ちょ、待て、おい! 顎だぞ顎! 少しは心配しろっての! しかも気のせいかな?」

「あごめんお兄ちゃん、痛かった?」

「痛いに決まってるだろうが……」

「ごめん！　せめてものお詫びにさすってあげるー」

「や、やめっ、くは、はははっ止め、くははっや、やめ……」

猫の喉元を指先で弄ぶかのようにこよいは指先を転がしてくすぐってきやがる。不幸なことに俺は大抵のくすぐりには弱い、ヤバい。ヘルプ咲月さん……。漫画やアニメみたいに良いタイミングで助けてください、膝枕してあげますから！！

「こよっ！　くすぐった、はははっはは！　ああはっはは、もう止めっくはははは！」

もうダメ、ほっぺが痛い。笑いすぎだよな……。仕方ないこうなったら最後の手段だ……。

40話（後書き）

あっという間に終わる小説と化したこれ。

面白ければ評価してやってください、このサイトを使っている友人がいらっしゃったらよろしければ宣伝してやってください。

ではまた近いうちに！

41話

高垣衛、中学でこよいたちの同級生だった男子生徒。

彼の明るく、誰にでも優しい態度が美咲に好かれ、それから告白を受け、晴れて美咲とカップルとなった。

そんな二人は高校に入学した現在でも交際は続けている。しかしそんな衛に新たに好きな相手が出来てしまった……。

その相手の名前は椎名さくら。

最近駅前に出来たカフェのケーキがおいしくて皆つわさずる様になってきた。

どうもそのチーズケーキがおいしくて今日のお昼に私は聞いた。だから私はこれを利用して衛君とデートをしようと思ったりして……。

そして私の目の前には帰りの支度をしている衛君が居ちゃったりして！ だからさっそく誘ってみちゃったりして！ きゃー大丈夫かな？！ 上手くいくかな？！ 上手くいったらキスしちゃったりして？！ きゃーワクワクして来ちゃう！ そんな支度なんて放っておいて早く行こうよ！

「まーもーるーくんっ!」

そう言っ て彼女が俺に抱きついてきた。高校生になっ てこんなこ
とされるとすくく恥ずかしい。

さくらはいつもこうだ、周りの視線なんて気にせずこんなこと
をしてくる。

「さ、さくらさん!？ ど、どうしたの?」

思わず俺は声が裏返りそうになった。ホント困っちゃうよ、俺に
は美咲が居るっ ていうのに……。でも今好きなのは……。

「えへへーなあに動揺してんだか、もしかしてドキッとした?
あは」

「そ、そんなこと無いよ! ってかなんか用?」

そんなこと……無いわけ無いじゃん、好きな人にこんなことされ
てドキッとしないうけが無い。俺には美咲が居るっ てのに、はあ、
情けない男だ。彼女を差し置いて他に好きな人が出来るなんて最悪
な人間だ。でも、俺はさくらさんが好き、好きになっ てしまった。
彼女に惹かれてしまっ たんだ……。だから……ごめん、美咲。自分に
正直になれっ て言っ てくれたのはお前だっ たよな、だから俺、正直
になる。ははっ 馬鹿だよな俺、なに逃げ道作っ てんだか……。

俺ってホント馬鹿な男だ……。

41話（後書き）

お気に入り登録していない読者様は是非！

感想と評価を今か今かと待っています！もし、このサイトを利用しているお知り合いがいらしたら是非勧めてください！

ではこの辺で失礼させていただきます！

42話（前書き）

登場キャラの容姿についてあまり補足が無いのはシュレディンガーの猫的な意味があったり……ようは読者様から見て自分だけの世界で読み進められるかと思っただ次第です。椎名さくらの髪の色は桜色だとか、いやいや青でもいいじゃんとか自由に想像力働かせてくださいというわけですね（笑）

でもこれだけは言います、自分の中ではこの作品の中にツインテールはいません。

42話

「そう……少しまずいわね」

とある安アパートの一室でそう呟く彼女はパタンと携帯を閉じ、彼女は視線を前に向ける。

コレはまずいことになるかもしれない。でも私には何も手出しは出来ない、か。

そして次に、目の前に居る彼女を見ると思わずはあ、とため息が出た。その目の前に居る彼女は椅子の背のたれの頂上部分にお尻を座らせ悩める像さながらのポーズをとっている。少しでも彼女を見る角度を変えればサービスショットになりかねないのである。全く、この子はもつと女の子らしくあるべきだ思っただけだな、いつになっても野生ってか男らしいってか「痛っ！」「……え？」

「聞こえてるわよ……？コンチクショウ」

「あらら、口に出ちゃってたのねーカツコ笑い」

バカにするかのような口調で詩織は美咲をくふふとからかった。からかつてでもこれしきの事で美咲と喧嘩にならないことを承知の上での事だった。

それにしても美咲はいつたい何をそう悩んでいたのだろう、そう考えるよりも先にさっきの発言に対するツツコミの処理をするのが先決かな、そう詩織は思った。

「ほとんど口に出てたわよ、ってかカツコ笑いとかもう馬鹿にしてるよね？ ねえ？」

「あ、バレちゃいました？ えへっ」

えへっ、と可愛い子ぶって見せる詩織、そしてその姿を通して「これが女の子つてもものよ」というメッセージが直接美咲の頭に流れ込んで、彼女はほんの、【ほんの少し】イラッとした。

「絵になるところがウザいわ、ああウザい。多額の保険金掛けてあげるから死んでくださいよ。ってかそろそろお買い物行かないと夕飯ないからね！？ だから早いうちに行こうってさつきから言ってるだけさあ！ って聞いている？！」

「はいはい聞いているわよ、んじゃ今日私カートを押すわ、だからメニユーは勝手に決めちゃっていいよ、何でもいいわ」

何でも良いと言われると困ってしまうのは恐らく美咲だけではないはず。相手のリクエストによって夕飯を決めるのだからそこで何でも良いと言われると結局自分で献立を考えないといけなくなるのだ。

なので美咲は少しイラついた様子で詩織にリクエストを聞いた。

「それすごく困るんですけど。何でもいいってのが一番悩まされるんだよ？ だから詩織、何かリクエストしなさい」

呆れた様子で美咲は詩織に言った。すると詩織はしばらく考え込み、そして彼女は何か閃いた表情で言葉を返した。

「ふふ、じゃあ【何でもいいわよ！】美咲の自由にしなさいっ！」

それはいたずら心満載の返事だった。

「それが一番困るんじゃコラアア！！」

「あ、男になった」

これこそ彼女が美咲をいじるにあたったの醍醐味と言えるのだ。コレが楽しいからいじるのを止められない。

「あたしは立派な女よ！！　しかも男になったってそれ何処の男の娘よ？！」

「分かつてるわよ、あんたは女よ。胸だって私より大きいもの……チッ」

自分の胸の膨らみを手のひらで確認する詩織、確かに膨らみはあるが美咲と比べるとその大きさは劣っていた、美咲に負ける部分があるとするばそれは胸の大きさだろう。こんな子に胸なんて必要なんですか？神様、私の胸が大きくなるようどうか、どうかお願いします。そう心の中で祈る詩織であった。

「何でそう淡々と真面目に返すの……心にグサツと来るわ、あと小さく打った舌打ちも……」

そう軽く落ち込みながら少女はエコバッグを用意し、既に靴を履き始めた同居人に遅れをとらないよう外へと急ぐのであった。

42話（後書き）

読みやすい文章が分らない。以前アドバイスを下さった【改行後の一行空け】は結局やってて……しかもアドバイスのコメントを勘違いして（国語力実は皆無なんです）改行して一行空けたそこからなぜかまた一行空けた第40話を携帯で確認してみたらなんといいますかゆったりとして読みやすかったんですよね、そこでこれからどうしようかと。間隔を空ける際、それは1行か、それとも2行か。

何かこれについてコメントくだされば助かります。読者様の目線の意見があると作者からして貴重な参考になりますからね。

思いつきり修正しました。（11月4日 午前3時）

43話

放課後の教室、外でサッカー部と野球部がそれぞれ練習に打ち込んでいる姿を見守る生徒が居た、この生徒はもう間近に迫った文化祭の出し物の準備をするメンバーのうちの一人だった。

「あ、顔面からズサーって行っただよ……ありゃあ痛ったそうだなーははっ、まあ頑張れや神崎先輩」

直後、そう呟くこの少年の背後から2人の少女が現れた。なにやら怒っている様子だ。

「篠崎い、あんたまたサボるのお？ははっ命知らずねーいてこましたろうか？」

「そうよー篠崎君、美咲にまたアレ喰らわされたいの？結構悶絶してたよね？だからそんなところでサボっていないで早くみんなの輪に戻りましょうよ」

一人は落ち着いた様子で腕を組みながら、もう一人はスカートのポケットに手をつ込み、いかにもイライラしてんだけど？と言わんばかりの口調で少年を注意、警告した。

「ああ、ごめん。すぐ行くよ、少しでも校庭を眺めていたかっただけなんだ」

「何あんた清清しくつまらない事言ってるのよ、結局サボってたんじゃない、ほら早く行くぞ篠崎」

男口調になりつつある美咲が篠崎と呼ぶ少年の腕を掴み教室の外へと連れて行く、一方詩織は篠崎を拉致する美咲に気を遣ってあらかじめ進路方向にあるドアを開けておき、二人が出て行くや否や自分も外へ、そしてドアを閉め二人の後ろに付いて行った。

階段を上がり、長い廊下を歩きその突き当たりにある部屋に3人は入っていった。そこが美咲たちの出し物をする場所なのだ。

入るや否や連れてきたと美咲が一言。続いて拉致された、解放してくれと篠崎、最後にはいい、皆ただいまーと詩織が。

そしてそれを聞いた部屋の中央に居る男子生徒が皆に始めようかと告げた。

「おかえり詩織さん、じゃ早速準備に取り掛かるから、篠崎お前も手伝えよ?」

「ああ、分かってるよ。くそ、じゃんけんでチヨキを出していればこんなことには……」

「篠崎」

そう注意され篠崎は機嫌を損ねた、何が悲しくて放課後残されなといけなんだ、そんな事だけ考えている篠崎だった。

「はいはいすみませんでしたよ、やるよやりゃあいいんだろ?」

そう篠崎から返事を聞いた生徒は「よっしゃ今日も頑張るぞ!」

とその場に居る皆に言った、が正直なところ彼を除くみんなはダ
ルイとしか思っていないので弱弱しく「「おー」と一応彼に返し
ておいた。

「ったく、メイド喫茶なんてやってらんないのよ、ねえ詩織？」

この期に及んでも美咲はやってらんない発言、一応あそこで張り
切って準備してる男子には聞こえないような声のボリウムは下げて
いた。

「まあね、私も正直なところ恥ずかしいし、女子からしたらあんま
り面白くないのよね、ってコレなんて羞恥プレイ？」

と、詩織は近くに居た男子こと篠崎に聞いてみた。

「そこで俺に振るのかよ、ってかアレだろ？どうせお前らのメイド
服姿見たさにメイド喫茶やろうって事になったんじゃない？まあ俺は
メイド服より巫女服だけだな！」

「なんだと？！巫女服よりメイド服がいいに決まっている！いいか
今から俺がメイドのよさを教えてやろうではないかご主人様！！」

「はあ？！あんなもんより巫女の方が良いに決まってるだろうが！
清楚で清潔で！メイドなんて客に媚びうるだけじゃねーのご主人様
！？」

刹那、この男子に美咲が背後からハイキックをお見舞い、メイド
を語る男はげふつと一言の後膝から床に倒れた。

「ぱ、パンツ見え」

「ふんっ!!」

「がはっ!!?」

不幸なのか、はたまたラッキーなのか。篠崎は美咲の上段蹴りを目の前の男越しに正面から見る事が出来た、しかしスカートから覗くそれは体操服だった……。

43話（後書き）

やっぱり短いですね、しかも前回の話とは繋がらないという……。
まあいいや。

44話

高校でも文化祭の準備が忙しく行われている。ちなみにこの高校での出し物はメイド喫茶一色だ。しかし中にはハズレも存在している……ハズレということに対しての説明はナシとする。

咲月は役目を終え、急いで旦那の所に帰ろうとしていた。しかしそんな彼女に対し申し訳なさそうに声をかける男が居た。

「姫川さん」

「あ、善人だ……ん？ 何か用？」

そう言われ後ろを振り向くと善人が壁に背をもたれて自分に対し話しかけていた。

「ああいや、帰り道途中まで一緒だから付いていつていいかな？ 何なら家まで送るよ？ だからその了承を貰わないとまるで俺、ストーカーしてるみたいで気が引けちゃうんだ」

つまりは一緒に帰りたいただけ……でもまあいいか、そう思った咲月は別に良いよと返事をした。

それにしても有りそうで無かったツーショットである。善人と咲月、二人が並ぶと妙に新鮮さがあり、そして二人を照らすオレンジ色の夕陽が加わって外から見ていても絵になっている。

「ねえ、最近綾乃ちゃんとはどうなの？」

特に会話もなく気まずいなと感じた咲月が話を切り出してきた。
対して善人は綾乃という言葉にピクツと反応するや否やその質問を
笑い混じりにすばやく答えた。

「フラれちゃったわ、ああーあ、ホント悲しいっちゃありやしない
ぜ」

「え?! 別れちゃったの!? 知らなかった……ごめん、聞い
ちやダメだったかも」

咲月がごめんと謝ると善人は反射的に彼女の頭に手を置いた。する
と咲月はえ? と拍子抜けした声を上げた。

「ごめんなんていうんじゃない……って、ごっごめん!! 何やって
んだよ俺?!」

もはや無意識で行っていた行動に対し必死に謝罪する善人。いつ
も綾乃は善人に対し、ごめんなのです、や、ごめん善人。等と謝る
ことが多かった。そしてその度に善人は綾乃の頭に手を置いて「ご
めんなんて言うんじゃないよ」と言い返していた。そしてさっきの
咲月の「ごめん」というのが綾乃の「ごめん」と重なっていたのだ
ろう、だから無意識に彼女の頭に手が伸びてしまった……というこ
とだろう。

「あついや! 別にあたしは大丈夫だからっ! だからさ、そんな
謝らないで、善人は何も悪いことなんかしてないんだからね?」

善人に非はないよ! と説得する咲月、彼女はしまった、聞かな

ければ良かったと心の隅で反省した。そして善人はさっきのシヨックで多少目が泳ぎながらも咲月の言葉をその胸に受け止めた。自分は悪くないんだ。そう自分に言い聞かせるために。

そしてそれっきり、善人は黙りこんでしまった。

また気まづくなつた、しかし気づけば既に咲月と善人は家の前まで来ていた。ふと立ち止まり、善人は咲月に笑顔でじゃあね、また明日。と後ろに振り返りながら背中越しに小さく手を振りながらそう言った。しかし咲月はその笑顔の裏を知っている。過去の自分と同じなのだ、他人に気を遣うその笑顔を他の誰でもない咲月は生憎にもよく知っていた。だから咲月は呼び止めることにした。独りにさせちゃダメ、心でそう強く思ったのだ。

「待つて善人！ 行かないで！」

その声を聞き善人は踏み出したその足を止める。もう用はないはず……だとしたらなんだ？

「行かないで善人！」

「はあ？ どうしたんだ？ そのセリフ、まるで恋人同士だぞ？ 涙を誘うお別れのシーンですか」

肩で笑いつつ善人は咲月にツツコミを入れた。対して彼女は目の前で笑っている彼を見てほんの少し胸が痛くなった、そして意を決して口を開く。

「いいから行かないで！今日はうちに泊まっていてよ」

「泊まる……？ 俺が？」

「善人以外に誰が居るの？ さ、早く上がってよ、さあ早く早く！」

半場強引な咲月に自分の腕を掴む咲月を見て、あつ……！と驚いたような声を上げた、一瞬、ほんの一瞬、目の前に居る彼女が善人の目には綾乃に見えたのだった……。

「善人、さあ上がって」

そう優しく言い掛ける咲月は玄関のドアを開け、さあどうぞと言わんばかりに善人を手招きした。

善人は頭の中で必死に物事を整理していた。目の前に居るのが綾乃に見えているからだ。目の前に居るのは姫川咲月なのに、彼女と白川綾乃が脳内でシンクロしている、もうここには居ない綾乃が目の前に居る、メールを送ってもろくな返事しかしなくなった彼女が目の前に居る、あんなに好きだった彼女が……目の前に居るのだ。目を擦って確認したかった、でもそうすると彼女が見えなくなりそうなのがしてそれが出来なかった。しかし分かっていた。最初から目の前に居るのは姫川咲月であって白川綾乃ではないということが。そう頭で考え、もう一度目の前を見た。

「どうしたの善人？」

するとそこには斜めに首を傾げた姫川咲月が居た。そう、白川綾乃はここにはいない。心の中でそう断定付けると急に悲しみに襲われた、なんだコレ……悲しいのか？ 何故悲しい？ どうして俺はこんなに切ない気持ちになっている？ 涙が……くそ、涙がこみ上げてきやがる……！！

善人は今にも溢れそうな涙を堪えた。

「ちよつごめん。俺着替えとか持つてきていいかな……？ 必ず戻ってくるからさ」

全てを言い終わる前に彼は俯いて後ろを振り返った。咲月は一瞬、有ちゃんのを借りればいいんだよ、と言おうとしたが善人の肩が小刻みに震えているのに気づき言葉を飲み込み、いいよ。行つてきなちゃんと帰つておいでよ？ と、そう彼の背中に声を送った。きつと何か事情があるんだろう、でもそれはあたしが関わって良いような物じゃないかもしれない。そう咲月は感じ取ったのだった。

ありがと、そう呟くと善人は自宅へ向け走り去っていった。

44話（後書き）

ん！？長くないか？！まあいいか……。

感想ください。頼みます。

45話（前書き）

今度、感想を送ろうと思ってくださったなら、是非この作品においてお気に入りのキャラ名を添えていただけると楽しいです。

45話

「はあっ、あつぐあ、ぐすっ……………はあああつぐずっ……………」

必死に足を前へ前へと踏み出し、荒い息を立て、目からは涙を流しながら、そして絶えず鼻から出てくる鼻水をすすりながら彼は自宅へと走る。とにかく全力で道を走った、無我夢中で早くあの家に戻りたい一心で上り坂も地中で歩くことなく駆け上がった。

平沢家

上ったり、曲がったりを数回繰り返すとようやく自宅が目に見えてきた。

玄関の前に立つとティッシュ配りのお姉さんから貰ったそれを乱暴に取り出し鼻水を取り、それから涙を拭き、大きく深呼吸してから自宅へと踏み込んだ。

ただいまなんて言わなくてもいいよな、それだけ思つとすぐに二階へ駆け上がる、母親に声を掛けられる前にさっさと家を出てやるうと思つていた。

ドタドタドタ！と慌しく階段を駆け上がる音が、そして既に家に帰宅していた母親は何やら騒々しいなただけ思つて、のん気にせんべい片手に居間で時代劇を見ていた。

ドアノブを回し、自室へと駆け込む彼、少しずつその乱れた呼吸を整えながら何を準備すべきかを考えた。

「こ、これくらいでいいだろ……………」

通学用のかばんの中に入っているものを床にぶちまけるとその空になったかばんの中へ着替えを綺麗にもたたんで入れていった。まだ空間がある、どうせならお菓子でも持っていこうかと机の二番目の引き出しからまだ未開封のお菓子を取り出しその空いた空間にそれを詰めていった。

着替えにお菓子をかばんに詰め込み、そして乱雑に床にぶちまけられたその中からケータイを見つけ出し、慌てて上着ポケットへと入れ込んだ彼はよし、と息を吐きドアノブを回した。不思議と楽しそうに顔がにやけてるように見えるのはまるで遠足前日の小学生のようであった。

部屋へ入って行く際と同じように、出て行く際も慌しく駆け下りていった、ダダダッダン！荒々しく階段を駆け降り、フィニッシュには豪快にもジャンプ、そして着地と共に床を蹴りジェットスタート、一瞬たりとも彼の体は立ち止まることを知らなかった。

少しだけ自分がどこぞの少年漫画の主人公になったかのような気分には彼はどこか楽しそうだった。さっきまで泣いていた彼はどこへ行ったのやら、泣いていた証拠に彼の部屋にはぐっしりと濡れたティッシュが置かれているというのに。

「いつてきますー!!」

「ちよつと善人！あんだどこに行くかぐらい教えなさいよー?!」

「うつせー！どこに行こうが俺の勝手だ！今日帰らねーから！！」

吐き捨てるように彼はテレビを見る母親にそう言い放つとさっさと外へ飛び出していった。

外へ出るや否や彼はダッシュで平沢家を目指す、ハアハアと荒く呼吸をする彼はもうじき彼らに暖かく迎えられることだろう。そう、彼の心の傷はあの3人が少しずつ癒していくはずだ。

一方、彼が家を飛び出した直後のことだった。

「善人……」

あわただ 慌しく、家を飛び出ていった彼の背中を見てそう呟く少女がそこに居た。どうやら彼女は善人に用事があるらしい、しかし、たった今善人は家を飛び出ていったので彼女は何事もなかったかのように後ろを振り向いてそのまま去っていった。一体彼女は何の目的でここに来たのだろう。

45話（後書き）

ちなみに作者の一番のお気に入りはこちらです（笑）なんの迷いもなく兄に甘える姿がとてかわいらしいです。

46話

善人を見送り、さて家事でもやりますかと中に入る、かばんを置いて居間へ行つて見るとまたか……と呆れる光景を目のあたりにした。

「何やってんの有ちゃん、それとこよいちゃんも……」

「えへへー姉ちゃんが居ないうちに兄弟の垣根を超え、いたっ！何するのー咲月姉ちゃん？！」

咲月はこよいを羽交い絞めにし近くのソファーへと運んだ。だめじゃない、こよいちゃん。そうこよいの耳元でささやく彼女はとてつもない恐怖をこよいに与えた。目が笑ってないのだ。

「何するのー？はこっちのセリフだこよい、咲月さんありがとう！助かったよ！」

「あはは……結構やられてるね」

それにしてもひどい有様である。カッターシャツは胸元がはだけており、ズボンに関してはベルトがどこにも見あたらない……あ、あった。ベルトに関しては有二の手首を縛るのに使われており、コレは行き過ぎな愛情だと咲月はため息をついた。

まあ、とにかく大事には至らなかったようで咲月は安心した。

そしてそんな場合じゃなかったと気づくと有二の拘束を解きながら二人に笑顔で

「あ、そうそう、今日金曜だから善人泊まりに来させるよ、いいよね？」

と訊いた、こよいに関してはすこしふてくされていた。数秒前までガクガクしていたのになんだこの切り替えの速さは……。そしてそのふてくされた少女がこう言った。

「えー？泊まりに来るの？こよいおもてなしとか出来ないよ？」

遠まわしに嫌だといっている様子だった。

「いいの、そこはあたしがやるから、有ちゃんはどう？許可してくれる？」

有二を見ながら訊いてみると彼は首を縦に振った。

「うん、もちろん。ちなみに今日はここで布団を敷いて寝ることにするよ」

そう返され少し咲月は落ち込んだ、つまりは夜は一緒に寝られないってわけなのだ。

「……………分かった、仕方ないね」

仕方ないと諦める咲月に対し、もう片方の少女はその言葉に噛み付いてきた。

「えー！？お兄ちゃん一緒に寝てくれないの？そんなにこよいのこ嫌い？」

甘えた声で兄を誘惑する妹、兄は目を逸らしながら答える。

「嫌いじゃないけど、せっかく泊まりに来てるのに俺がこよいと寝てたらあいつ一人ぼっちじゃん」

「そりゃあそうだけどさあ……」

まだ何か言いそうだが、そう思った咲月はこよいに釘を刺すかのようについに言った。

「はいはい、こよいちゃん、明日からまた一緒に寝ればいいだけのことでしょ？ふふ、今日はとことん可愛がつてあげるわ……」

「こよいは一瞬恐怖を感じましたお兄様！一体明日を無事迎えることが出来るのでしょうか？！」

先ほどの恐怖が上乗りの様子、もう咲月に逆らうことはないだろう……。

とにかく話が落ち着いたところでさっさと準備をしなくてはいけない、そこで咲月は二人にそれぞれ役割の指示を出す。

「話はその辺にしておいて、夕食の準備とお風呂を沸かしてください！有ちゃんはお風呂！こよいちゃんはあたと一緒に夕食作るよ！おっけー？」

そう訊くと兄妹は口を揃えて

「「まっかせろー」」

と答えた。ふふっそれじゃ早速取り掛かるうか、そう言う和有二は立ち上がり風呂場へ、こよいはソファーから腰を上げて思いつきり背伸びをした。その姿を見てまたスイッチ切り替えたか、まあいいやと咲月は心でため息をついた。そしてエプロン取ってこようと呟き早速仕事に取り掛かった。

善人、早く来ないかな。と一人楽しそうな咲月なのであった……。

46話（後書き）

クスッと笑える瞬間的に終わる小説？

ちよつと一週間休載しますね。話を整理しないと今の通りグダグダなので（笑）

よければ評価してください、お知り合いにこのサイトを使用している方がいらっしゃったら紹介してみてください。

それでは失礼します。

PS・あれ、予約掲載になってないじゃん……こんな深夜に投稿して読者増えるかよ……orz

47話（前書き）

テスト終わった！別な意味で終わった気がするけど・・・思い込みだと信じて連載を再開します！つか残念なことに文章力衰えました。あとキャラの崩壊があるかもしれませんので注意して読んでみてください。

なお、今回は約一週間分の文章量でお送りしますゆえ、瞬間的に終わってクスツと笑える小説にはなっておりませんのでどうでも良いですね。では、作者も久しぶりすぎて自身で書いたのに内容が把握できていない本編の続きをどうぞ！

47話

ピンポン、その音を聞き、3人は玄関に集まった。

そう、今日は善人がお泊りに来ることになっている。なのでさっきまでそれぞれ役割を分担して家事をしていたのだった。

しかし、集まって早々こよいが嫌そうに、

「やっぱり今日はお兄ちゃんと眠れないんだねー」

と嫌そうに言った。それを聞いた有二是、

「まだ言うかこよい」

とこよいの頭をわしゃわしゃと撫で回した。

「怖い人だったらどうしよう」

次にそうこよいが言うと、

「善人は怖い人じゃないから大丈夫だよこよいちゃん」

と、咲月は補足した。そんなやり取りをしていると有二があることに気づいた。

「ってかさ、いつまで開けないつもり？放置プレイがお好きなの？」

そう有二が言うとき咲月は

あ。と思い出したかのようにどうぞ！入って！とドアの向こうにいる人物に言った。

ガチャと音がし、通学鞆を肩に下げた、それはもう有二と咲月がよく知る人物が現れた。そう、今日はこの少年の為に『牛肉』を焼

いたんだと咲月は改めて意気込んだ。

彼が3人の前に姿を現すと、

「こんばんは、今日はお世話になります、よろしく願いします」
と、とても礼儀正しく挨拶をした。

それはいつもの彼からはありえない礼儀正しさだった、思わずあれ？この人誰だ？と苦笑しつつ有二は、

「おう、善人今日はよろしくな、早速だけどこっち来て」
と居間へと善人を案内した。とは言ってもすぐ近くなので手招きといったほうが正しいのかもしれない。

対して善人はどうぞ、と言われたが、どうしてもこよいが目に留まってしまう、ちょっと不機嫌だな、もしかして俺が来たからかな、と申し訳なさそうにこよいに、

「こよいちゃん嫌そうな顔してるな、ごめんな、こよいちゃん」
と言ってから中に入った。

靴を脱ぎ、手招きされるまま居間へと行く。そこへ入った瞬間、目に映った豪華な夕食に善人はうわ、すげえな、と声を漏らした。

善人がソファアーへ荷物を置くとそれを見て咲月が、
「んじゃ早速夕食にしようか、ほら善人はここに座りな」

とイスを引き、善人の背中を押してそこに座らせ、自分は善人の隣に座った旦那の目の前に座る。……つもりだった。

「こよいの先取りっ！お兄ちゃんの正面はこよいが貰ったあ！」
と、嬉しそうに笑顔を咲月に向けるこよい、咲月は旦那を見た、その旦那もあははと仕方ないよと笑っていた、なので咲月も一緒に笑った。

「まあいつか、この間キスしたからね。正面に座れなくなっただけ別にだいじょーぶ」

そう咲月が言い放つと、

「キ、キスう！？」

と、こよいと善人がキスという単語に反応し、そして二人は咲月をじっと見つめた。

一方、二人にじっと見つめられている咲月はニヤリと笑い、

「ねー有ちゃん」

と旦那に言い掛けた。同意を求められた旦那はあはは、と笑うしか他ならなかった。

（あれ？キスしたっけか……？記憶にないんだけど？え？この間って何時？）

まあ、それもそのはず、さっきの言葉は咲月の見栄を張った言葉であり実際のところ最近はキスなどしていないのだから。

とにかくこちらを見つめてくる男女二人を無視し、善人の正面に座り、手を合わせた。

咲月が手を合わせるのを見ると有二とこよいも慌てるように手を

合わせた、それを見て普段そんなことをしない善人は懐かしいな、とそれをしていた頃を懐かしみつつ同じように手を合わせた。

「せーの、『いただき』『あつ！水っ！』『』」

わざとらしく慌てて席を立ち有二と咲月はそれぞれコップと水を。

それを見る善人は少しの間をおいて

「引っかったなあああくそー！お前らああ！」

と善人は自分の太ももをパンパン叩いた。

そんな善人を見て、

「美咲もね、同じようなりアクションだったよー！あはは、これ楽しい！『あれ？違う？』ってかこれ恥ずかしーっ！』って表情にこよいは笑っちゃった」

と、こよいが笑い始めた。

「ふはは、見たか善人、これが平沢家のおもてなしだぜ、まんまと引っかったな」

「ああ、引っかったぜ。はあーお前ら楽しそうで良いよなあ」

少し寂しげな顔でそう呟く善人を見て意外なことにこよいがぼつりと、

「やっぱり、ずっと一緒にいた人が急に居なくなるのは寂しい？」

と訊いた。ずっといた人というのは恐らく綾乃ではなく、美咲のことだろう。

「ああ、すっごく寂しい、当たり前が当たり前じゃなくなるんだ、不安になることもあるしつまらなくなることもある。近すぎて気づかなかったのかねー俺にとってどれだけ大切な存在だったのが」

そっか、そう呟くこよいは有二が居ない家庭を想像していた、こ

の家に一人で住むことになる、炊事洗濯、家事全般を自分一人ではないといけなくなる。しかし不思議なことに兄が居ない家庭を想像できない、そう、居ること自体が当たり前なのだから。そんなこと想像できるはずがない、想像したとしてもきつとそれは実際のものとは何か違っているのだろう。

急に二人が静かに考え事をし始め、それを見た有二と咲月は慌てて、

「よっしゃ食べようよ！咲月さん、今日は豪華だねー」

「そうだよー！今日は腕によりをかけたってやつだもんねー！ささ、お二方食べようじゃないか！」

と目の前の夕食に注目させた。

んじゃ今度こそいただきます、と呟く善人は咲月とこよいの手料理を口に頬張った。

善人がそれを口に頬張るのを見てこよいは、

「多分善兄よしにいのお母さんには負けるけどこれでもこよいも結構長い主婦だからね。で、お味はどうですか？」

と、タメ口なのか敬語なのかそこはスルーする。

ともかく、お味は？と訊かれた善人は間髪入れず、

「うんウマいよ！正直毎日こんな美味しいもの食べられる有二が羨ましいぜ」

とニコニコしながら答えた。その顔を見て咲月はさっきまでの悲しそうな人は何処へいったのやら。と正直ホッとした。

その後もどんどん箸が進み、3杯もおかわりした善人は今ソファに腰を据わらせ、ふー。とお腹を落ち着かせている、そんな彼の表情を見る限り満足したようだった。そしてこよいと二人、食器洗いをしている咲月はどこか嬉しそうだった。

「良かったね、善兄満足してるみたいだよ」
そうこよいが咲月に言う。

「うん、そうみたい。良かった、安心した」
それから善人のお泊りはまだまだ続くのであった。

47話（後書き）

今回とある文庫本を参考に文章を書いてみました。表現技法を真似たのではなく、あくまで文章を参考にしましたので、表現技法が上手くなったとかはありません。むしろ見栄えが悪くなったり、よくなったりするのかな？とにかく、また自身で確認します。ではまた月曜に。お相手は投稿日を決めたのに待ちきれずに投稿した柴わんこでした！

48話（前書き）

もう一回だけ少しだけ長い文章量でお送りします。これでオーバーした2週間分は取り戻せたのか？

ではサービスが混じっている48話をどうぞ

48話

こよいと善人で何やらおしゃべりをしている様子だった。

「善兄は、妹に何かされてみたいことってある？」

「やっぱお兄ちゃんって抱きつかれたいよなーあと抱きついて離さないからねとか言われたらやばそう」

そんな二人を、まったく、さつきから一体何の話をしているんだとテーブルの備えイスに座り、咲月がじーっと眺めていた。

それにしても意外なことに善人とこよいの話が進むことにちよつぷり驚いた。この間は善人にきつい事言っちゃったけどもういつその事こよいちゃん貰ってくれないかなー。そしたら有ちゃんと二人つきりなのに……ってなに考えてんのよあたしは。

はあ、と、ひとりため息を付き咲月はどこかへ行ってしまった。

ほぼ入れ替わるかのように、自室から戻った有二が、お風呂の存在に気づいた。

とりあえずお風呂に入らなきゃ、でも今日は先に善人を入らせるべきだよな。そう思い、有二は先にお風呂入ってこいよ。と善人に言った。

「それじゃお先に！悪いな、一番風呂だぜ」

少しにやけた善人がそう言う、嬉しいのだろうか、そんな彼に対して有二是、

「おう、行ってこい、もちろん着替えは持ってきたよな？」

と、少しからかい口調でそう言った。すると、善人はふふん、と鼻を鳴らし、

「なめてんのか？ああ？フハハ、ちゃんと持ってきたぜ！俺のパジャマは『パンダさん』なんだ！」

と、もう見たまんまパンダという感じのフード付きのパジャマを有二の目の前に掲げた。白と黒の2色で彩られ、フードの部分にはその特徴とも言える目が、そして、それをかぶるとちょうど頭頂部に耳が来るようになっていた。とにかく、『かわいい』のだった。

しかし、そのパンダを見るや否や有二が、

「おま、その趣味どうなんだ！？」

と善人に喰らい付く。ちょっと黙ってはいられなかったようだ。

しばらく、二人の口論が続く……。

「うつせー！白黒の、いや、『パンダさん』の一体何処が悪いんだよ？！」

「白黒じゃなくて高校生になって『パンダさん』って！小学生かお前は！」

「へっ！『パンダさん』は良いんだよ！良いじゃねーか『パンダさん！』」

「だから！俺が言っているのはパンダ以前にその子供っぽい趣味止めるよ！って遠まわしにだな……」

「残念だったな！俺はもう、かれこれ5年はこのシリーズを愛用してんだ！」

「5年！？つかシリーズかよ！！？」

「ああそうさ『フード付きアニマルパジャマ！』このパンダさんはその一部なのさ！」

「他にもあるのか……つか普通の、いやもうそれ以外にパジャマはないのか？」

「ない」

「ねーのかよ！」

その口論は突如終わりを告げる、終止符を打ったのは、

「ふたりともうつさい、こよいが蹴っ飛ばしてあげようか？ ああん？お兄ちゃんは特に強く蹴ってあげるよ、気絶でもしてくれたら……へへ、まずシャツから脱がそうか……」

こよいだった。そしてこよいはソファーから起き上がった。それを見て二人は『こんなことしている場合じゃない』と直感した。

「よ、よーし善人！ふ、風呂行つてこい！そ、それから『パンダさん』になつて戻つて来い！」

「よ、よっしゃ行つてくるぜ！……なんだかこよいちゃんの裏側を見た気分……」

少し動揺する有二を置いて善人は、とはいえ自分も動揺しているわけなのだが……まあとりあえず風呂場へ向かうことに。過去に一度雨に濡れて使わせてもらったことのある善人に案内など必要なかった。

懐かしいな、いつ以来だっけ？そんなことを思いながら善人は服を脱いでいった。

そして、浴室のドアを開けた。すると、

「つてうおあああああ!!」

「よっ善人!?!……きゃあああ!」

という風に二人は遭遇してしまった。コレはまずい。

「ご、ごめん! 悪気はないしそれに見てませんって! とっ、とにかくスイマセンでしたっ!」

言い訳うんぬんは程ほどにして早くここから立ち去ることに善人は必死になった。

「…バスタオル巻いておいて良かった……」

そんな善人の判断が良かったのか、自体は小さいまま收拾した。

まあとにかく、大事には至らなかったようだ、しかし咲月は何故タオルを巻いていたのだろうか……その辺は謎である。もしかしたら有二の待ち伏せでもしていたのだろうか……しかし、やはり謎である。

一方、その声を聞いた者が少し不安がっていた。

「一体何事? 善人ってあんな声高いっけ? ちょっと様子伺ってこようかな」

その声の主は有二だった。するとこよいが、

「それよりお兄ちゃん、こよいと一緒にランデブーしない?」

と、風呂場へ行こうとする有二を引き止める、あいにくな事に、また『二人つきり』になってしまった。前回は咲月に助けられたが一体その咲月はどこへ行ったんだろうか。ともあれ、そんな妹に対し兄は、

「しねーよ！ってかお前、客が居るのに何で普段より増して積極的なんだよ」

と、全力で俗に言う『フラグ』というものを回避しようとしていた。

「ふふ、お兄ちゃん好きだよ」

「俺、お前のお兄ちゃん辞めて良いですか？」

「ふふ、ダメに決まってるじゃない」

「ですよー」

その後、怪しく光ったように見えたこよいの目を見て有二は慌ててその場を出て行った。

48話（後書き）

サービスって一瞬じゃねーか！そんな方居ると思います。

でもこちとらまだ15歳、そんな上手いこと書けません（汗

では失礼します。

49話

妹から逃げ出す兄こと有二はさっき甲高い声が聞こえてきたお風呂場へと向かった。

脱衣所のドアを開けながら有二は、

「おーい、甲高い悲鳴あげてどうしたんだ、よしひ……と？ え、あれ？」

と、目の前の人物に語りかける。脱衣所で服を着た誰かがいる、髪が濡れているという事はもう風呂から出た後なのだろうか。

「何？ 有ちゃん、お風呂場まで来てあたしの事襲いに来たの？

あたしとしては嬉しいなー」

「え？ よしひ……」

「って違う違う！ ったくなんで男と嫁の区別が付いてないのかな有ちゃん？」

「だ、だよ、咲月さんだよ。で、あれ？ 善人は？」

ともあれ、自分の嫁と遭遇したようだ。それを認識した彼は、目の前のナイスバディな嫁から目を逸らし、さらに理性を保ちつつ、そういうええ善人のことが気になっていたので、と、善人の居場所を聞いてみた。

「あー、あの子なら多分有ちゃんの部屋に行ったよ、階段上がっていったからね、多分そうだよ」

「ああ、何でまた俺の部屋に……ちょっと行ってくる、多分ここになんかあったんでしょ？ 大体そうだ、絶対そうだね。ってかなんで一番風呂に入っちゃうかなあ？ そこは善人に譲ろうよ……」

「あたしには譲れないものがあるのだ！」

「はいはい、分かったよ、見た感じちょうど着替えて脱衣所から出るところだね、それじゃ今度こそ大丈夫だね、ちよつと善人呼んでくるよ」

「うっん、違う違う」

と、咲月は首を横に振る、そして続けて、

「見た感じ、『さあさ一緒にお風呂入ろうよ！』ってところだよ！
？ ねえねえ、善人のことは良いからさ、あたしと風呂入ろうよ！
背中洗ってあげるよ？ 頭だって洗ってあげるよ？ きれいさっぱりにしてあげるよ？」

と、有二に急接近した。驚く有二のことなどお構いなしに咲月は
どんだん一緒に風呂へ入る口実を並べていった。

「え、いいよ」

「良いの！？」

「ちよ、違っ！ 否定的な意味だつて！ NOだつて！」

「んだよーノーかよ、ちえ、つまないよー、あたしとしてはもっ
ところ……刺激が欲しい！！」

「……咲月さん、そういう事はあんまり言わないで、俺だって理性
というのがあるの、OK？」

「ふふっかわいいな、有ちゃん」

「なっ！……んじゃもう呼んでくるからね……だめだ疲れるよこの
家庭」

妹に困らされ、嫁にも困らされた旦那なのだった……。

49話（後書き）

なんだか落ち着かない毎日を過ごしております。こう……リアルとの両立が難しくなっています。

まあ、こっちはこっちでも楽しいですよ、もうじき一ヶ月になるかのzy……はぁーやめとこ、なんか自分って小さいですねと感じたところで失礼します。

予定では水曜もあげられると思いますので読んでやってください。

出来ればズバリ「面白かった」のかどうか分かる感想をくださると作者は喜びます。

50話（前書き）

いい加減善人のお泊りはいったん停止です（笑）

と、ここであの人の話を入れますね。では本編をどうぞ。

50話

「まーもるっ！衛！」

「ん？さくらじゃん、どうした？」

ここに、衛に対して積極的にコミュニケーションをとる少女がいた。その少女の名は、椎名さくら。彼女は入学してから一日一回は必ずと言って良いほど衛に話を掛けていた。

そしてその少女を監視するかのようになり、一人の男子生徒が二人に対して少し距離を置いてそのやり取りを見守っていた。

（まったく、衛の奴、あいつ彼女いるらしいじゃん。詩織による情報が正しけりやこれって浮気なんじゃねーの？大丈夫じゃないだろうすんだよ詩織よあ……俺はこーやって伝えるだけだけどさあ、っておい！）

さっきまでボーっと見つめていたその目が突然大きく開かれた、彼のその表情からして、どうやら驚いているようだった。

「帰ろー衛、さあさ行こー」

「うん、帰ろっか」

と、帰ろうと誘うのやはりさくらで、そしてその誘いを嬉しそうに答えたのは紛れもなく高垣衛本人だった。見たところ二人は一緒に下校をするようだ。しかし今まではそんなことはなかった。そもそも衛はそんなことをしていいのだろうか。

ちなみにこの二人、クラスの一部から『付き合っているんじゃない

いか？』という噂が立っており、彼のように監視などしくとも二人がどんなに仲が良いのかはそれなりにクラスの連中はうわさとして知っている。

椎名さくらは今ここで二人を監視している彼と水橋詩織の中学からの友達だった。そもそも彼が詩織に嬉しそうに彼氏が出来たつばいぞ！と伝えたときからこの事件はその重大性を現していた。

中学の頃、美咲とさくらが同じクラスではないのがイケなかったのか、それとも衛と美咲、この二人の交際をさくらが知らなかったことがイケなかったのか、また、衛が彼女がいることをさくらに教えないでこのようなことをしているのがイケないのか。そのようなことを詩織と二人で考えたが結局そんなことを考えていても仕方がないと気づき、とにかく衛を信じて見守っていようという結論に至った。が、詩織としては彼女がいるのに他の女と仲良くやっていることが腹立たしく見守るというより監視せよ。と彼にその使命を授けたのだった。

「よつと……」

その彼がそう言いながら席を立った。

「ん、静也^{せいち}今帰るのか？それなら俺も一緒に」

そう声をかけられ彼は用事があるからな、わりい。と首を横に振り、たった今出て行った二人のあとを追った。

（頼むから何も起こらないでくれ、でも俺はあまり衛の事を知らない、むしろさくらの友達だからさくらの恋を応援する立場なんだけどな……詩織の奴が衛の彼女の味方だから仕方ないか。ってか俺、

俺だよ、なんでこんなこと引き受けちゃってんだよ、思いっきりさくらからしてみれば邪魔じゃねーか……はぁ追っかけないと

50話（後書き）

グダグダな文章ですいません！神視点を多用するのが久々なものでちよっとリズム狂いました、ってかまた新キャラかよ……。この作品何人名前を持つ人がいるんでしょうね……。結構多い気がしていません。なんだかこうしてみると東方みたいな感じになってきましたね。組にはあいつとこいつがいて、みたいな……。

感想待ってます、感想を貰ったときの嬉しさは半端じゃないですよ！

51話

「ねえねえ、今日さうちらの体育でさ……」

（はぁー！衛君と一緒に帰ってるよ私！さつきからしゃべりっぱなしだったりして！ドキドキしっぱなしだったりして！）

楽しそうに二人の男女が日が暮れかけている商店街の真ん中を歩いていた。周りから見ればもうカップルにしか見えないそれを、後ろから追いかける高校生が居た。彼はとある少女に頼まれ子の二人を監視、いや、彼からしてこの二人を見守っていた。そして今日もその最中だったわけなのだ。それからもう十分だろうと判断した彼は、

「まあ問題なさそうだし、帰るとすつか」

と、言いながら、彼はくるりと身を翻した、すると目の先に一人の少女が立っていた。一瞬彼女が居ることに驚きながらも彼はその子に声をかける、

「こんなところに居るなんて珍しいな、詩織」

「ひゃっほーい！」

「おふうっ！」

「あはは『おふうっ』だつてー！」

「兄をなめんなよ、こよいい！」

「やぁあ大人の階段上っちゃうよー！」

「ぶっつっ！どこでそんな言葉を覚えてきたんだよ！」

「って、汚ねーぞ有二！ったく唾飛ばすんじゃないよ」

「仕方ないだろ、お前もさっきの聞いただろ？！嘖くわ！」

とまあ、とても楽しそうにコミュニケーションをとる高校生一同。そんな彼らを一人の女子が楽しそうに見つめていた。

（善人ホントに楽しそうだねえ、でもちよっつとこよいちゃん調子に乗ってるかもね、ってかあたしも混ざりたいなあー）

彼女は混ざりたいなあーと思い、そして次の瞬間、よし。と心の中で何かを決めて席を立ち旦那の下へ近寄っていった。

そんな彼女を見て彼は声をかける、

「お、ちょうど良いところに咲月さん！こよいをちよつとどうにかしてくれる？」

そんな旦那の頼みを二つ返事で返し旦那にまわり付く少女を引き剥がす、その少女は頑張って抵抗する。

「やだよーこよいお兄ちゃんから離れたくない」

「お兄さんは、あなたが離れてくれることを切実に願ってますよ？こよいさん」

そう言っただけで彼女は旦那の妹を引き剥がす作業に取り掛かる。そんな彼女のセリフに違和感を感じた本日のゲストは、

「咲月さんのキャラ変わってる……何キャラだ」

と、苦笑していた。そしてそんな彼女を見て目の前で行われている作業を目の当たりにしながら、

「ああ、咲月さん演じる人だからね、気にしてる暇なんてないかもよ」

「ふーん、そうなんだ」

と、有二が補足した。とかなんとかそうこう言っているうちにとりあえず彼の一難は去った。のだが、その直後。

「有ちゃん大好きだよー！あたしもこれやりたかったあー！」

「え……ええええ！？」

と、さっきまで我慢というか自重していた妻が旦那に直接攻撃し、旦那はそのまさかの行動に驚きながらもその手はしっかりと抱きしめに動いている。そんな兄をみて妹はジェラシーを感じ声を張って、

「ちょっと！？咲月姉ちゃんだけずるいよー！」

と、兄の妻に指を指す、とにかく、離れてよと引き剥がそうとしたがさっきので力の差はもう目に見えて分かつているのでどうしても行動に移せなかった。無駄だと分かったからだ、そんな彼女がくそーと心の中で悔しがっていると隣のゲストがいつの間にか立ち上がってまでなにやら言っていた。

「有ニテメエ、お前なに見せ付けてんの？こよいちゃんだけならまだ許したがコレは許せなくなってきたぜ、ふざけてんのか？なあ、ちよつくら俺がぶっ飛ばそうか？ああ？」

「せいつ！」

「ぎゃふっ！」

そのセリフが聞き捨てならなかったこよいはいつの日か兄の指を踏むおばさんを蹴っ飛ばすようにけりをお見舞いした。

「ふふふ、お兄ちゃんをぶっ飛ばそうだなってこのこよいちゃんを倒してから言うんだね！」

「しまった……これは口が滑ったようだ、そしてこの蹴り、うちの妹のそれにも勝っているかもしれないな」

この楽しそうな4人、今の彼らには後^{のち}に悲しき運命を辿ることなど誰にも想像できなかっただろう。

51話（後書き）

高校で誰かが呟いた一言。「石原都知事ばっかじゃねーの、薄いのはあんたの言葉の内容じゃなくてあんたの髪の毛だけにしとけよw」

「たくなに言っでんでしょねwってかまずいですよね青少年健全育成条例……でしたっけ？なんか話し合いもすぐに終わったみたいですよ、ええ。それこそ

「今日コンビニ行く？」 「うん、いこっか」 みたいに。

え？なんですか？「そいつ都知事馬鹿にしてんのか？」ですって？

あはは、ばれてますね、だって「僕」の将来についてつぶすようなことするんですよ？一体腹立てなくてどうしろって言うんですか（誰か「柴わんこ説浮上」）大体中学の14歳あたりから高校の18歳辺りまで結構な数の生徒（人間）が好き好んでラノベを買うつてのにそれを規制する気かよ。ただでさえ低いかもしれない収入を削るんですねーはいはい。とにかく全国区に広がらないことを祈りましょうか。僕の予想だと広がりそうな気もしますがね、しかも『あそこもやってるんだからこちらもやっておこっ』ってノリで。（ちなみにうちの中学の図書館にはラノベが置いてありました）

つてか收拾が付かなくなるので失礼します。感想下さいね、原動力になりますよ！ではでは次回もお楽しみに。

（最終回みたいな雰囲気になっているのは気にしないでください、ラストで無理やりその雰囲気を無くして置きました）

52話

日が暮れかけた商店街に二つの影があった。

その影の主である二人は小学校からの友達で、それなりに仲も良い。中学の頃はクラスが違ったのでそこまで交流はなかったがそれでもメールのやり取りをしていたので結局は小学校から仲が良いということになるのだろうか。それはともあれ、そんな二人の久しぶりの会話が始まった。

「んだよ、こんなところに居るなんて珍しいじゃん」

「私だつて自分の目で確かめたいことがあるの、だから遠いけどここまで来たの……」

「……んで？どうすんだ？あれ」

そう言つて彼はまた振り返つて例の二人の居た方向に視線を向ける、同じように彼女もその方向に視線を向けると残念そうに、

「はあ、やっぱりホントなのね……」
「たく、さくらもどうして高垣君を狙つたのかしら」

と、ため息混じりに感想を述べた。

「つてかさ……」

彼が急に話の腰を折った。それに対し、何よ。と彼女が訊くと彼は彼女の姿をじつと見て、

「詩織つてば背は高くなつたけど相変わらず胸の大きさは変わらな」

「ふんっ……」

何かを言いかけた彼は地面に膝を付け声にならない悲鳴を上げたのだ……。

（実は手繋ぎたかったりして……でもその勇気が出なかったりして……）

二人は肩を並べて下校していた。一人は高垣衛。もう一人は椎名さくら。彼らはカップルに間違われるほど仲が良い。でも衛には既に彼女が居る。そう、美咲のことだ。

椎名さくらは衛に積極的にアピールをしている。彼が好きだから振り向いて欲しいから。そんな彼女だが実は衛に彼女が居るだなんて事は前から知っている。彼と同じクラスだった子から聞いていたのだ。彼女が居る事を知っていてこんな事しているだなんて知られたくないので衛に彼女が居るということについては知らないフリをしている。

（今はこんな調子だけど絶対に振り向かせちゃったりするんだからね、私頑張るんだから……ふう、もうこんなところまで来ちゃったよ、今日はここでお別れだね、仕方ないよね）

とある一件の家の前まで来るとさくらは別れを告げる、

「衛、一緒に帰ってくれてありがと、迷惑だったらごめんね」

「いいよ、迷惑じゃないし」

「え？ホント？」

迷惑でないことに嬉さを感じたさくらは心底喜んだ。

「おう、俺嘘つかないよ？」

そう衛が言うときくらはあえて、

「ふふ、衛のそういうところ私は『大好き』だよ」

と、『大好き』というワードを加えて、ばいばい、と手を振りながら家へと入っていった。その背中を見守りながら衛は、

「……………お、おう。ん、んじゃまた明日」

と、なにやら慌てながら帰路へついた。

52話（後書き）

…… あんま面白くない。ちなみに詩織は久しぶりに会う静也にたいして少しだけドキドキしていたりします。でも彼のセクハラな発言によりその感情はどこかへ行ってしまう。恐るべき伏線破壊者^{フラグブレイカー}面白いことが浮かばないのでここで失礼します。感想ください。

53話

「ただいま」

とある一人の少女が自分の自宅へと帰宅した。彼女が自宅に帰るのは久しぶりのことだった。

昔は、家に帰るといつも先に帰っている姉と弟の二人が出迎えてくれたのだが、今回は少し急だったためか誰も出迎えてはくれなかった。そんないつもと違う感じに納得のいく違和感を感じつつ入ってきたドアを閉めた。

それから彼女は靴を脱ぎ、それからスリッパに履き替え恐らく誰かが居るであろう居間へと向かった。するとそこに向かう途中の廊下で、

「やめろよ紗希姉さきねえ！！弟を誘惑とかいじるとかホント止めてくれよーっ！」

と、彼女の弟が少し目の先にあるドアを勢い良く開け放って彼女の方へと何やら声を張り、そして慌てながら向かってきた。その慌てぶりを目にして彼女は少しホッと安心感を覚えた。

居間から飛び出た彼は危険な姉から逃れるために慌しくその足を働かせていた。が、ドアを開け目の前に突然帰ってきた姉を見て彼はえ！？と驚きその足を急に止め、そして何故ここに居るのかと言葉を並べる、

「うそ、綾姉あやねえ！？何でここに居るの……？大学は？ってか寮はどうしたのさ」

そう訊かれた彼女は少しの間を置いて、ただいま、巧たくみ。とはにかみながら言葉を返した。

いくつか弟に質問されているがその質問を彼女は気にも留めずスルーした。しかしそんな姉のその笑顔混じりの表情を見て弟は何かを感じたのか、

「綾姉……あっちでなんかあった？」

と、訊いた。しかし返ってきたその返事は彼にとって満足のいくようなものではなかった。

「……………」

それから少しの間、お互いに言葉に詰まった。綾乃は、なにやら勘繰っている巧に対して一体何を言えればいいんだろうと。そしてその巧はなんと言えば綾乃のその表情に隠れた気持ちを読みだすことが出来るのだろうか、と。そんな二人の間に微妙な空気が漂っているその時、

「お、綾乃じゃん！おっひさーどうだい？いろいろ成長したかい？」
と、さっきまで弟こと巧を自分の色気を使って遊んでいた姉が現れた。

「ちょ、紗希姉、それどこのセクハラ親父だよ……ってか雰囲気ぶち壊しだよ、今さあ少しこう、シリアスな感じに……」

と、ホントならばその後にも言葉を続けようと思った巧だったが、目の前にいる綾乃を見てその気が失せてしまった。彼の見た彼女はあははと笑っていたのだ。なんだ、『ちゃんと』笑えるのか、そう思った彼はその彼女を横目に、

「って、綾姉も笑ってんじゃねーよ」

と、苦笑しながら付け加えた。

「ふふふ、ごめん。なんか緊張が解けちゃったよ」

そんな妹の発言に、姉が何やら反応する。彼女は妹から見て羨ましがられるその胸の下の辺りで腕を組み、左腕を支えに右腕を立て、その先の人差し指を自らの唇に当て、

「え、綾乃ってば緊張してたの？何で？あ、もしこの家があたしたちでないほかの人が移り住んでたらどうしよう……。とか？」

と、彼女なりの考えを言った。が、どうやらそうではないらしい。目の前の妹が違うよーそうじゃないってば、と、苦笑している。

そんな二人を見ながら、それにしても紗希姉はなんの外的なことを言うんだ、そもそも移り住んでたら連絡するだろくに、ってか綾姉はどうして急に帰ってきたんだろ……。と巧は真剣に悩んでいた。とりあえず何かが上手く行っていないと考えるのが妥当だろう。今はそれで納得することにした巧だった。そんな真剣に物事を考えている彼の目の前でまた悩みの種が爆発する。

「ってかさ、さっきは成長したかい？って聞いたけど普通に成長してるよねーうん、服の上からでも分かるよ」

そう言いながら紗希は綾乃の胸をじつと見つめる。どうやら彼女なりに成長を確かめているようだ。そんな姉に対して妹こと綾乃は、「ちょ、やめてよお姉ちゃん！そんなに……。じろじろ見ないで……。と、恥ずかしそうに両腕で胸を隠すようにして姉に背を向ける。

「た、たた、たつくみーっ！あんたの綾姉がまた一步大人になったよー！ー」

と、弟にその喜びを分かち合おうとした。が、そんなハイテンションな姉とは違い、話し掛けられた弟は、はあーと深くため息をつき、

「この姉ホント疲れる……」
と、一人呟くのであった。

53話（後書き）

あれ、少し長いwって感じの今回でしたw（実は当初たったの789文字だったりして！ 椎名さくら風に

えと、何故か大学に居るはずの綾乃が帰ってきた回ですねー。一体彼女は どうして急に帰ってきたのでしょうか。ちなみに彼女はここに来る前に何処かの誰かさんに会いに行っています……が、残念ながら会えませんでした。そしてその残念さもあり彼女は少しだけ落ち込んでいます。（第45回のラストを参照）

あの、えと、感想を下さい、お願いします。

面白かったです、とか、 の場面に笑いましたorウケましたと少し親切にも具体的に言ってくださるところとしてはめちゃくちゃ助かったりしますよ！

あ、それ以外にもキャラに対してのツツコミでもいいですよbb
バンバン盛り上げていきましょう！

あと、本当に欲張りでしかありませんがどなたか百花繚乱様に続く二つ目のレビューを書いてくだらないでしょうか？その気はあるけどやっぱり文章にして宣伝するのは面倒だ、という事であればこのサイトを使っている知人に「俺と彼女と妹と。って作品あるんだけど、15歳のクソガキが書いてるみたいなんだよねwちよっとお前も読んでみなw」って感じで良いので紹介してみてください（URLを送ると完璧です）

なるべく多くの人に読んでもらってたくさんの意見が欲しいな、そう思う柴わんこでした。ではでは、また近いうちにお会いしまし

ゆ(う)ん

54話

商店街の真ん中を歩く二人の学生が居た。そして彼らと距離を置
きながらずっとその様子を観察している人物がここにいた……。

「今のところ、現段階では問題ないよなーってかさくらのやつ、あ
いつ衛のこと見つめっぱなしだし……」

彼はとある女子生徒の命令により、この二人を監視していた。そ
してその監視対象となっている椎名さくらは命令を下した生徒にと
って「友達の恋敵」という位置づけとなっている。まあ、冷静に考
えれば勝手に首をつっこんでいるだけなのかもしれないが、し
かしそんなことを言っていると「じゃああんたは親友の彼氏彼女が
取られる危機を目の当たりにしても何にも思わないの?！」とかな
んとか言われそうだ。

この、何とかしようとする彼女だが、結局のところ彼を通じても
ただその様子を見ているだけで何の接触も行っていない。なので、
周りから見ると今、監視対象の二人を見ている彼はただのストーカ
ーとなっている。任意同行やら事情聴取やら、そんな大事^{だいじ}には至っ
ていないのが幸いか。

平沢家、善人お泊まり生活二日目。

この日は、4人で買い物に行くか。ということになっていたのだ
が……何故か二手に分かれて別行動になった。

【お兄ちゃん大好き！チームA】平沢有二&平沢こよい

【え、言うことなんてないよ？チームB】平沢咲月&有川善人

チームAはお菓子を担当することに、そしてチームBは夕飯の食材を担当。チームAは今お菓子売り場にいた、有二とこよいだ。

「お兄ちゃんの腕をロック!!」

「こよい、痛い、痛いよ、こよい」

「これがこよいの愛なんだ……分かってくれお兄ちゃんよ」

「……なあ、ポッキーどこだっけ？」

「ス、スルーされたっ!」

うきうき気分のこよいは大好きな兄の腕にぎゅっとしがみついて離れようとしない。当の兄はそんなこと二手に分かれた瞬間に悟っていたので「ああもう好きにしろってんだ」と覚悟していた。

……にしてもやばい、俺の腕にしがみつくこよいがだんだん可愛く思えてきた、だめだって、こよい。いや、あえて冷たく接しているんだけど……出来ればそのままで、って咲月さんが居ながら俺はなんてことを。

俺の腕にしがみつき、ほぼ等間隔でこちらを見ては、えへへと微笑む妹を横目に俺はフリーの腕に掛けたカゴにどんどんお菓子を入れている、それにしてもこよい……上目遣いすごいな。同じくらしいの身長は咲月さんにはコレが出来ないから悲しいところだったりするんだよなあ。

そんな事を思っているとまたこよいがじいっと上目で、

「お兄ちゃん大好き」

なんてことを言ってくる。だけどやっぱり俺は、

「う、うるせえよ」

としか返事できない。昔はこよいのこと好きだったんだけどやっぱり咲月さんが現れてからはそういう目では見ていない、と思う。正直それは言葉だけかもしれない、やはり自分のどこかではまだコイツのことが好きなのかも知れない。でもやっぱり来年になったら大学進学とか進路について考えたり目指したり、いつかはこよいと離れ離れになる日が……ってなんだこよい？

そんな真面目なことを考えていると何やらこよいがぐいぐいと俺の腕を引っ張っている、そしてあれを見てくれと言わんばかりに指を指している、が、どうもその指がビクビク震えている。まるで怖いものを見るかのように。俺はつーつと嫌な汗が出てくるのを感じた、そして嫌な予感がするのを感じた、こよいの顔をみてその不安は更に勢いを増す。そう、事態は急変したのだ。

「な、なんだよおい……何だっけ言うんだよ」

最後にこよいの引きつった顔を見て俺はこよいの指指す方へと目を向けた、

「うそだろ……おいおい、なんだよありやあ」

そこには2人の男女がいた、男は30代前半というところか、そして女の方男に比べてとても若い、俺たちと同じくらいの子だろうか……それにしてもどこかで見たような顔、ここからの距離が遠いのもあって一体誰なのかよく思い出せない。近づけばよく顔が見えてこのモヤモヤが晴れるのだろうか、しかしこの状況を見て果たして近づく何なんてことが出来るだろうか。

事態は決して生易しいものではなかった。

男は自らの右腕を女の首へとぐっと押し込み、左手に持ったナイ

フを女の首に突きつけていた。勘弁してくれよと、それを見た俺は背中に冷やりとする何かが流れていくのを境に意識をしつかりと持ち、そしてすぐさま力ゴを置いて更に強く腕にしがみつくこよいを一旦引き離し、直後こよいの腕を強く掴みその場を離れようとした。しかし、

「待つて……待つて！」

二度も、待てとこよいは言った。一体何を考えているんだ、思わず俺は、声を荒げて言い放つ。

「馬鹿か！？早く逃げないと危ねーだろうが！！」

他の誰でもなくコイツのために俺は早くこの場を離れたい、でも何でコイツは踏みとどまるんだ。もしかしたら巻き添えを食らうかもしれないってのに。

乱れる息を整えながらも切羽詰った様子で唾を飲み込み、こよいはこう言った。

「あつ、あそこに、居るの【美咲】だよ……！何とかしないと、早く何とかしないと……！！」

54話（後書き）

明けましておめでとー！！（（全くもってシリアスブレイカーな一言。

今年も始まりました【俺と彼女と妹と。】年も明けたということですね、特に、特別なことはないんですが。（（ないのかよ

まあ前話と時間が空いたということではんの少し長めにしてあります。

つか急展開ですいません、でもトラブルはいつも突然だと思っんですよね、もし仮に伏線なんてあったら、予期した事態になってしまった……！なーんて……どこのギャグですかコレ。

というわけで今年も頑張りますよー！なので感想よろしくお願いします！評価も待ってます！では失礼します！！

55話

何故か俺はいつの間にか友人の嫁と一緒に買い物をすることになった。その友人は今彼の妹と二人でお買い物をしている、と思う。俺の考えが正しければ妹に襲われたりしてるかもしれない。彼の妹はいわゆるブラコンというやつで正直そんな妹が羨ましい、俺にも妹はいるが顔を合わせると少々棘の含まれた会話をしがちだ、まるでそれはドツギボールのようなものだ。ちなみにその妹は今俺とは違う高校に通い、アパート暮らしをしているんだとか……噂に聞けばなんかもう一人同居人がいるらしいが、もしかして男か、いやいやあいつに限って男と二人屋根の下だなんてありえねーよ、俺としてはそうでないことを祈る。

咲月は、今日の夕飯を何にしようかと悩みながら善人withカートを引き連れて食品売り場をぐるぐると回っていた、ちなみにカレーを作るか、簡単にチャーハンでも作るか、それとも久々にオムライスでも作ってみようかと悩んでいた。ちなみにオムライスを想像すると有二を学校から引きずり、自宅へ連れ込んだ事を自然と連想してしまい少し彼女の頬が緩む。

「いやぁ平和つすねー善人君ー」

「え？あぁ、平和だ……つすねー」

「くふふ、だつすねーてなによー面白いなぁ善人」

「そりやどうも」

こんな普通の楽しそうな会話をしている二人は今現在同じ空間にて事件が起こっているのをまだ知らなかった。ましてや、どのアパートで住んでいるのかも知らない妹が関わっているだなんてカー

の持ち手部分にだらーんと全体重を預けている兄の善人は想像すらしていなかっただろう、いや、そもそも事件が起こるだなんてことすら、想像していなかったに違いない。

「今頃有ちゃんたち何してんだろ」

「さあね、俺の考えることには、こよいちゃんが有二に抱きついてたりするんじゃないのー？　ってかいいの、そんな事させて」

「まあ、嫌だけどねー。でもこよいちゃんに悲しい思いをさせたく無いんだよね、だからたまにはいいやとか思ってる」

「ふーん、そうなんだ。てつきりこよいちゃんは姫川さんにとって少しお邪魔な存在だと思ってたよ」

「お邪魔だなんて、そんなことはないよ。こよいちゃんもあたしの家族の一員なんだから」

こんな話をしながらこの二人が一通り回って今から必要な食材を取りに行こうかと思っていた頃、咲月の耳に変な話が入ってきた。そう、あの話だ。

それは営業員から営業員へ話が伝わる際に聞こえたものだった、そしてその内容は咲月にとって有二とこよいの安否が気になって仕方なくなるような内容だった。

「山崎さん！」

と、一人の若い男性店員が彼より少し年上に見える店員さんに声を掛ける、その声のおかしな雰囲気から一体なんだ、と山崎と呼ばれた店員はその男性店員を、うるさいぞ、お客様に迷惑だろうが。と叱り付け、とりあえず話を聞こうと、で？　どうしたんだ森岡、と付け加えた。

すると叱られたことに対してすみません、と初めに謝罪を入れ、森岡と呼ばれた男性は目の前の山崎という男性に事情を説明した。しかしどうやらこの男性も誰かから伝えられているようで具体的なことは何一つとして知らなかった。

「実は、お菓子売り場付近にてどうやら事件が起こったそうで……」
「なっ、事件だと……！？一体それでどうなったんだ？」

「山崎さん、声が大きいですって、だから今静かにお客様の避難を進めているところです、なのであなたにも手伝ってもらおうかと思っただんです」

「あ、ああ、分かった……とりあえず、そこにいる二人の男女は俺に任せておけ」

と、いう話を咲月は聞いてしまった。そしてお菓子売り場付近というワードが彼女の心拍数を跳ね上げる。そう、お菓子売り場には大切な家族となったあの二人がいるのだ、無理もない。そして彼女は自分達を避難させると言った山崎という男性から素早く離れた。もしかすると咲月自身が二人を見つけ出しその二人を避難させようという気なのかもしれない。ここで山崎という男性の指示に従い一旦外へ出てしまうと恐らく中へはもう戻れないだろう。それはつまり咲月のやろうとしている行動に大きく妨害してくることになる、だから自分達を避難させようとしている山崎という男性からの外的を外れるために離れたのだろう。

そして突然の早歩きに焦りながらついて来た善人は咲月にどうしたの？と訊いた。

彼女は焦っていた。

ちょっと待ってよ、お菓子売り場って有ちゃんがいるところじゃない

いの……！なんでそんなところで事件だなんて起こってるのよ、だいたいい事件だなんて一生に一度遭遇するかしないかでしょ？！なんであたし達がそれに遭遇しないといけないのよ……！有ちゃん大丈夫かなあ、ケータイ掛けてみようか、出てくれるかなあ、とにかくどうか無事で居ますように。

55話（後書き）

【次回予告】（来週末までテスト期間のため）

平凡な、いやそうでもないような、でも至って普通の暮らしをしてきた彼らは突然事件に巻き込まれる、その事件の真っ只中にいる有二是こよいを連れ、離れようとするがそれをこよいが許さず有二とこよいは更に事件に巻き込まれ……！？そして二人の元に鳴り響くケータイの着信音、兄と代わりこよいが善人に言った言葉とは？そしてそれを聞いた善人の取った行動とは？ナイフを突きつけられ首から血を流しぐったりとしている美咲の運命や、いかに。乞うご期待……はしないでください。

56話

突然の事件に巻き込まれた二人、二人のずっと目の先にはナイフを人質に突きつけている男が居た。距離にしてみると近くはない、逃げようと思えば余裕で逃げられる距離だ。だからここにいる兄は妹を連れて逃げようとした、が妹はそれを拒んだ、なぜならその人質は彼女の中学時代の親友なのだったからだ……。

「美咲を助けなきゃ！お兄ちゃん！」

こよいが何かに急かされるようにそう言った、

「って言っても、お前……どうするんだよこよい」

「それは……」

次の言葉に詰まるこいつのことを真剣に思っで自分の思っていることを並べていく、

「いいか、確かに友達が目の前で危険にさらされていて助けたいと思う、その気持ちは良いと思うけどな、俺たちみたいな奴らが下手にあの男を刺激したら美咲ちゃんはどうなると思う」

「……………」

「あんなにナイフを喉に突きつけていているんだから逆に刺さらないよう注意しているはずなんだ、だから俺が考えるには、そのまま気をつけてくれないと逆に首から血が流れる事になるっつーかあの位置は防犯カメラに丸映りじゃないか？はっ、バツカじゃねーの、そして誰も店員が来ねーのはどうということだ？お客置いて逃げてんのか？」

どうもさっきからおかしい、少し俺もイライラしてきた。あの男は何がしたいんだ？人質を取って金が欲しいのか？だったらなんで

そんな場所にいるんだ？レジに行けば良いだろうが。

そんな事を思っていると一人の男性が男に何かを言った、

「おいお前！一体なにがしたいんだ！その子を離しなさい！」

すると男は、

「う、うるせえ！これは復讐だ！ここの店長へのな！」

と言った、復讐？一体何があったんだ、誰か聞きだせ、話で解決するならさっさとそうしろ。

「一体店長に何をされたんだ？」

その男性は俺の気持ちを代弁するかのように男に近づきそう尋ねた。

しかし、近づいて来た事に対して男は、

「おい！近づくなっ！こっこいつの喉が切り裂かれるぞ……！」

なんてことを言ったもんだから男性は一步後すがりをした。

それから男はこう続ける、

「おい！警察なんて呼んだら殺すまでは行かなくともこの子の首に切り傷を入れるからな！！」

それは防犯カメラに対して発した言葉だった、なるほどだからそこにいたんだな、俺は少し納得した。が、さっき言っていた復讐とは何なのか、俺はそれが気になり始めた。

そんな時俺の携帯が鳴った、この着信音は電話だ、俺は携帯を開き、相手の名前を見てハッとして、急いで通話ボタンを押してそれを耳に当てた。すると、

「有ちゃん大丈夫？！今どこ！？つかホントに大丈夫？！」

と俺のよく知る大好きな人からそんな言葉をかけられた。二度も大丈夫？と聞いてくる辺り、本当に心配してくれているんだと少し嬉しくなった。

「うん、別に大丈夫だよ、それから今お菓子売り場にいる、あと、こよいもここに」

そう答えると、

「今ね、そこで事件が起こってるの！だから有ちゃんは早くそこから避難して！」

と、言われた。しかしそれが出来ない、その理由も付け加えてこういった。

「いや、こよいのやつが離れたがらないんだ……少し咲月さんから言ってやってくれないかな？」

「わ、分かった！だから早く代わって」

それから俺はこよいに代わるように言って、電話口にかよいを出した。

「こよいちゃん、いいから早くそこから離れて」

「やだ、こよいは友達を見捨てられないよ」

「……それって一体どういうこと？」

「咲月姉さつきねえ少し、善兄よしにいに代わってくれる？これは言わないといけないってのがこよいにあるの」

そう言って少しの間があり、こよいは今起きている事件について話し出した、恐らく今話している相手は善人だろう、そして電話を切る寸前にこよいはこう言い残した、

「その人質、美咲なの……お願い、助けてあげて」

それからこよいは電話を切り、俺にそれを渡す、そして俺は一瞬、しまった迂闊だったと自分を一喝し、素早く犯人の男の方を見た、するとそこに映っていたのは……。

ぐったりとしている美咲ちゃんと、違う！俺はそんなつもりじゃなかった！と、大声を張って音を立てナイフを床に捨てる男、そしてそのナイフを遠くに蹴っ飛ばし、救急車を呼べと叫ぶ男性だった。そしてその次の瞬間、俺はうそだろ……と思わず声を漏らした。

男性が蹴ったそのナイフはこちらへと滑り込んできた、そのナイフがどんな形状なのか細かく分かるほどにまで。そしてそれを見て俺は声を漏らしたのだった、なぜならそのナイフの先端に赤い血が付いていたのだから……。

56話（後書き）

感想ください、お願いします。

また深夜から書いているのでクオリティが保障できません（現在2
6時43分）

では、眠いのでこれにて失礼します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7679k/>

俺と彼女と妹と。

2011年2月15日06時07分発行